

# にひやく寺遺跡

## 発掘調査報告書

1985

日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会

# にひやく寺遺跡

## 発掘調査報告書

昭和60年3月

日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和59年度に実施した「にひゃく寺遺跡」の発掘調査結果をまとめたものであります。

南西に蔵王を望み、馬見ヶ崎川扇状地を主な舞台とする県都山形市は、古くから各時代の遺跡に恵まれ、豊かな自然環境とともに価値ある歴史環境をかたちづくってまいりました。国指定の史跡となっている古代の低湿地集落「鳴遺跡」や県指定の史跡となっている埴輪を二段に巡らした「菅沢2号墳」などは、近年の発掘調査によって明らかにされた所産であります。

東北横断自動車道仙台寒河江線の建設に伴う埋蔵文化財包蔵地については、これまで境田C遺跡をはじめ6遺跡の発掘調査を実施し、山形県の歴史解明に大きな役割を果してきました。にひゃく寺遺跡についても、小規模な面積ながら、縄文時代の各時期に亘る遺構や遺物が検出され、当地方の歴史を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は一度壊してしまえば元に戻らない大切なものです。また土中に埋もれた遺跡は、発掘調査によって蘇ってまいります。埋蔵文化財が土地に直接刻まれた歴史である以上、土地の開発との係わりを避けて通ることはできません。県教育委員会におきましては、生活文化の向上と地域環境の整備という観点を踏まえ、今後とも文化財保護のため努力を重ねてまいる所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて、皆さまの御理解の一助となれば幸いと存じます。

最後ではありますが、調査にあたって多大な御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和60年3月

山形県教育委員会  
教育長 大竹正治

## 例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が日本道路公団仙台建設局の委託を受け昭和59年度に実施した、東北横断自動車道仙台・寒河江線建設に係わるにひやく寺遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和59年9月10日から同年11月9日までの延43日間に亘り実施した。
- 3 遺跡の所在地は、山形県山形市上山家町字大網である。山形県遺跡地図（昭和53年）には、21番として登載されている。
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者	主任調査員	佐々木洋治	(山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査)
		佐藤 庄一	( 同 埋蔵文化財係長 )
	現場主任	安部 実	( 同 技師 )
	調査員	佐藤 正俊	( 同 技師 )
		里見 等順	( 同 曹託 )
事務局	事務局長	小関 陽三	( 同 課長 )
	事務局長補佐	後藤 文夫	( 同 課長補佐 )
	事務局員	斎藤世都子	( 同 主事 )
		中島 寛	( 同 主事 )
		氏家 修一	( 同 主事 )

- 5 発掘調査にあたっては、日本道路公団仙台建設局、山形市山家本町地区、山形市教育委員会、山形県土木部道路建設課、東南村山教育事務所など関係諸機関の協力が得られた。ここに記して感謝申し上げる。
- 6 本書の作成は安部 実が担当執筆した。なお、石器の実測は辻 広美、高橋亜貴子、後藤弘子、石井浩幸、吉崎 明、鈴木道彦（山形大学学生）、村山義和（日本大学学生）があたり、挿図・図版の作成にあたっては三沢友子、佐藤達弥、徳永裕子（文化課）と米野晴美、松本美樹（山形デザイン専門学校生）の補助を得た。
- 7 本書の編集は安部 実、渋谷孝雄が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類番号は下記のとおりである。  
S T……堅穴住居跡 S K……土壤 S D……溝状遺構 S X……性格不明遺構
- 2 遺構に付した番号は、1番から順次登録してゆき61番まで使用した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺構概要図・遺構分布図・実測図中の方位記号は真北を示している。なお、グリッドの南北軸線は真北から東へ17度傾いている。
  - (2) 遺構実測図は原則として $\frac{1}{60}$ ・ $\frac{1}{200}$ の縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
  - (3) 遺物実測図・拓影図は、土器を $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ 、石器を実大・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$ で採録し、各々にスケールを付した。
  - (4) 土器実測図・拓影図の断面中「▲」印は、胎土中に纖維を含むものを表わす。また断面わきの「●」印は器表面に塗朱ある事を表わしている。
  - (5) 遺物観察表中にある〈 〉内の数値は、図上復元による推定値を表わしている。  
出土地点欄の「層位」中の「F」は遺構覆土中出土を、ローマ数字は遺跡を覆う土層番号を表わしている。
  - (6) 遺物写真是、土器が $\frac{1}{2}$ 、石器が実大、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ の縮尺とした。
  - (7) 遺物番号は、土器と石器各々に通し番号を付し、遺物実測図・拓影図、遺物観察表、遺物図版ともに共通のものである。

# 目 次

I 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
II 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	3
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	5
2 遺構と遺物の分布	5
IV 検出遺構	
1 堅穴住居跡	7
2 土 壤 他	10
V 出土遺物	
1 土 器	25
2 石 器	48
VI 調査のまとめ	
1 出土土器について	62
2 遺構と遺跡の性格について	64

## 挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第9図 S K17・31・32・34土壤	
第2図 遺跡概要図	4	S X18遺構	19
第3図 南北土層柱状図	6	第10図 S T 1・2住居跡 S K30・ 53土壤	20
第4図 遺構分布図	13	第11図 S T14・15住居跡 S K60土壤	21
第5図 S T10住居跡 S K41土壤	15	第12図 S T 12・13・16住居跡	22
第6図 S T4・5住居跡 S K38・42・43土壤	16	第13図 S T6・7・8・9・11住居跡 S K46・51土壤	23
第7図 S T 3住居跡 S K25・36 ・40土壤 S D37溝状遺構	17	第14図 土器実測図（1）	26
第8図 S K21・22・26土壤	18	第15図 土器実測図（2）	27

第16図	土器拓影図（1）	29	第28図	土器拓影・実測図（13）	42
第17図	土器拓影図（2）	30	第29図	土器拓影・実測図（14）	43
第18図	土器拓影図（3）	31	第30図	石器分布図	49
第19図	土器拓影図（4）	32	第31図	石器実測図（1）	52
第20図	土器拓影図（5）	33	第32図	石器実測図（2）	53
第21図	土器拓影図（6）	34	第33図	石器実測図（3）	54
第22図	土器拓影図（7）	35	第34図	石器実測図（4）	55
第23図	土器拓影図（8）	37	第35図	石器実測図（5）	56
第24図	土器拓影図（9）	38	第36図	石器実測図（6）	57
第25図	土器拓影・実測図（10）	39	第37図	石器実測図（7）	58
第26図	土器拓影・実測図（11）	40	第38図	石器実測図（8）	59
第27図	土器拓影・実測図（12）	41	第39図	石器実測図（9）	60

## 付 表

表1	作業工程表	3	表9	石器観察表（4）	55
表2	土器観察表	44	表10	石器観察表（5）	56
表3	遺構内出土石器集計表	50	表11	石器観察表（6）	57
表4	包含層出土石器集計表	51	表12	石器観察表（7）	61
表5	石器集計表	51	表13	石器観察表（8）	61
表6	石器観察表（1）	52	表14	石器観察表（9）	61
表7	石器観察表（2）	53	表15	縄文時代早期の土器類別一覧	63
表8	石器観察表（3）	54			

## 図 版

図版1	にひやく寺遺跡近景	図版6	精査区北側
図版2	にひやく寺遺跡近景・調査状況	図版7	土 壤
図版3	土層・遺構検出状況	図版8	精査区南西隅
図版4	精査区北西隅	図版9	精査区南東隅
図版5	精査区北側	図版10	土 器（1） 1～24

图版11	土 器 (2)	25~50	图版22	土 器 (13)	197~210
图版12	土 器 (3)	51~67	图版23	土 器 (14)	211~219
图版13	土 器 (4)	68~85	图版24	石 器 (1)	1~4
图版14	土 器 (5)	86~103	图版25	石 器 (2)	5~9
图版15	土 器 (6)	104~119	图版26	石 器 (3)	10~18
图版16	土 器 (7)	120~136	图版27	石 器 (4)	19~32
图版17	土 器 (8)	137~158	图版28	石 器 (5)	33~41
图版18	土 器 (9)	159~173	图版29	石 器 (6)	42~50
图版19	土 器 (10)	174~180	图版30	石 器 (7)	51~61
图版20	土 器 (11)	181~187	图版31	石 器 (8)	62~73
图版21	土 器 (12)	188~196	图版32	石 器 (9)	74~85

## I 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

にひやく寺遺跡は、山形盆地の東端山形市沼の辺湖（人造湖）の東方300mに位置する。山形市東部に延びる神室山系の山麓部にあたる、三方を山々に囲まれた標高171～176mの北方へ下る緩傾斜面上に遺跡は立地している。三方の山々は、南側が関根山（標高250.2m）、東側が明神山（標高346.4m）、西側が虚空蔵山（標高215.2m）である。関根山と明神山の間を大網川が縦うように北方へ流れている。遺跡はこの大網川左岸の小扇状地上にある。地目は、ホップ畑・畑地・杉林・荒地となっている。遺跡の面積は、推定で東西200m、南北100mの約20,000m<sup>2</sup>と考えられる。

### 2 歴史的環境

にひやく寺遺跡は、土地所有者が古くから遺物を採集しており、武田好吉氏によっても一度試掘調査が行なわれている。昭和37年の「山形県遺跡地名表」には登録されておらず、正式には昭和50～51年度に山形県教育委員会が行なった分布調査・試掘調査によって縄文時代早期から中期に至る遺跡であることが確認された。

付近には、飯田・大網・松山・熊ノ前・中桜田・山形西高敷地遺跡などの縄文時代の遺跡が点在している。熊ノ前遺跡は縄文時代中期大木8～10式期に営まれた大集落である。堅穴住居跡内には礎を整然と配列した複式炉が設けられており、また出土した土器・石器も多量にある。本遺跡の北方3kmにはお花山古墳群があり、発掘調査によりその姿が明らかにされた。主体部に埋納された鏡（撰文鏡）・玉・鉄製品などに目をみはるものがある。

## II 調査経過

### 1 調査に至る経過

本遺跡の大部分が東北横断自動車道仙台・寒河江線の路線内に含まれることになり、県教育委員会では日本道路公団、県土木部と遺跡の保護対策について調整を図ってきた。

昭和49年9月に県土木部長から県教育長あてに「東北横断自動車道酒田線の関連公共事業について」の問い合わせがあり、これにもとづいて昭和50～51年度に遺跡詳細分布調査を実施している。この調査で本遺跡の存在が確認されている。

路線決定に際しては、地質・地形・文化財・関連公共事業など種々の事項との調整がなされてきた。県教育委員会では関係機関との協議により、高速道路建設に伴う遺跡の破壊はやむを得ないものとして、工事着工前に緊急発掘調査を行ない記録保存とすることとし



1. にりゅく寺道跡 (國文早期～弥生時代)  
 2. 埼田道路群 (國文～平安時代)  
 3. お花山古墳群 (古墳時代)  
 4. 猿道跡 (古墳時代)  
 5. 霧城道路 (平安時代～江戸時代)  
 6. 山形西高道路 (國文中期～平安時代)  
 7. 犬ノ前道路 (國文中期)  
 8. 松山道路 (國文中期)  
 9. 松見町道路 (國文中期)

第1図 遺跡位置図

た。

調査に先だって県教育委員会では、昭和58年度に再度の試掘調査を行ない本調査の基礎資料とした。前回の昭和51年の調査にくらべて、縄文時代早期の土器が少なく、中期の土器が多く出土している。

また、緊急発掘調査においては、遺跡内の道路建設予定地に限定して行なうこととなつた。

## 2 調査の方法と経過

発掘調査は、昭和59年9月10日に始まり、同年11月9日までの実質43日間行なった。

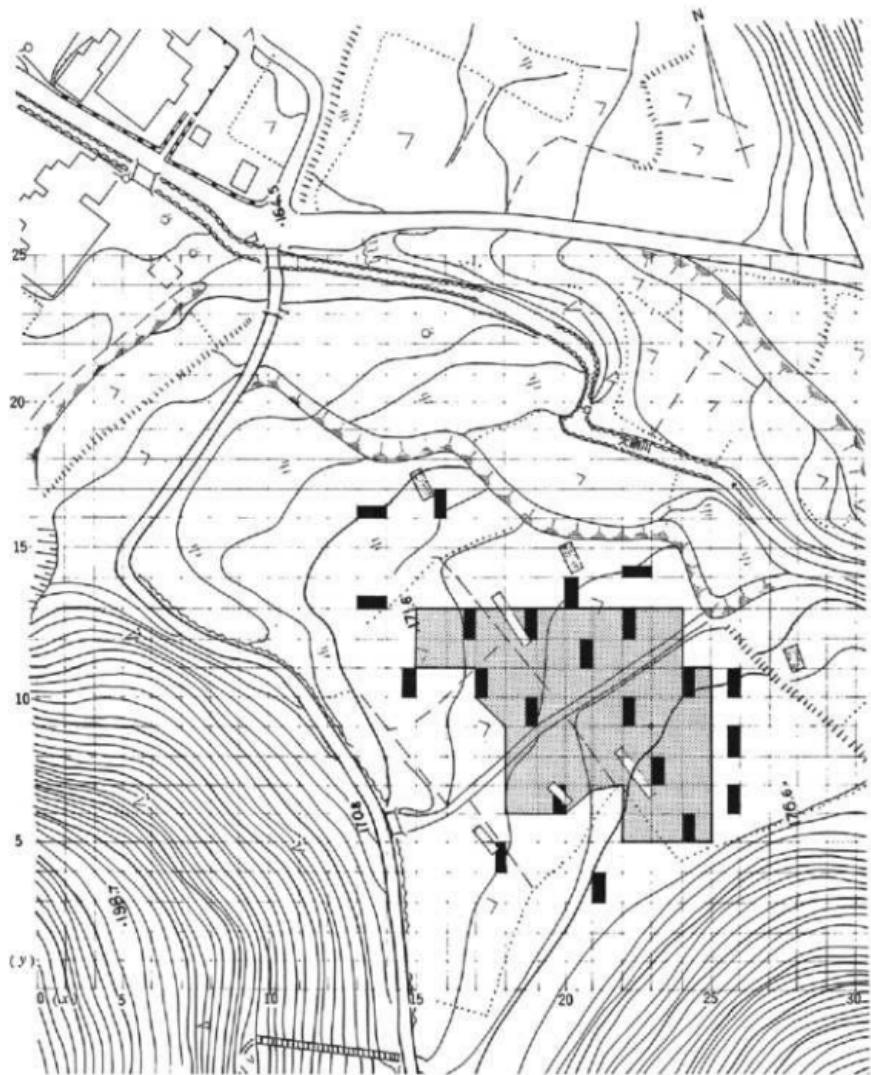
調査対象地域は道路建設予定地内、東西70m、南北120mほどである。雑草が茂っていたため、初めに草刈りを行ない遺跡の環境整備を行なった。次に道路センター杭を一部利用して、5m×5mを最小の単位とするグリッドを設定した。東西をx軸、南北をy軸とする第1象限座標を使用した。y軸は上りセンター杭No435' とNo435+20を結んだ直線を基にしており、真北から17度東へ傾いている。

グリッド設定後、2m×5mの試掘坑を21箇所（第2図）設けて、遺構・遺物の遺存状況の全体的な把握に務め、掘り下げは、地山直上又は遺物包含層下面まで行なった。北方地域は遺物包含層が確認されなかったが、五段階に段差がある（北側へ傾斜）調査区の南方で、遺構・遺物の遺存状況が良好であると確認された。精査区はこの地域、東西50m、南北40m、約1400m<sup>2</sup>の範囲とした。

16～25—6～13グリッドの繩張りを行ない、重機械（バックホー）を使用して表土の除去を行なった。この後面整理、遺構検出、同掘り下げを行ない実測図・写真等の記録に務めた。11月1日には現地において調査説明会を行ない、市民約70名の参加を得た。

表1 作業工程表

月 日 工 程	9 月												10 月												11 月																		
	10	11	12	13	14	17	18	19	20	21	25	26	27	28	1	2	3	4	5	8	9	11	12	15	16	17	18	19	22	23	24	25	26	29	30	31	1	2	5	6	7	8	9
器材搬入・撤収	■																																						■				
草 墓 整 痘		■																																					■				
トレンチ掘り		■				■																																	■				
地 区 刈 り		■			■			■																														■					
精査区表土除去																																											
精査区面整理																																											
精査区遺構検出																																											
遺構掘り下げ																																											
実測図作成																																											
写 真 撮 影	■	■				■																																					



第2図 遺跡概要図

- 51年度調査トレンチ
- 58年度調査トレンチ
- 59年度緊急調査トレンチ
- 59年度緊急調査精査区

### III 遺跡の概観

#### 1 層序

にひゃく寺遺跡は、大網川左岸の小丘状地上に立地し北面に向って傾斜面を形成している。

開墾等により、遺跡上面は約五段階に段差がついている(第4図)。ホップ畑であったため一部分に柵木を支えるアンカーの根石による攢乱が認められた。

層序は、遺物包含層、遺構の確認面等から大きく四大別が可能であった。畠地の耕作土であるI層が遺跡全域を段々状に覆っており、その下に若干の遺物を含むII層がある。II層は調査区の南側であり観察できなかった。III層は縄文時代早期から中期にかけての土器を多く含む遺物包含層だが、北東隅部分では確認されなかった。

I層 茶褐色微砂質土 (耕作土でぼさついており、小礫を含む。)

II層 暗褐色微砂質土 (若干の遺物を含む。礫の混入が認められる。)

III層 黒褐色微砂質土 (遺物包含層でぼさつき軟弱である。炭化粒子、小礫を含む。)

IV層 黄褐色土 (地山層。風化礫で硬く、一部の遺構はこれを掘りこんでいる。)

#### 2 遺構と遺物の分布

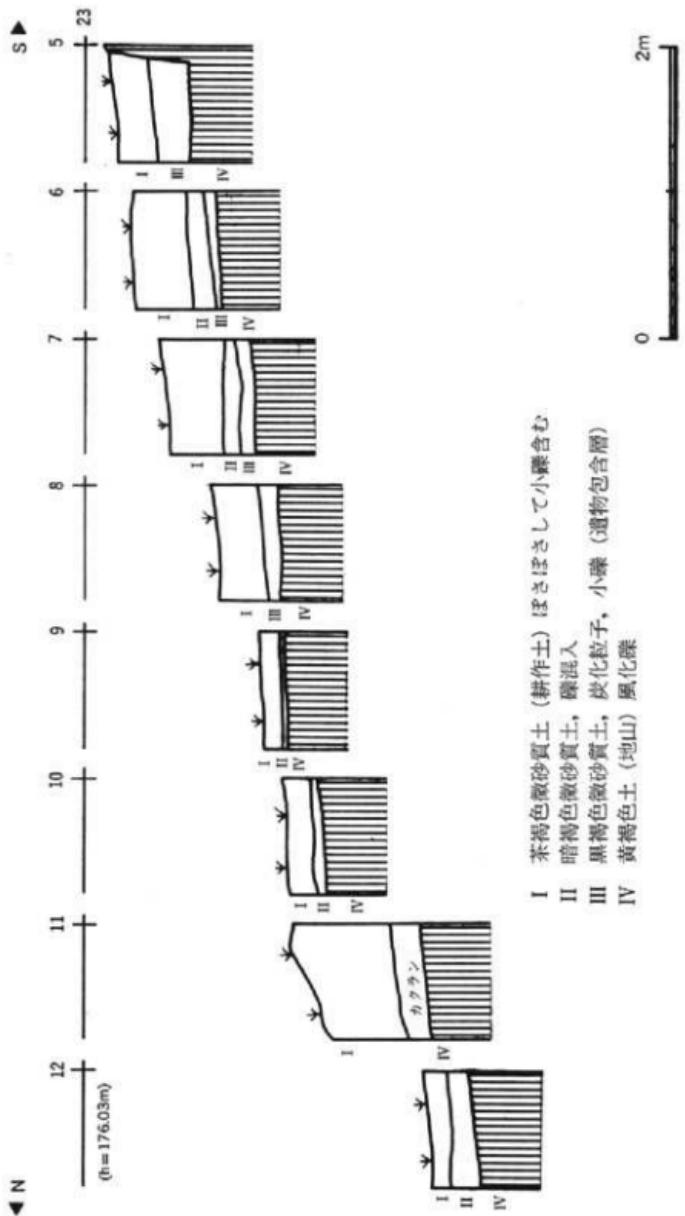
精査区内で、堅穴住居跡16棟、土壙約50基が検出された。

これらの分布を見ると大きく五つのブロックに分けられる(第4図)。S T 4・5・10を中心とする一群、S T 3・S K22・26の一群、S T 1・2の一群、S T 6～9・11を中心とする一群、S T 12～16の一群に分けられる。遺構の時期的な構成は大部分が早期に属すると考えられるが、掘り込みの浅い遺構があり、判然としないものが多い。中期に属する遺構には、S T 1・15、S K32・53・51・50・58・60がある。

全体における遺物量は、土器の場合数量的な処理が未了のため提示し得ないが、整理箱に10箱で多くはない。石器は総点数で716点の出土がある。遺構内出土のものが501点と多くその大多数をしめている。定形石器はS T10・S K25・26にまとまりが見られ、剝片はS T 1・3・10・S K25で多く出土している。特にS K36では範状石器が8点まとまって出土している。土器も遺構内出土のものが多い。包含層でも上述した五群の遺構のまとまりに対応する形で出土している。

これら遺物の分布は、遺構群との対応関係にあると考えられるが、分布上の分析把握までには至らなかった。

早期の土器群は、包含層・遺構内から偏在なく出土しているが、特に住居跡内覆土中にそのまとまりが認められる。



第3図 南北土層柱状図

## IV 検出遺構

### 1 堅穴住居跡

#### (1) S T 1 住居跡（第10図）

精査区北東隅に位置し、不整楕円形の平面プランを呈する。長径5.3m、短径4.3m、深さ30cmを測る。傾斜面を掘り込んでいるため、床が北面にわずか傾いている。壁は全周が急傾斜の立ち上がりを呈する。炉跡は検出されなかった。地山層が疊層のため柱穴の検出に難儀したが、西側で2基のピットを検出した。1つは径48cm、深さ13cmの楕円形、もう一つは長径90cm、短径46cm、深さ16cmの不整楕円形を呈する。住居跡内北東隅でフレークが集中して出土しており、石器製造の跡をうかがわせている。北端でS K30と、南側でS T 2と、中央でS K53と重複している。土層セクション、プランの検出状況から、S T 2→S T 1→S K30・53の順で新しい。遺物は土器40点、石器（以下剥片も含む）103点が出土しており、縄文時代中期中葉（大木8b式）の土器が多い。

#### (2) S T 2 住居跡（第10図）

S T 1 住居跡と重複しており、楕円形の平面プランを呈する。長径4.3m、短径4.2m、深さ20cmを測る。炉跡は検出されない。床面は地山層が疊層のため起伏がある。南東隅で径28cm、深さ8cmのピットを検出した。東側に不整形の浅い掘り込みがある。遺物は土器が12点、剥片が1点出土している。

#### (3) S T 3 住居跡（第7図）

精査区北西19-12Gにあり、隅丸方形の平面プランを呈する。長径52.5m、短径47.5m、深さ20cmを測る。壁は約45度の傾斜を呈する。炉は検出されなかった。床面は西へわずか傾いている。南西壁際で径25~30cmを測るピット3基が検出された。住居跡内中央でS K36・S D37と重複している。土層セクション、プランの検出状況から、S T 3→S K36→S D37の順で新しい。遺物は、土器37点、石器58点（うち剥片45点）が出土しており、縄文時代早期中葉の土器が多い。

#### (4) S T 4 住居跡（第6図）

精査区北西側17-18-13Gにあり、南半の調査に限られたが、東西4.2m、南北2mの検出長を測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。炉跡は検出されなかった。東側でS K38、西側でS K43と重複している。S K38→S T 4→S K43の順で新しい。遺物は、土器1点、石器9点（うち磨石3点）が出土している。

#### (5) S T 5 住居跡（第6図）

精査区北西隅、17-13Gにあり、隅丸長方形の平面プランを呈する。長径（検出長）4.5

m、短径3.6m、深さ28cmを測る。壁は急傾斜に立ち上がる。床面は平坦である。炉跡は検出されなかつたが、覆土中から焼縁が一点出土している。北東辺でSK43と、西隅でST10、住居跡内でSK42と重複している。土層セクション、プランの検出状況から、SK42→ST5→ST10→SK43の順で新しい。遺物は土器144点、石器34点があり、縄文時代早期中葉～前期初頭の土器が多い。

(6) ST10住居跡（第5図）

精査区北西隅16-12・13Gにあり、西端は未掘である。平面プランは楕円形を呈し長径（検出長）5.5m、短径4.6m、深さ30cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈し、床は平坦でしまり、全体に西側にゆるい傾斜を認める。炉跡は検出されなかつた。北端を土壤に掘り込まれ、南側でSK41を掘り込んでいる。遺物は、土器74点、石器41点の出土があり、縄文時代早期中葉～前期初頭の土器が大部分である。

(7) ST6住居跡（第13図）

精査区南西隅にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径（検出長）3.6m、短径3.3m、深さ18cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。床面は地山層を掘り込んでいるため起伏がある。炉跡は検出されなかつた。径40・60・70cmのピットが三基検出された。南側でST7・8・9と重複している。土層セクション、プランの検出状況から、ST6→ST8・9→ST7の順で新しい。遺物は、土器50点、石器7点が出土している。土器は縄文時代早期中葉～前期初頭のものである。

(8) ST7住居跡（第13図）

精査区南西隅にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径4.1m、短径3.6m、深さ25cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。壁溝は西側の一部で認められ幅36cm、深さ17cmでU字形に掘り込まれている。炉跡は検出されなかつた。床面は地山の風化疊層を掘り込んでいるため起伏があり、全体が西側へゆるく傾斜している。径25～40cmのピットが6基検出された。SK51・ST6・8・9と重複しており、ST6→ST8・9→ST7→SK51の順で新しい。遺物は土器が25点出土しており、縄文時代早期中葉～中期中葉のものがある。

(9) ST8住居跡（第13図）

精査区南西隅にあり、不整隅丸方形の平面プランを呈する。長径4.5m、短径（検出長）4m、深さ10cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。炉跡は検出されなかつた。床面は起伏があり、西へゆるく傾斜する。SK50・51・56・57・46、ST6・7と重複しており、ST6→ST8→ST7→SK51の順で新しい。遺物は、土器が40点、石器が3点出土している。

#### (10) S T 9 住居跡 (第13図)

精査区南西隅にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径5.2m、短径(検出長)2.9m、深さ20cmを測る。壁は急傾斜の方ち上がりを呈する。炉跡は検出されなかった。床面は少々起伏があり、西へゆるく傾斜する。径30cmのピット4基を検出した。S T 6・7・11と重複しており、S T 6・11→S T 9→S T 7の順で新しい。遺物は、土器14点、石器22点出土しており、縄文時代早期中葉の土器が多い。

#### (11) S T 11住居跡 (第13図)

精査区南西にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径4.6m、短径(検出長)2.9m、深さ13cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。炉跡は検出されなかった。床面は、地山層の疊層を掘り込んでいるため少々起伏があり、西へゆるやかに傾斜している。径40cm、深さ8cmと径60cm、深さ34cmのピット2基が検出された。S K45・52、S T 9と重複しており、土層セクション、プランの検出状況から、S T11→S T 9・S K52→S K45の順で新しい。出土遺物は無い。

なお、精査区南西隅の住居跡S T 6・7・8・9・11が重複しており、S T 6・11→S T 8・9→S T 7の順で新しい。

#### (12) S T 15住居跡 (第11図)

精査区南東にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径4.7m、短径3.8m、深さ25cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈し、全周している。炉跡は検出されなかった。床面は平坦でしまっており、西側へゆるやかに傾斜している。他遺構との重複は無い。遺物は、土器が60点、石器(剣片)1点出土している。縄文時代中期中葉の土器が大部分である。

#### (13) S T 14住居跡 (第11図)

精査区南東にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径4.65m、短径3.65m、深さ30cmを測る。壁は約45度の傾斜をもって立ち上がる。炉跡は検出されなかったが、焼跡が1点出土している。床面は平坦でしまっており、北西側へゆるやかに傾斜している。住居跡南側でS K60と重複しており、S T14→S K60の順で新しい。遺物は、土器が18点、石器4点が出土している。縄文時代中期中葉の土器が多い。

#### (14) S T 12住居跡 (第12図)

精査区南東隅にあり、楕円形の平面プランを呈する。長径4.15m、短径3.25m、深さ20cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈している。壁溝は東西両側で検出された。東側は幅30cm、深さ7cmを測りU字形に掘り込まれている。西側は二つあり、北方のものは幅20cm、深さ9cm、南北のものは幅22cm、深さ6cmで供にU字形に掘り込まれている。炉跡は検出されなかった。床面は平坦でしまっており、全体に北西側へゆるやかに傾斜している。

南側でS T 16と重複しており、S T 16→S T 12の順で新しい。遺物は、土器が9点、石器が7点出土している。

#### (15) S T 16住居跡（第12図）

精査区南東隅にあり、不整の隅丸方形の平面プランを呈すると考えられる。長径（検出長）3.5m、短径3.3m、深さ15cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。壁溝は検出されない。炉跡は検出されなかった。床面は平坦でしまっており、全体に北西方向へゆるやかに傾斜している。柱穴は検出されなかった。北側でS T 12と、南側でS T 13と重複している。S T 16→S T 12・13の順で新しい。遺物は、土器が7点、石器が3点出土している。

#### (16) S T 13住居跡（第12図）

精査区南東隅にあり、不整梢円形の平面プランを呈する。長径3.7m、短径3.25m、深さ20cmを測る。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。壁溝は検出されない。炉跡は検出されなかった。床面は平坦でしまっており、北西方向へゆるやかに傾斜している。柱穴は検出されなかった。北側でS T 16と、南側でS K 61と重複している。S T 16・S K 61→S T 13の順で新しい。遺物は、土器が12点、石器が1点出土している。土器は、縄文時代中期のものがほとんどである。

#### (17) 住居跡覆土について

S T 4・5・10の精査区北西隅の住居跡群を除けば、各住居跡とも覆土内に凝灰岩質の大小砾が多量に混入している。南方にある関根山、西方にある虚空藏山からの流れ込みによるものかと考えられる。また床面も地山層を掘り込んでいるものは起伏があり、柱穴の検出が困難であった。

## 2 土壌他

#### (1) S K 17土壤（第9図）

精査区中央東よりにあり、梢円形の平面プランを呈する。長径2.85m、短径2.75m、深さ80cmを測る。壁は約45度の傾斜で立ち上がる。底は平坦である。西側でS X 18と重複しており、土層セクション、プランの検出状況から、S X 18→S K 17の順で新しい。遺物は、土器が158点、石器が8点（以下剝片も含む）出土している。覆土下層、2～3層中にかけて、弥生時代中期初頭の土器が出土しており、本土壤は当時期の所産であろう。

#### (2) S X 18遺構（第9図）

精査区中央東よりにあり、不整梢円形で環状の平面形を呈する。長径2.8m、短径2.2m、深さ10cmを測る。底部から壁にかけてはゆるやかな傾斜を呈する。S K 17と重複しており、S X 18→S K 17の順で新しい。風倒木かと考えられる。埋積土中から、土器25点、石器5点が出土している。縄文時代中期中葉の土器が大部分である。

### (3) SK21土壙（第8図）

精査区中央北より20-11Gにあり、不整の楕円形を呈する。長径2m、短径1.64m、深さ20cmを測る。壁は傾斜で立ち上がり、底面はやや起伏がある。遺物は土器が2点ある。縄文時代早期中葉のものである。

### (4) SK22土壙（第8図）

精査区中央21-11Gにあり、不整楕円形の平面プランを呈する。南東辺が溜池の設置によって破壊されている。長径3.8m、短径（検出長）2.7m、深さ34cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかな傾斜面を呈する。遺物は土器が1点、石器が2点出土している。

### (5) SK26土壙（第8図）

精査区中央西より19-20-10-11Gにあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径4.9m、短径4.3m、深さ85cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかな傾斜面を呈する。覆土中には多量の礫が混入している。遺物は土器46点、石器4点出土している。縄文時代早期中葉の土器が大部分である。

### (6) SK41土壙（第5図）

精査区北西隅にあり、隅丸長方形の平面プランを呈する。長径（検出長）3.8m、短径2.8m、深さ25cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がり、底面は平坦である。ST10と重複しておりSK41→ST10の順で新しい。遺物は土器が13点、石器が9点出土している。

### (7) SK36土壙（第7図）

ST3と重複しており、ST3→SK36の順で新しい。隅の丸い不整長方形の平面プランを呈し、長軸がST3と並行している。長径3.5m、短径1.8m、深さ50cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦で、北側にゆるやかに傾斜している。南側で径30~50cmの河原石が3点まとめて検出された。遺物は、土器が21点、石器が20点出土している。竪状石器が8点まとめて出土している。土器は、縄文時代早期中葉のものだけである。

### (8) SK25・40土壙（第7図）

精査区北側19-13Gにあり、SK25とSK40が重複している。SK40→SK25の順で新しい。両土壙とも北側部分については未検出である。

SK40は、楕円形の平面プランを呈すると考えられる。検出長は、東西で4.3m、南北で1.9m、深さ40cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。出土遺物は無い。

SK25は、楕円形の平面プランを呈すると考えられる。検出長は、東西で1.2m、南北1.65m、深さ55cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は、土器が65点、石器が47点出土している。土器は、縄文時代早期中葉のものと中期のものが混在している。

#### (9) S K31土壤 (第9図)

精査区南東隅23—13Gにあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径2.9m、短径1.55m、深さ50cmを測る。壁は上半が緩傾斜、下半が急傾斜の立ち上がりを呈する。底面は平坦である。遺物は、土器が51点、石器が34点出土している。土器は縄文時代早期中葉～末葉にかけてのものが大部分である。

#### (10) S K32土壤 (第9図)

S K31の西側にあり、不整楕円形の平面プランを呈する。長径2.5m、短径1.66m、深さ22cmを測る。壁から底面にかけてゆるやかに傾斜する。西側に幅70cmの川跡があり、時期は不明である。遺物は、土器が2点、石器が2点出土している。土器は縄文時代中期中葉の所産である。

#### (11) S K34土壤 (第9図)

S K32の北側にあり、北半は未掘である。検出長は、東西3m、南北44cm、深さ65cmを測る。壁は緩傾斜で立ち上がる。遺物は、土器が4点、石器が1点出土している。土器は縄文時代早期中葉のものである。

#### (12) S K30土壤 (第10図)

S T 1と重複しており、S T 1→S K30の順で新しい。不整楕円形の平面プランを呈する。長径1.55m、短径1.4m、深さ55cmを測る。壁は南側が急傾斜で、北側が緩傾斜で立ち上がる。遺物は、土器が4点出土しており、縄文時代早期中葉のものである。

#### (13) S K53土壤 (第10図)

S T 1と重複しており、S T 1→S K53の順で新しい。平面形は不整楕円形を呈する。長径1m、短径90cm、深さ25cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。遺物は、土器が83点、石器が11点出土している。土器は縄文時代中期中葉の所産である。

#### (14) S K60土壤 (第11図)

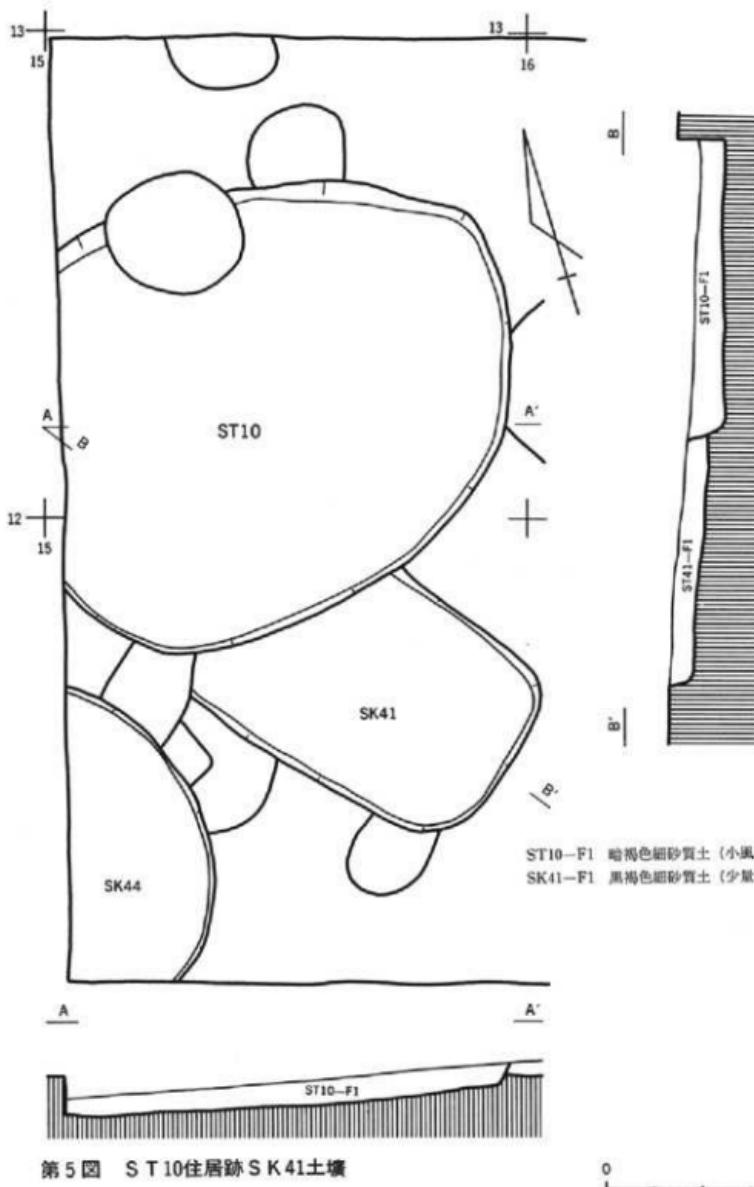
精査区南東隅25—7Gにあり、楕円形の平面プランを呈する。長径3.2m、短径2.55m、深さ27cmを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底は平坦で、ゆるやかに北側へ傾斜する。遺物は、土器が7点出土している。縄文時代中期中葉の所産である。

#### (15) S K38土壤 (第6図)

精査区北西18—13Gにあり、北半は未掘である。平面形は楕円形で、東西3.6m、南北2.8m、深さ56cmを測る。二段階に掘り込まれており、中央にさらに楕円形の掘り込みがある。壁は急傾斜で立ち上がる。底面及びテラス部は平坦で、西側へゆるやかに傾斜する。西側でS T 4と、南側でS K39と重複している。S K39→S K38→S T 4の順で新しい。遺物は、土器が9点、石器が2点出土している。土器は縄文時代早期中葉のものである。

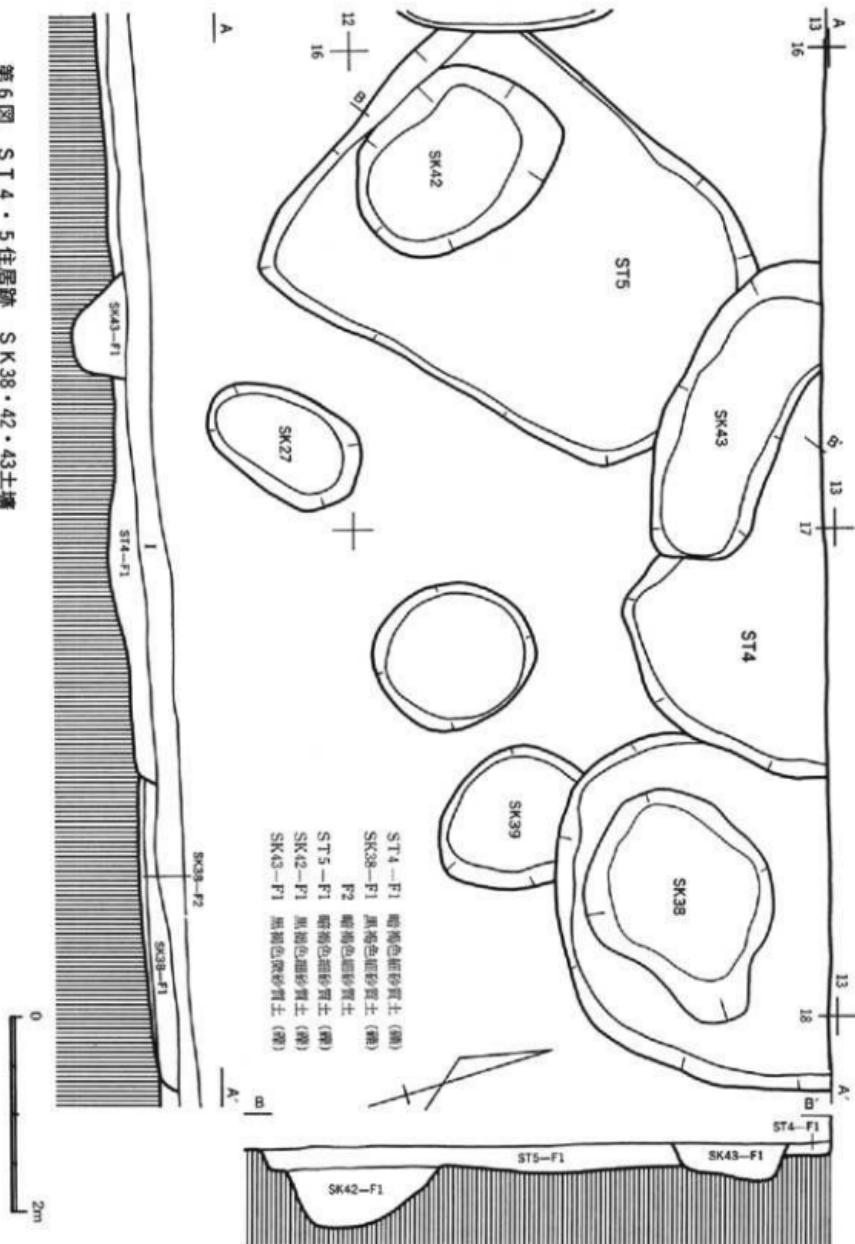


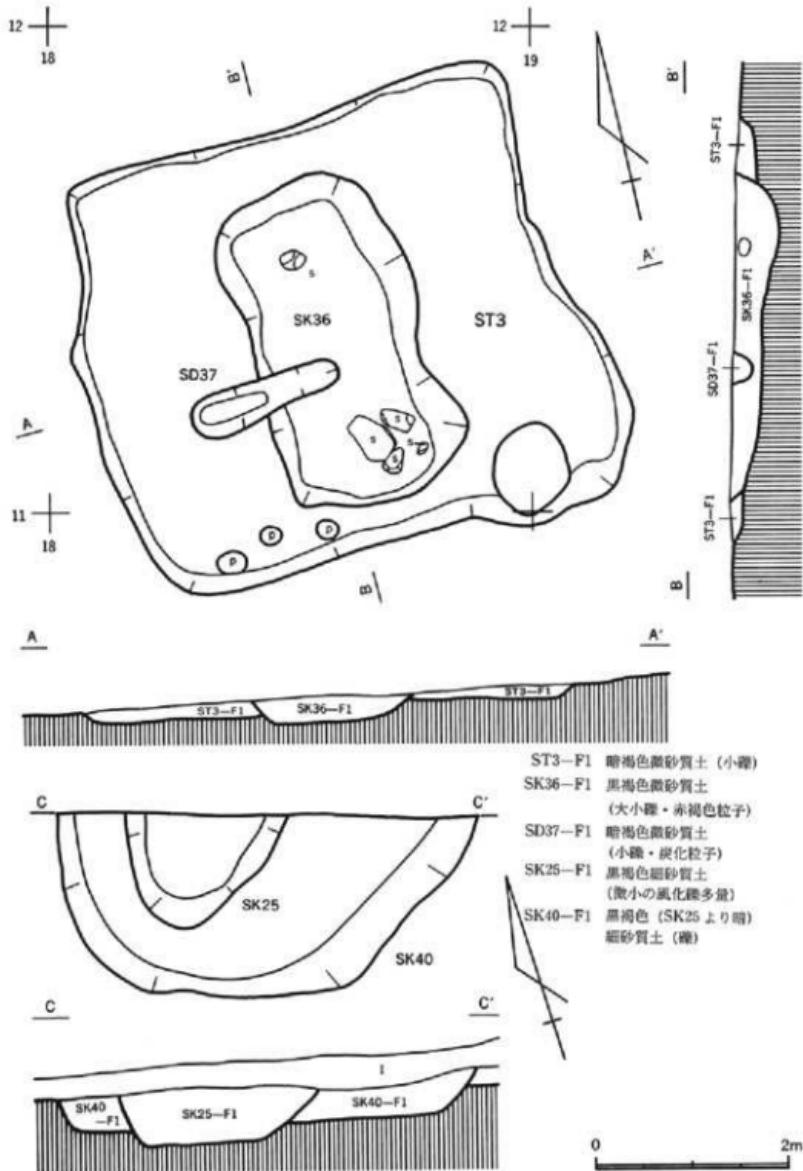
第4図 遺構分布図 ( $S = \frac{1}{200}$ )



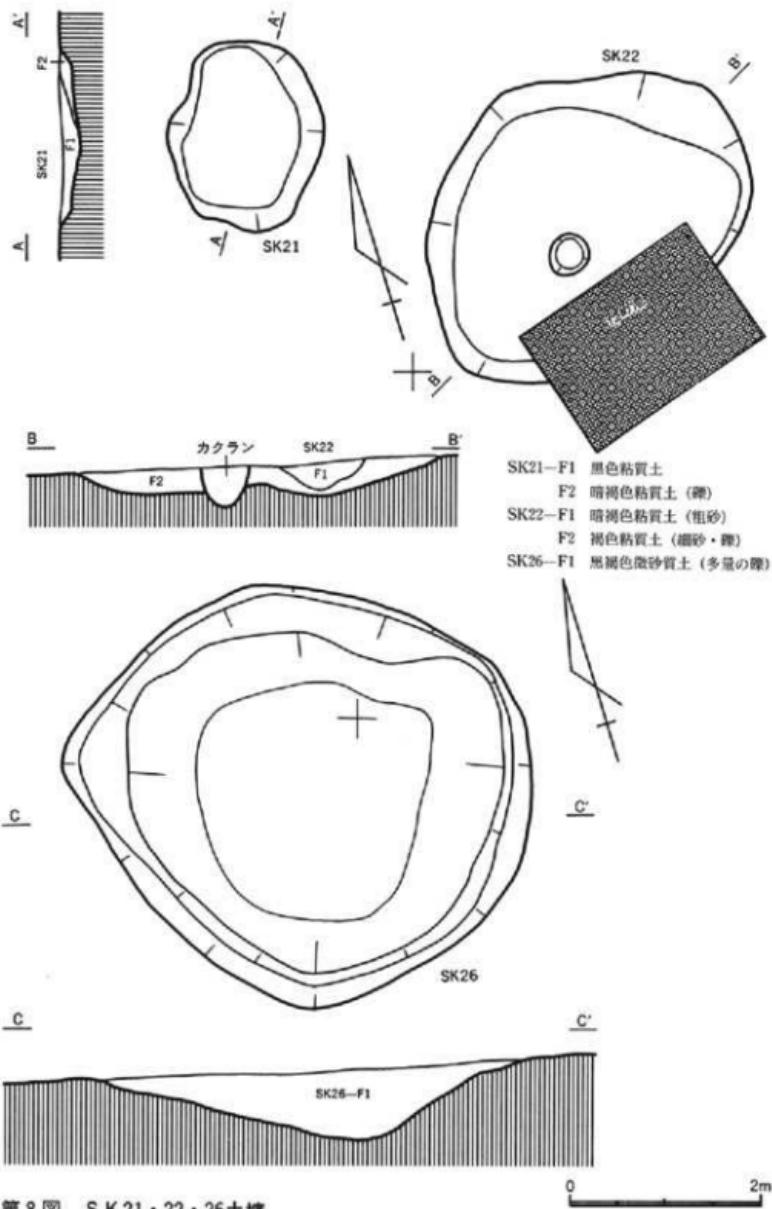
第5図 ST10住居跡 SK41土壤

第6図 ST4・5住居跡 SK38・42・43土壤

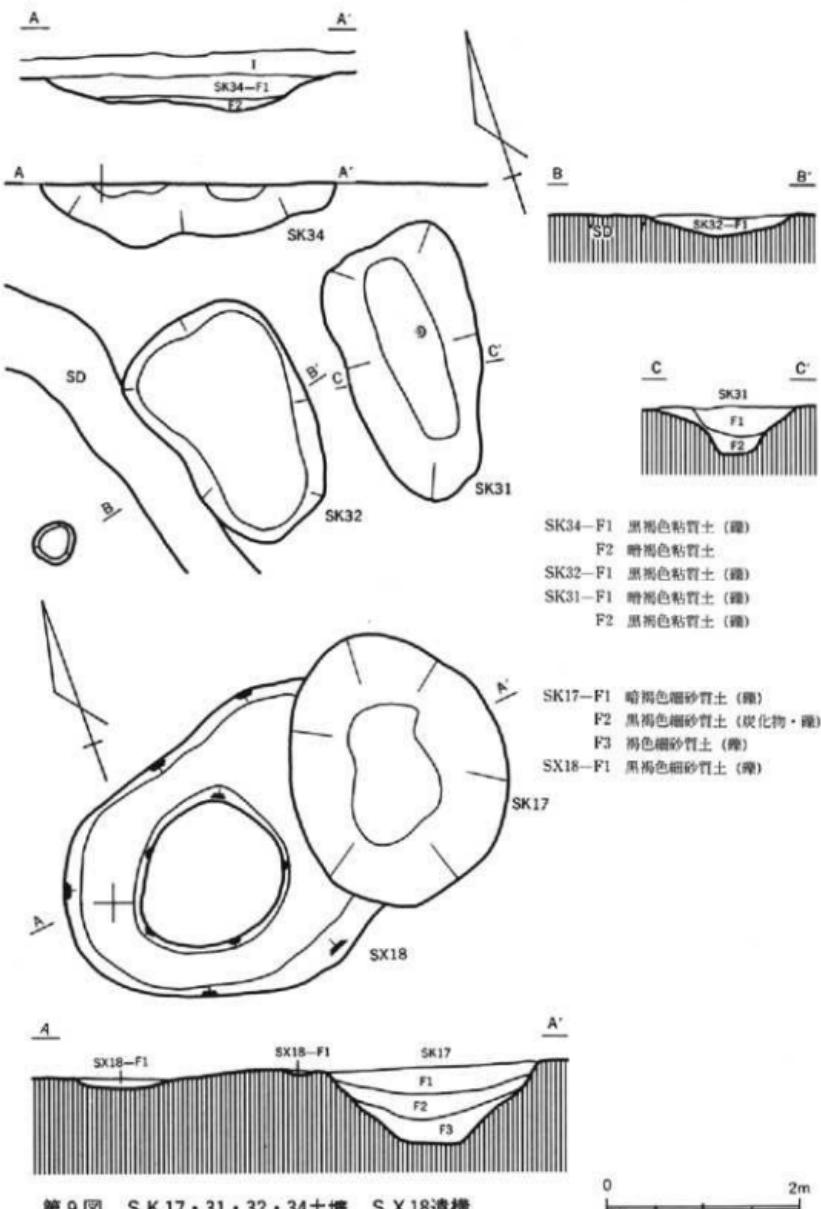




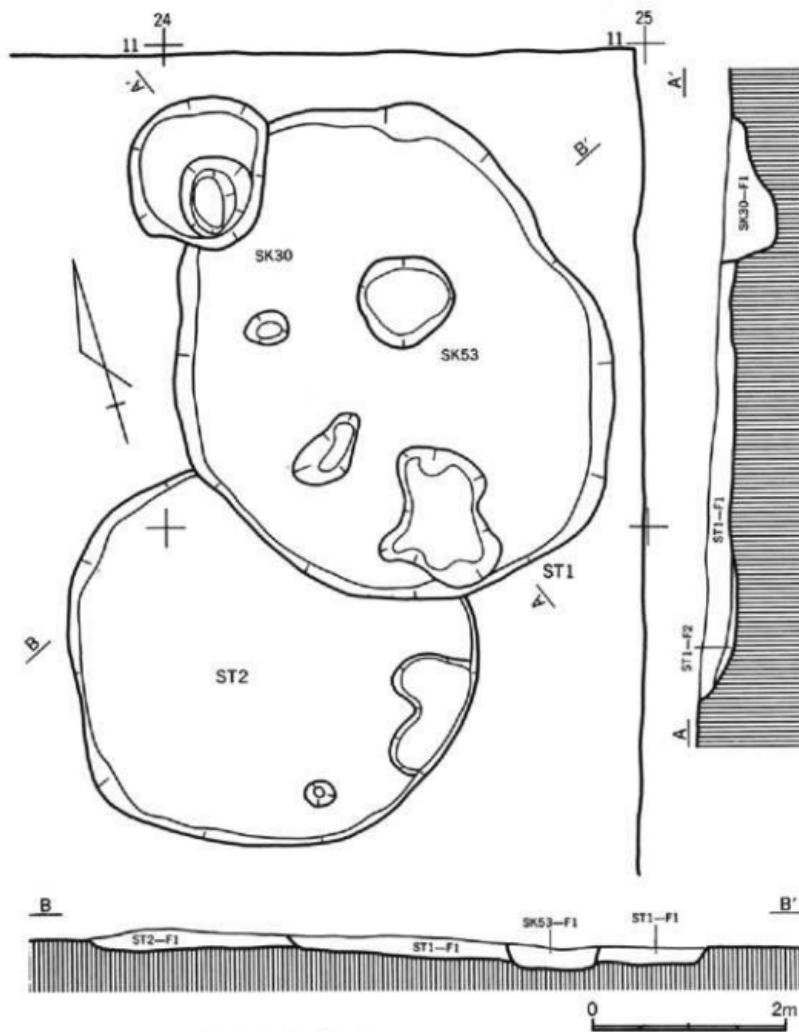
第7図 ST3住居跡 SK25・36・40土壤 SD37溝状遺構



第8図 SK21・22・26土壤

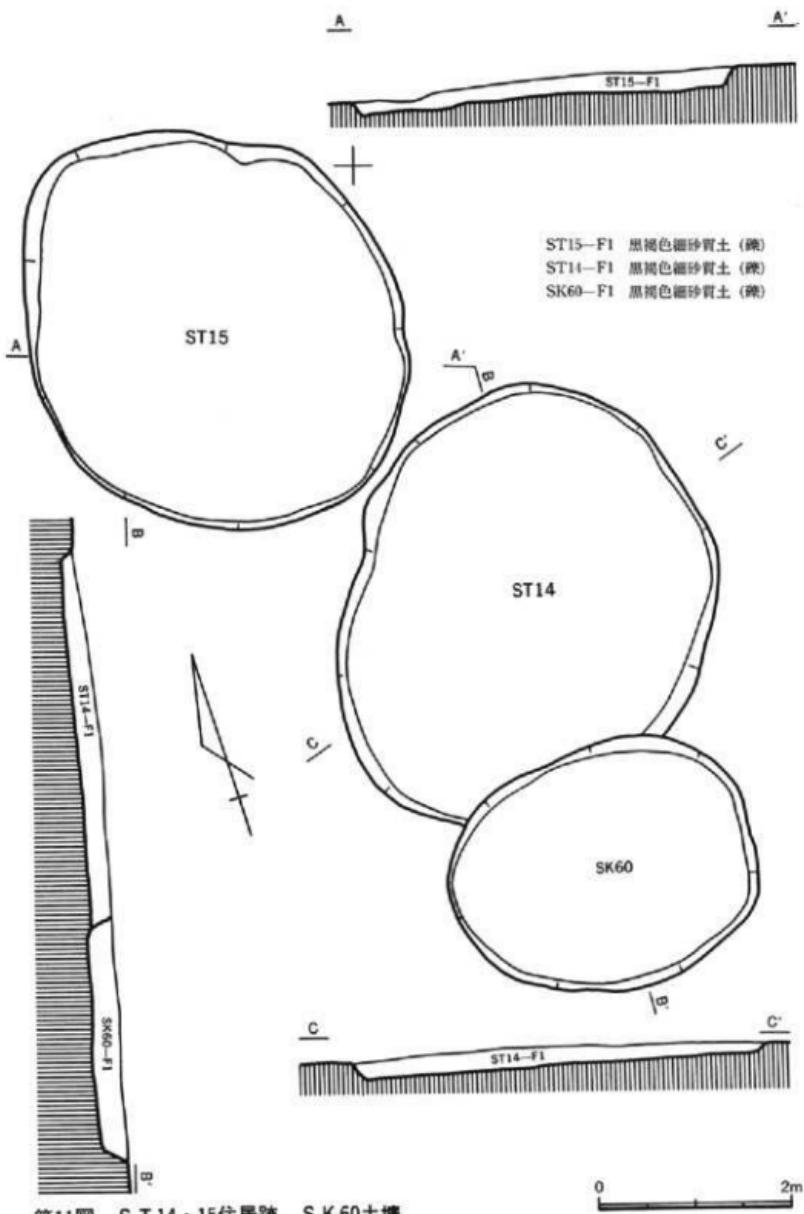


第9図 SK17・31・32・34土壤 SX18遺構

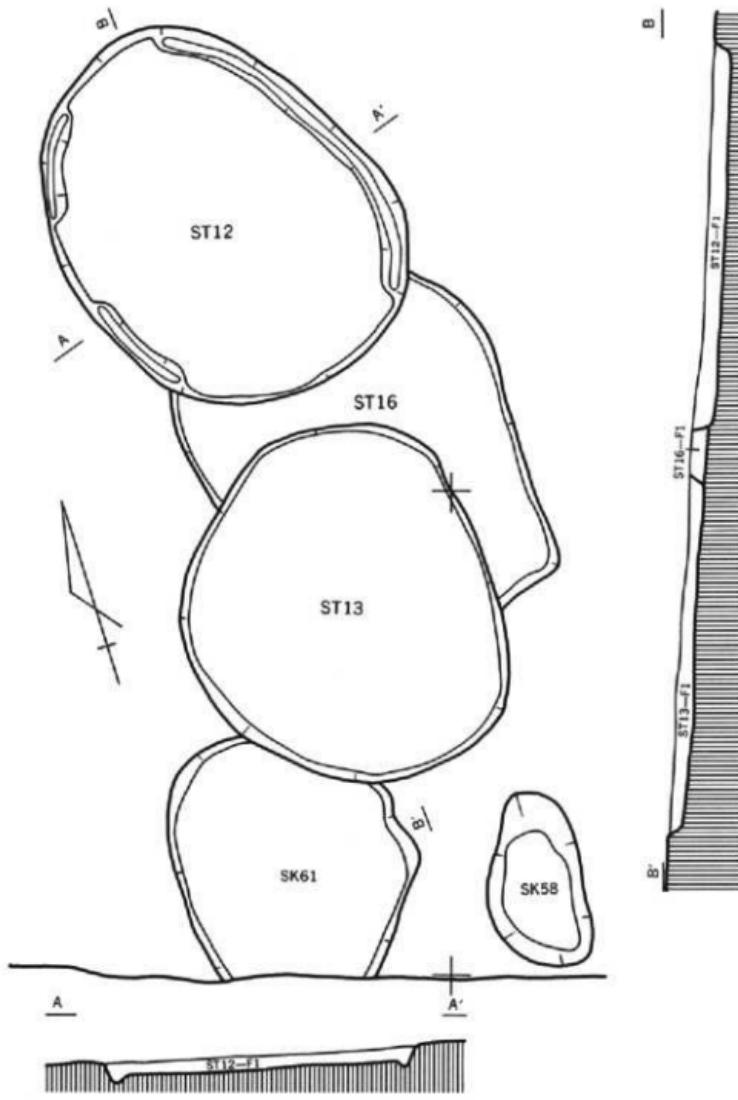


- ST1-F1 黑褐色微砂質土 (炭化粒子・礫)
- F2 暗褐色微砂質土 (礫)
- SK53-F1 黑褐色細砂質土 (炭化粒子)
- SK30-F1 黑色微砂質土 (炭化粒子・礫多量)
- ST2-F1 暗褐色微砂質土 (礫)

第10図 S T 1・2住居跡 SK30・53土壤



第11図 S T 14・15住居跡 SK 60土壤



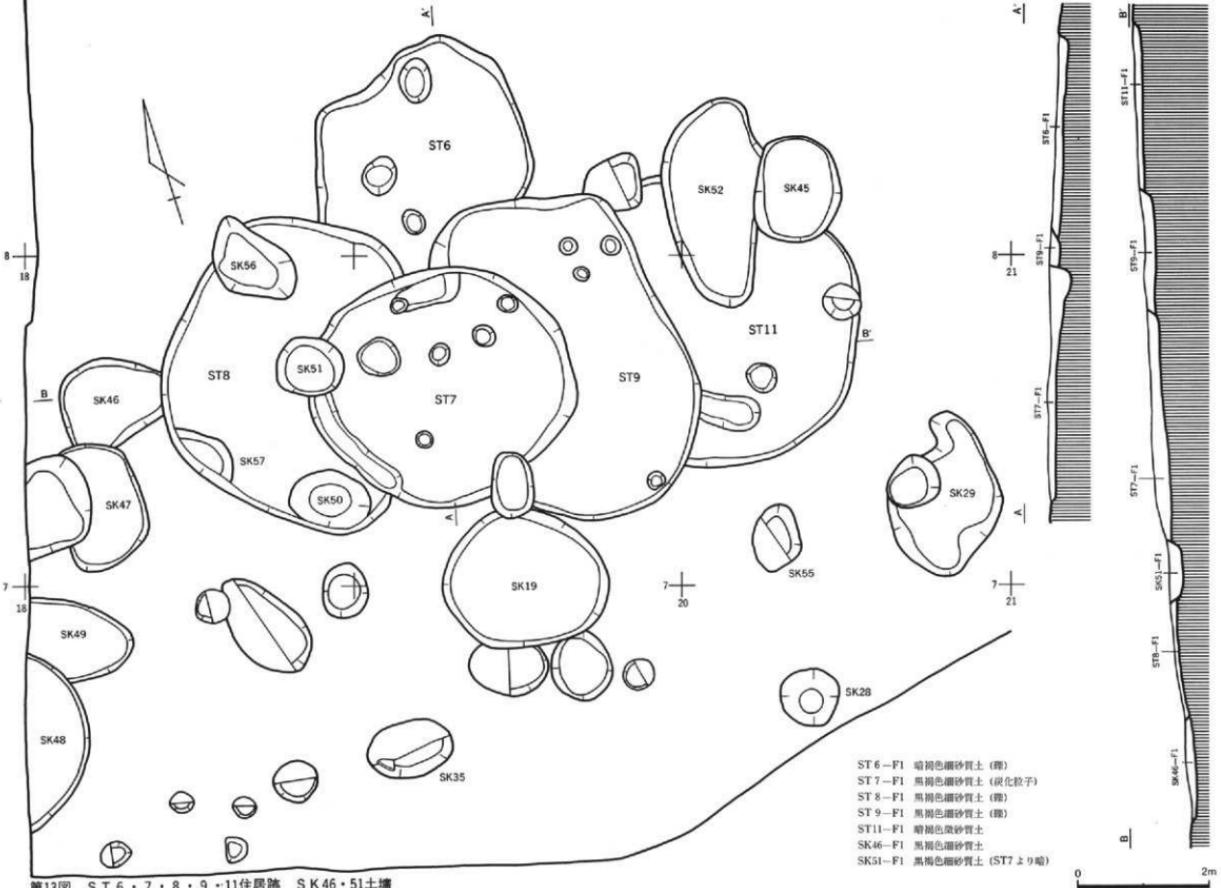
ST12-F1 黑褐色細砂質土(縞)

ST16-F1 黑褐色微砂質土(縞)

ST13-F1 黑褐色細砂質土

第12図 S T 12・13・16住居跡

0 2m



第13図 ST 6・7・8・9・11住居跡 SK 46・51土壤

## V 出土遺物

### 1 土器

本遺跡より出土した土器は、縄文時代早期から弥生時代中期にまでおよぶ多様なものがある。数量的には、整理箱に10箱ほどあり多くはない。量的な比率では、縄文時代中期中葉が多く、以下早期、前期前葉、弥生時代中期、縄文時代晚期の順となる。出土した土器はすべて破片であり、完形品は皆無であった。

以下では、時期別に群に分け、さらに胎土・焼成、施文技法・文様モチーフ、文様要素の組み合わせ等から類別を行ない概述する。

#### 第1群土器（縄文時代早期）

##### 1類 沈線文系土器（第16図1、図版10—1）

斜格子・平行・矢羽根状沈線文を器面に施文するもの（19—13—1出土）と、矢羽根状・平行沈線文を施文するもの（SK25—F1出土）が2点ある。同一個体と考えられる。沈線は1本工具によって、器面に対して斜めに施文されている。格子文の交点には縦位の短沈線が施されている。織維を含まず、焼成は良好である。

##### 2類 沈線文土器（第16図2～24、第17図25～36、図版10—2～24、図版11—25～36）

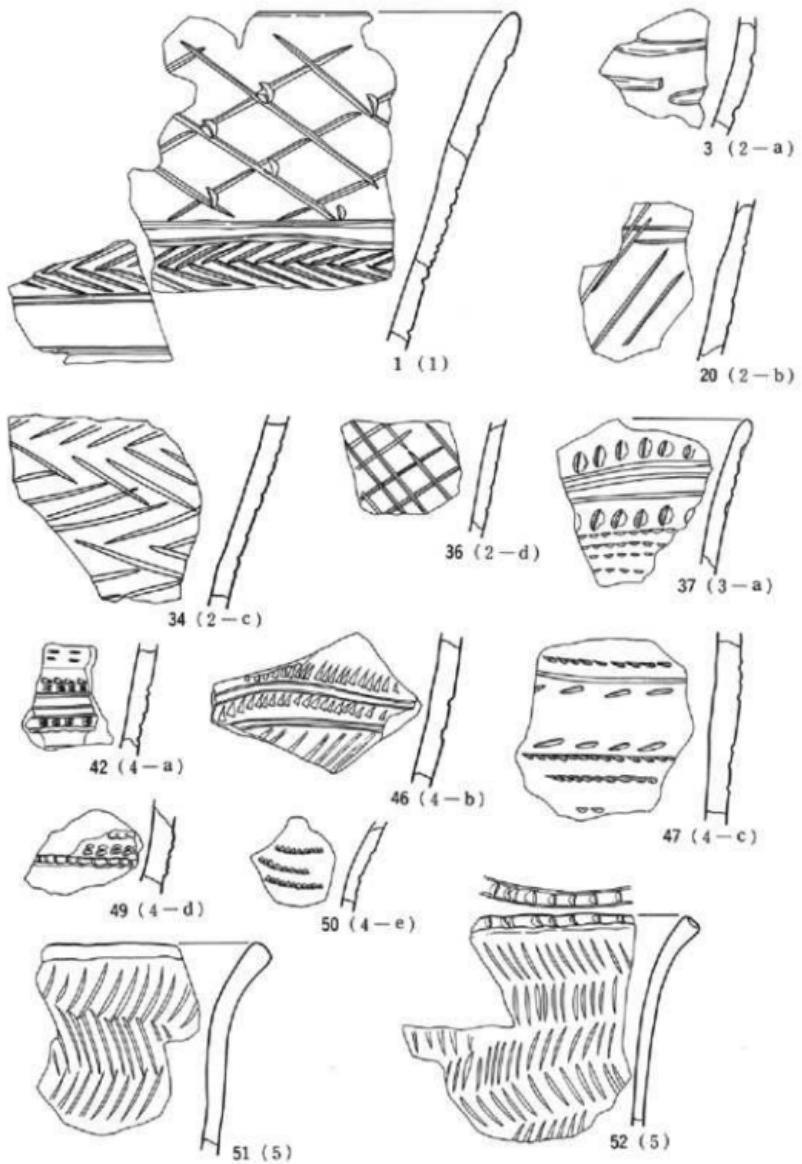
a：太沈線で横走するものと、横走・斜行するものがある（第16図2～10）。b：沈線文で横走・斜行するもので、細い沈線である（第16図11～24、第17図25～33）。c：く字状・斜行沈線文（第17図34・35）。d：斜格子状沈線文（第17図36）。以上aを除いては細い一本工具による施文である。

##### 3類 爪形刺突文+横走沈線文土器（第17図37～41、図版11—37～41）

a：爪形刺突文+横走沈線文+刺突文、一方向きの噴出皺付抓盲孔が連続してつき、噴出皺の盛り上がりが少ないもの（第17図37・38）と、盛り上がりの無いもの（第17図30・40）がある。b：爪形刺突文で器表面に擦痕がある（第17図41）。

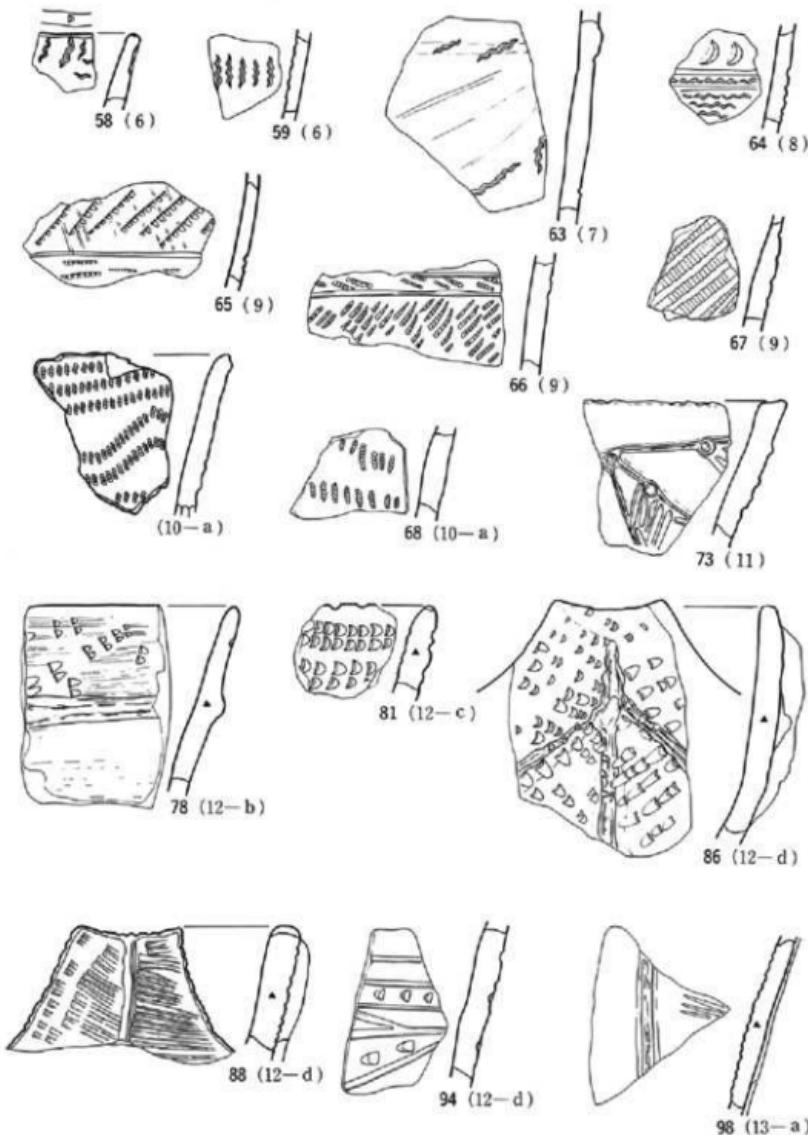
##### 4類 刺突文+押引文+沈線文（第17図42～50、図版11—42～50）

a：刺突文+横走沈線文、沈線に並行して擦痕様の刺突文がつくもの（第17図42～45）  
b：く字状刺突文+横走沈線文、刺突文と沈線文が並行し施文され、やや波状を呈する。器表面には擦痕が観られる（第17図46）。c：押引文+刺突文+沈線文、先端がやや鋭利な一本工具による押引文、斜位の浅刺突文がつくもの（第17図47・48）。d：押引文+刺突文、a類と同じ擦痕様の刺突文が横走するもの（第17図49）。e：押引文、極小のく字状押引文が並行して施文されるもの（第17図50）。



第14図 土器実測図 (1) \* ( ) 内は分類番号

0 5cm



第15図 土器実測図(2)

0 5cm

##### 5類 貝殻腹縁圧痕文（第18図51～55、図版12-51～55）

貝殻腹縁圧痕文（鋸齒状でない貝）が、矢羽根状に縦位並列に施され、他の文様要素を認めないもの（第18図51・53～55）と、口唇部に爪形刺突があるものがある（第18図52）。

##### 6類 貝殻腹縁圧痕文（第18図56～61、図版12-56～61）

貝殻腹縁圧痕文（鋸齒状）がやや間隔を置いて縦位並列に施され、他の文様要素を認めないもの（第18図56・57・59～61）と、口唇部に刺突文があるものがある（第18図58）。

##### 7類 貝殻腹縁圧痕文+沈線文（第18図62・63、図版12-62・63）

貝殻腹縁圧痕文（鋸齒状）が間隔を置いて斜位に施されるもの（第18図62）と、斜行する浅い沈線が施されるもの（第18図63）がある。

##### 8類 貝殻腹縁圧痕文+横走沈線文+爪形刺突文（第18図64、図版12-64）

貝殻腹縁圧痕文（鋸齒状）が横位並列にあり、横走沈線間にも施文される。爪形刺突は縦位に深く施されている。

##### 9類 貝殻圧痕文、条痕文+沈線文（第18図65～67、図版12-65～67）

貝殻腹縁圧痕文（鋸齒状）であるが、6～8類と異なり貝表面を土器面にねかせて施文したもの（第18図65）、貝殻貝表圧痕文が斜位に施文されるもの（第18図66）、貝殻条痕文を斜位に施文したのち、沈線により斜格子状文としたもの（第18図67）がある。

##### 10類 絡状体圧痕文土器（第19図68～72、第24図165、図版13-68～72、図版18-165）

a：絡状体圧痕文が施され、他の文様要素を認めないもの（第19図68～71、第24図165）  
b：口縁部に爪形刺突文が縦位に施され、絡状体圧痕文が施されるもの（第19図72）。

##### 11類 微隆起線文+刺突文+沈線文（第19図73、図版13-73）

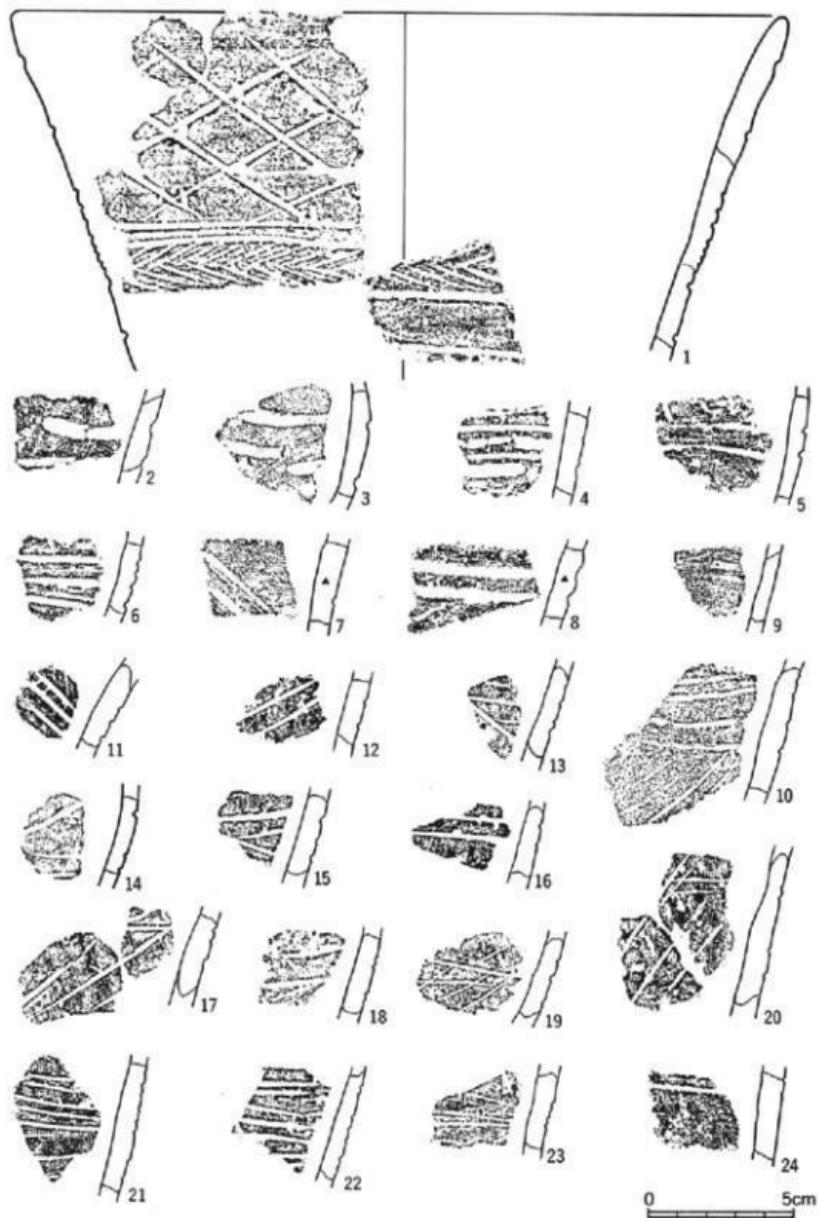
微隆起線により区画文を配し、区画内には沈線文が配され、微隆起線上には円形刺突文が付く。裏面には粗いナデ痕がある。

12類 半截竹管文を主体とした文様構成をもつもの（第19図74～85、第20図86～96、図版13-74～85、図版14-86～96）

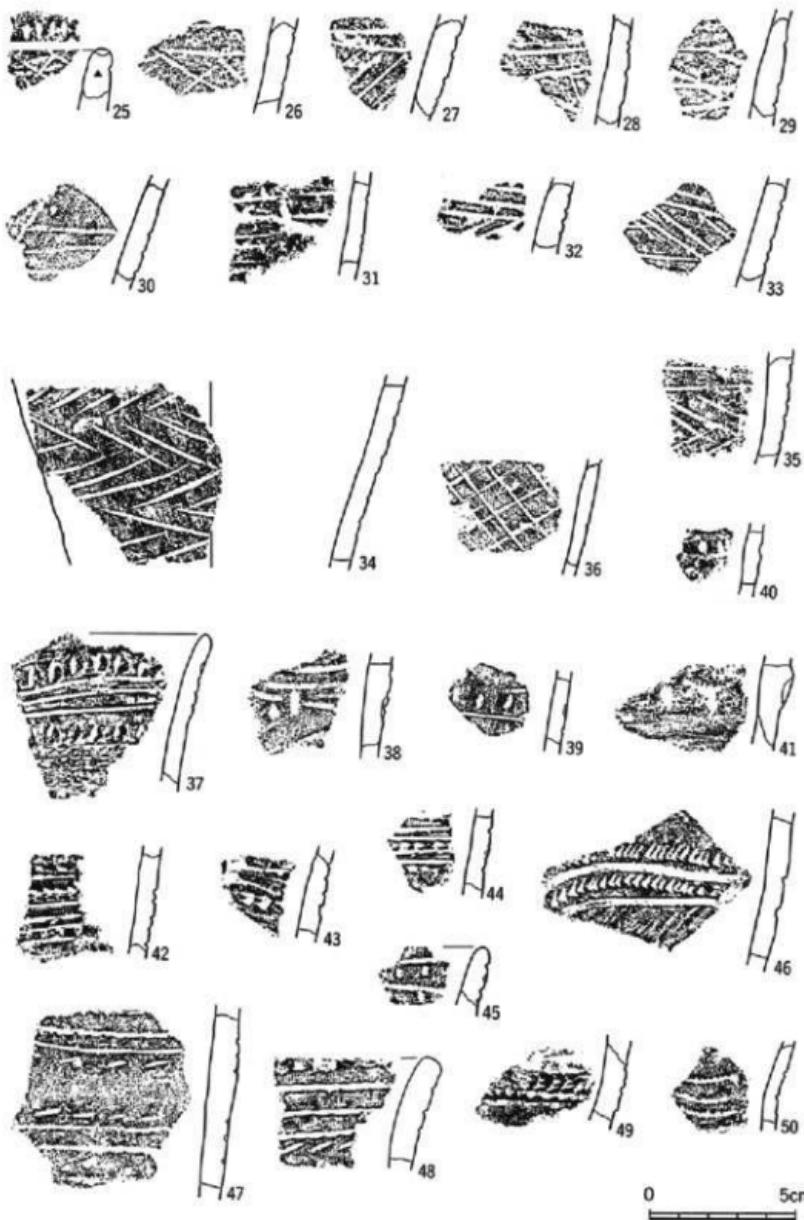
a：円形刺突文+沈線文（第19図74）。b：半截竹管刺突文+条痕文、器表面及び裏面に貝殻条痕文がつき刺突文が施されるもの（第19図75～80）。c：半截竹管押引文、器表面に押引文が横位並列に施され、裏面に貝殻条痕が付くもの（第19図81～85）。d：半截竹管刺突・押引文、b・c類とは異なり貝殻条痕が施されない。隆起線が付くもの（第20図86～88）と、刺突・押引文だけが施されるもの（第20図89～94）がある。e：爪形刺突文+沈線文（第20図95・96）。

##### 13類 隆起線文・沈線文+条痕文（第20図97～103、図版14-97～103）

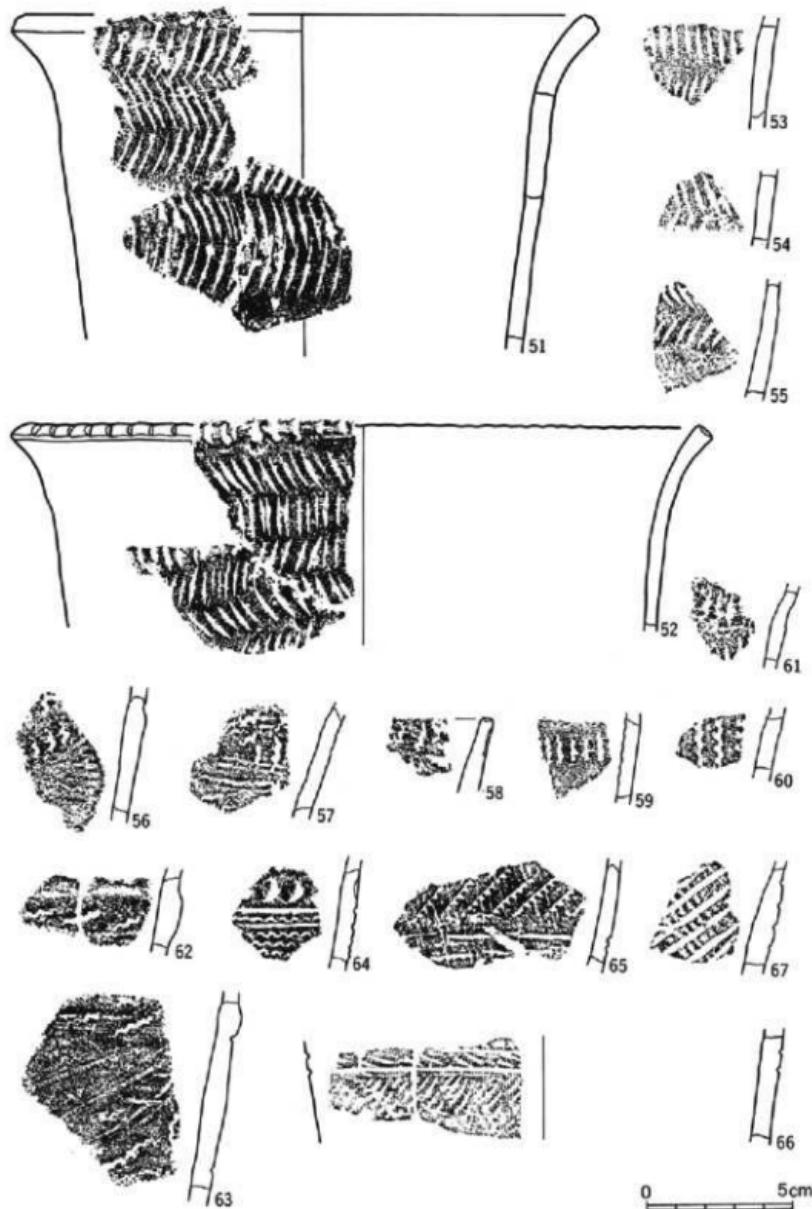
a：隆起線文が縦・横に配置され、器表裏面に貝殻条痕文が施されるもの（第20図97・



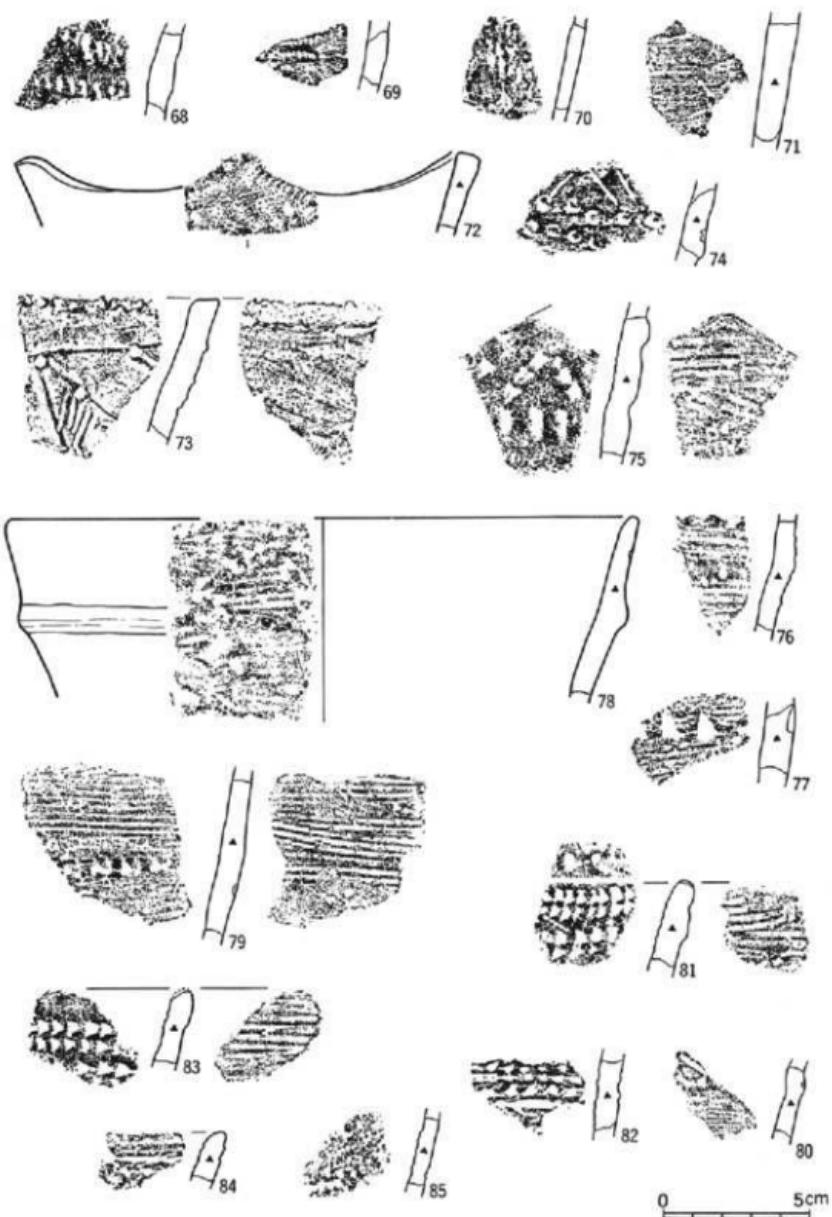
第16図 土器拓影図（1）



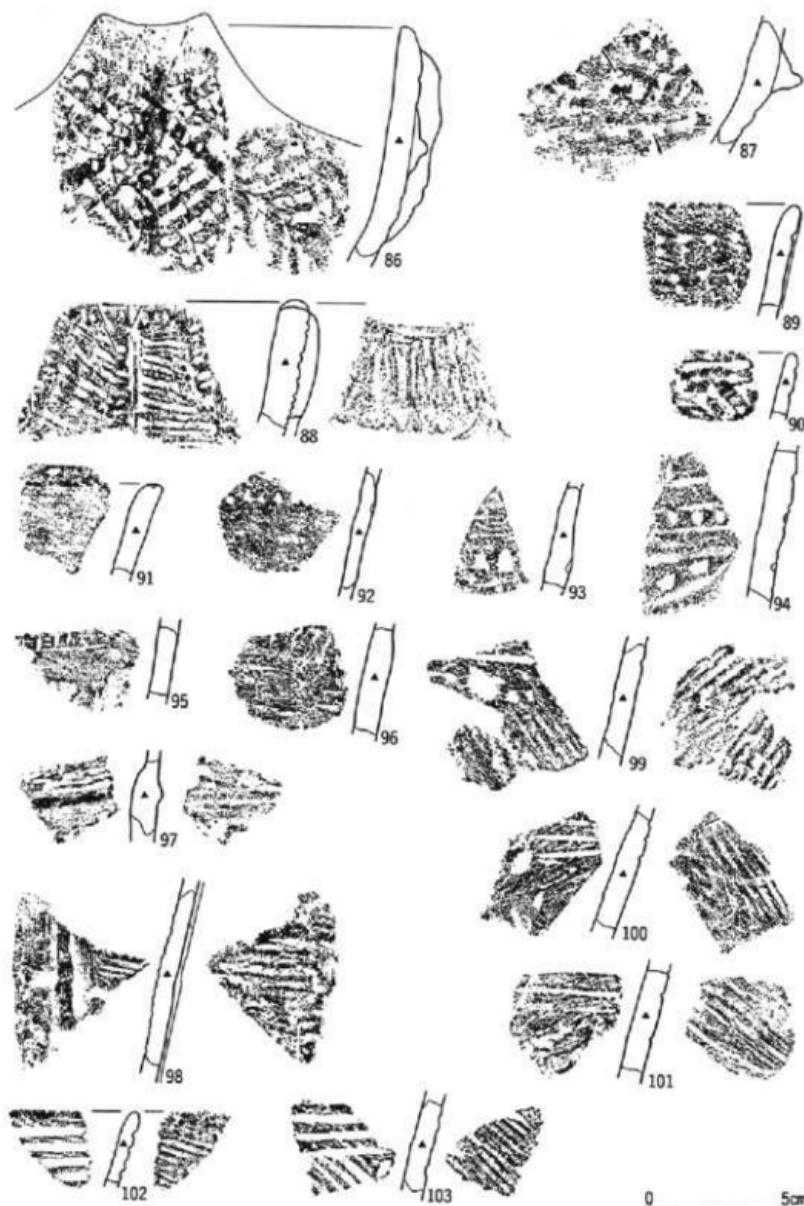
第17図 土器拓影図 (2)



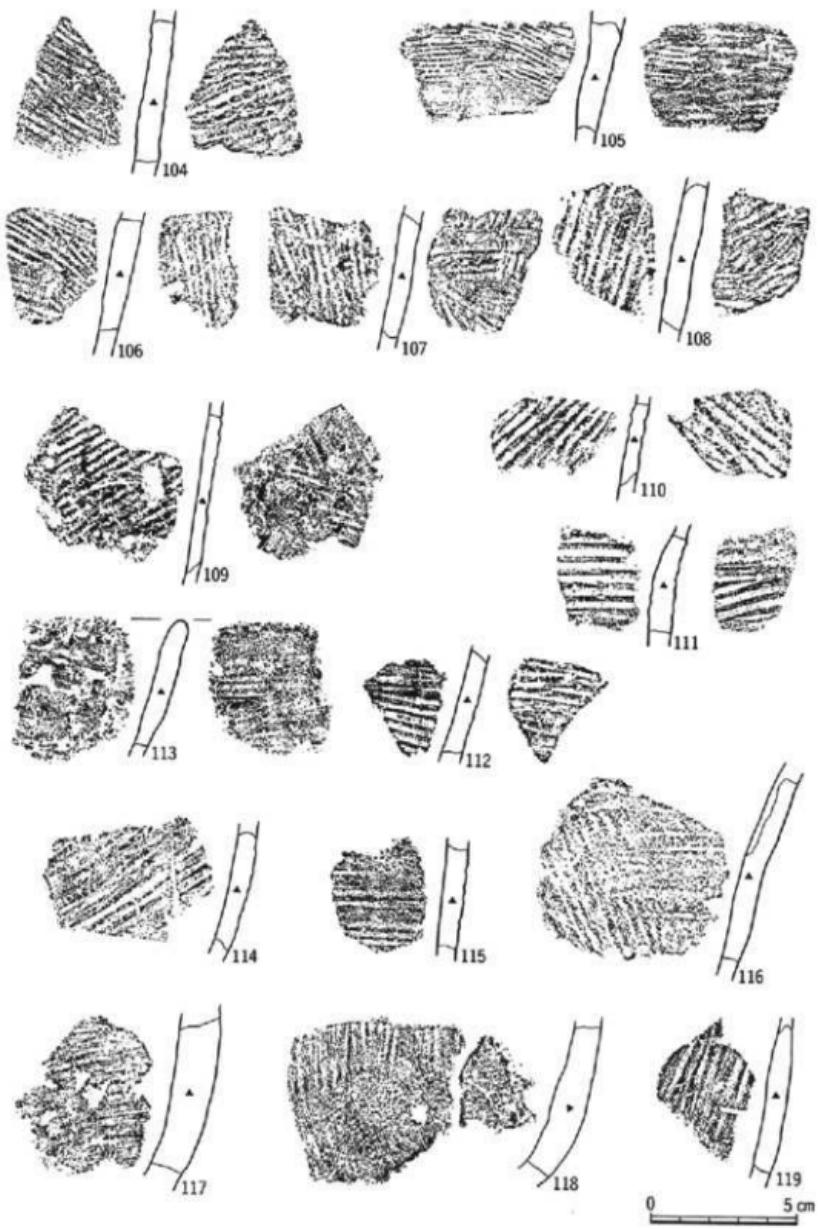
第18図 土器拓影図（3）



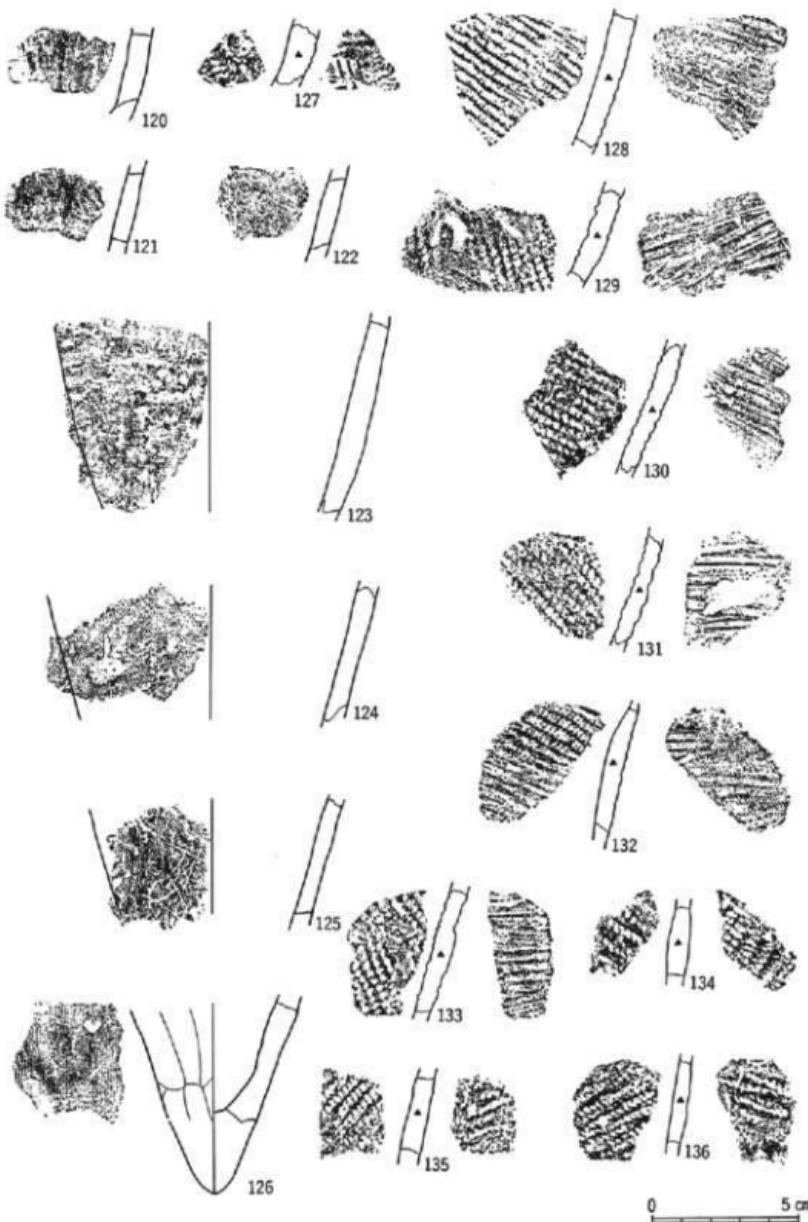
第19図 土器拓影図 (4)



第20図 土器拓影図（5）



第21図 土器拓影図 (6)



第22図 土器拓影図（7）

98)。b：太沈線と、器表裏面に貝殻条痕文が施されるもの（第20図99～101）で、出土地点・胎土・色調などからa類と同じ個体片ではないかと考えられる。c：横走・斜行する太沈線が施され、裏面に貝殻条痕文が付くもの（第20図102・103）がある。

14類 繩文条痕文・繩文縄文等の文様をもつ早期末葉の土器群を一括する（第22図127～136、図版16～127～136）。斜行縄文が器表面に施され、裏面に貝殻条痕文が付くもの（第22図127～133）、表裏面に斜行縄文が施されるもの（第22図134～136）がある。

15類 体部地文（条痕条痕・条痕無文・無文無文）のみの破片資料を一括する（第21図104～119、第22図120～126、図版15～104～119、図版16～120～126）

胎土や焼成、色調などから、条痕条痕・条痕無文の大半は12類a～cに、無文無文は、大方2類に帰属するものと考えられる。

16類 撫糸文が施文されるもの。（第23図137～143、図版17～137～143）

第2群土器（繩文時代前期）（第23～25図、図版17～19）

1類 半截竹管刺突文・爪形刺突文+繩文側面圧痕文+沈線文（第23図144～153、図版17～144～153）

爪形刺突文+繩文側面圧痕文による文様構成されるもの（第23図144・145・148・149）、半截竹管刺突文+繩文側面圧痕文によるもの（第23図146・147）、小ぶりな半截竹管刺突文+繩文側面圧痕文+沈線文によるもの（第23図150・153）、繩文側面圧痕文・半截竹管文によるもの（第23図151・152）がある。

2類 半截竹管刺突文・太沈線文・斜行縄文による文要構成をもつもの（第23図154～158、図版17～154～158）

斜行・平行沈線文及び縦位の半截竹管刺突文で体部上半の文要構成がなされ、下半に斜行縄文が施文されると考えられる。

3類 羽状縄文の施されるもの（第24図159～163、166、図版18～159～163、166）

a：結束のあるもの（第24図160～163・169）と、b：非結束のもの（第24図159・166）がある。

4類 斜行縄文+繩文側面圧痕文によるもの（第24図164・167、図版18～164・167）

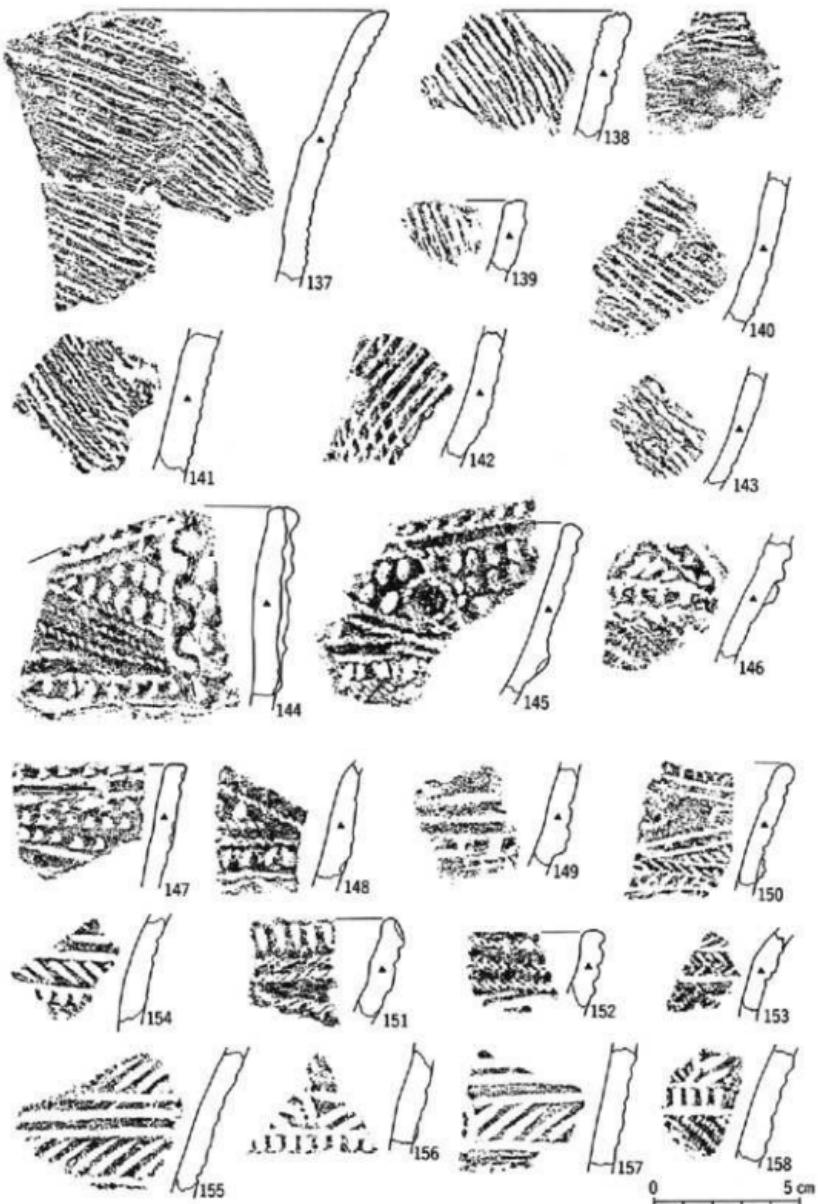
5類 斜行縄文の施されるもの（第24図168・170～173、図版18～168・170～173）

口唇部に爪形刺突文が施文されるもの（第24図168・172）、口唇部にねじりがあり小波状を呈するもの（第24図171）がある。

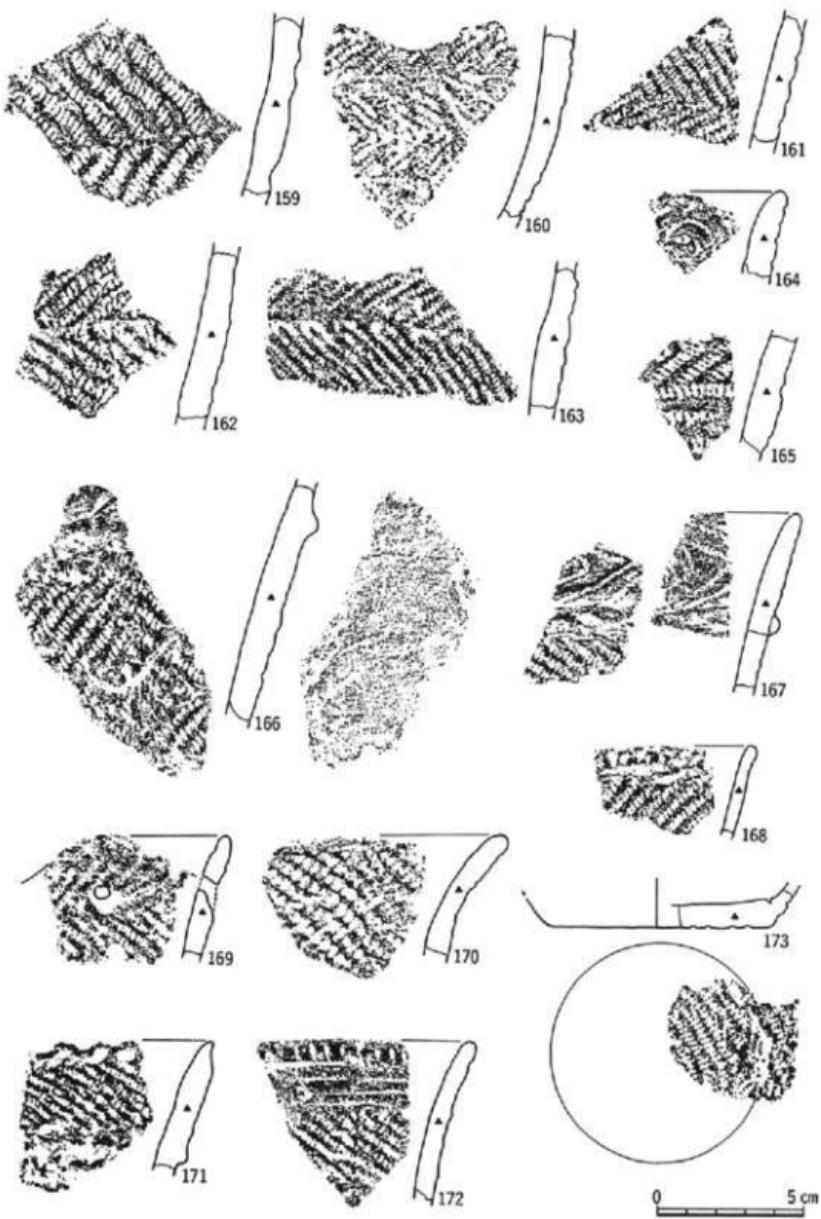
6類 ループ文の施されるもの（第25図174～176、図版19～174～176）

口縁部に爪形刺突文、体部にコンパス文が施されるもの（第25図175・176）がある。

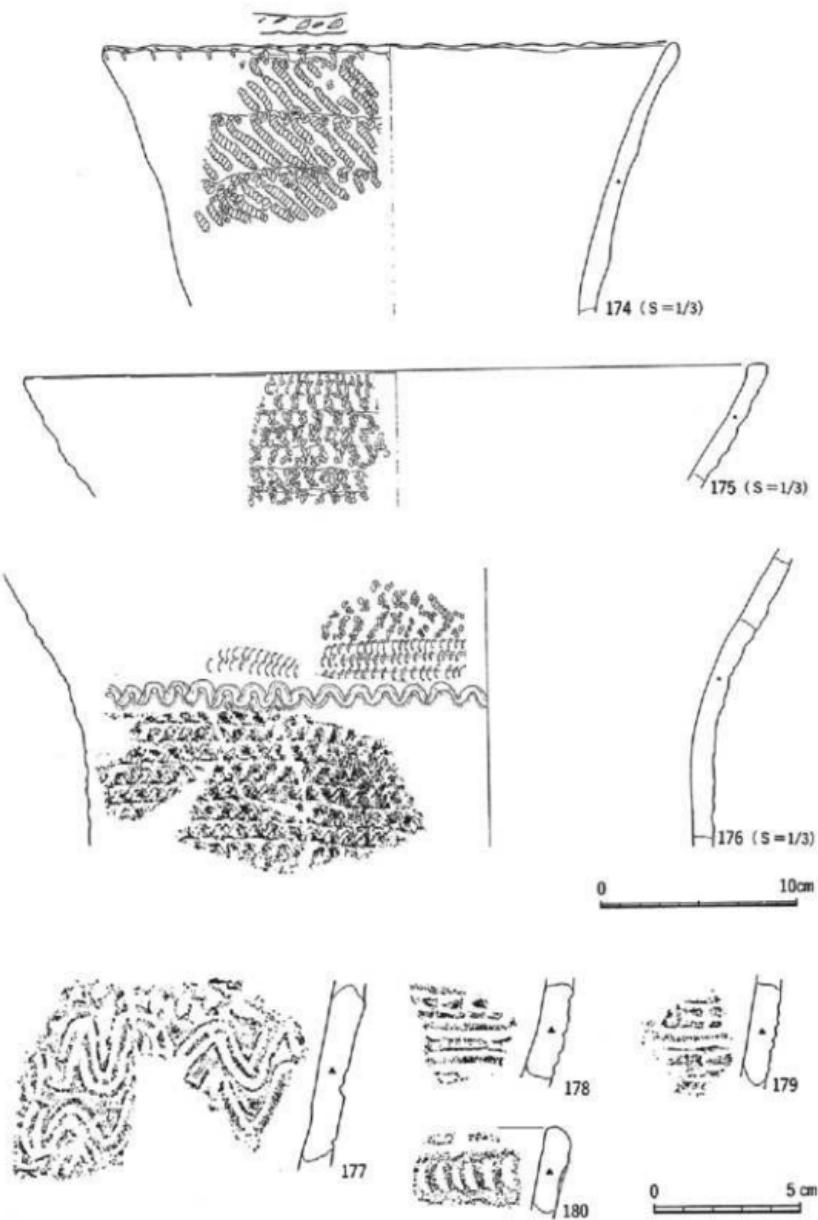
7類 半截竹管刺突文・押引文・沈線文の施されるもの（第25図177～180、図版19～177～180）



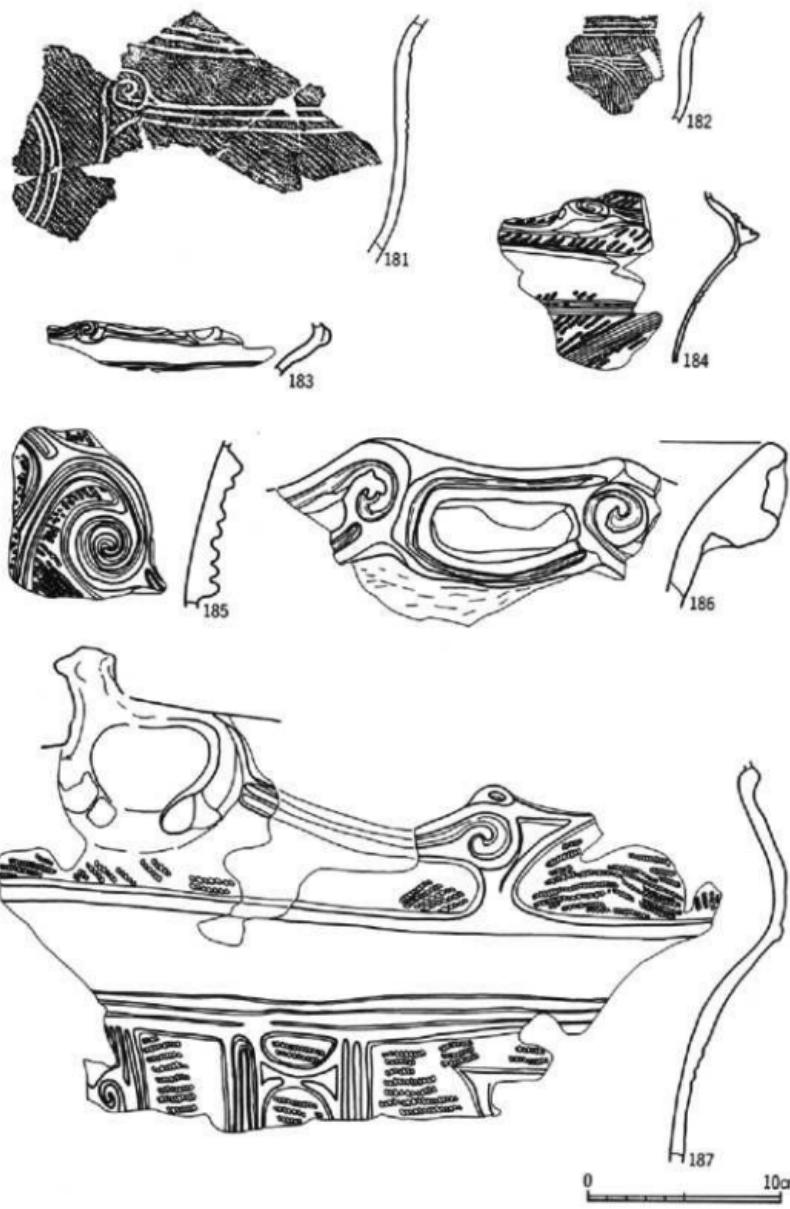
第23図 土器拓影図（8）



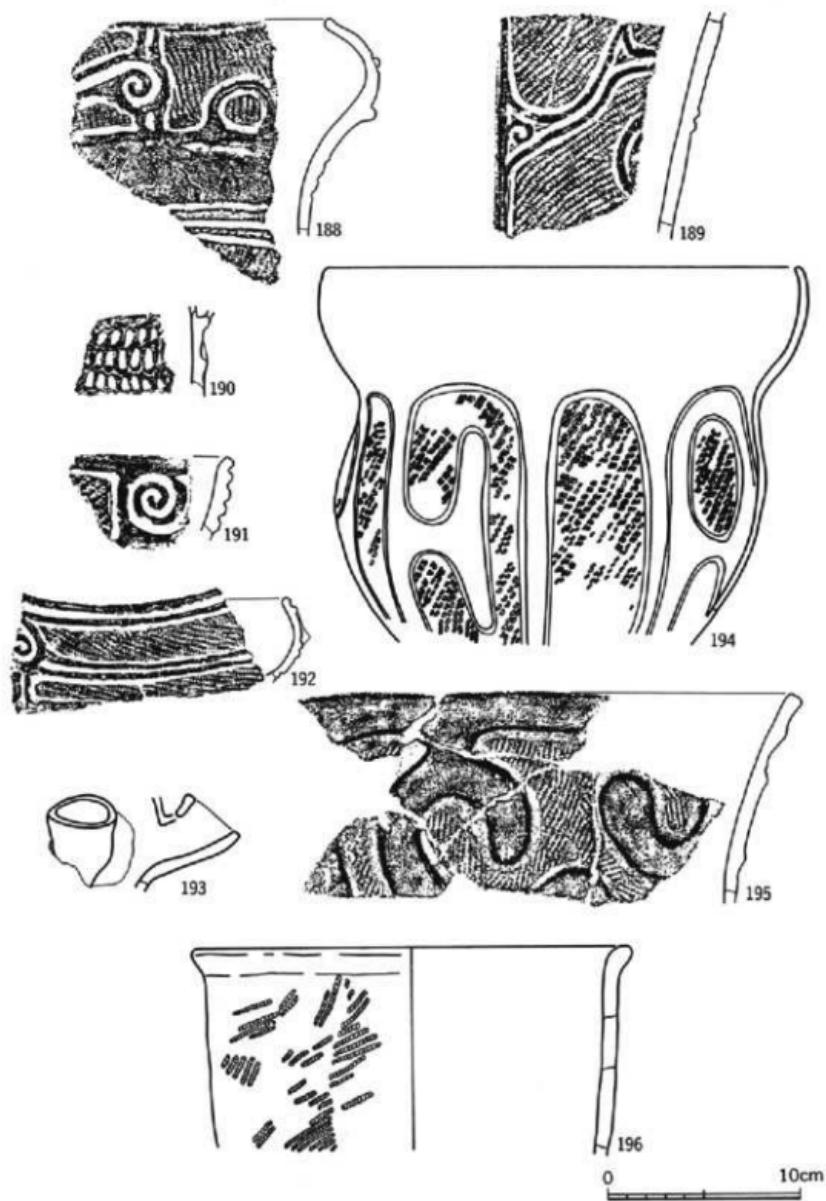
第24図 土器拓影図(9)



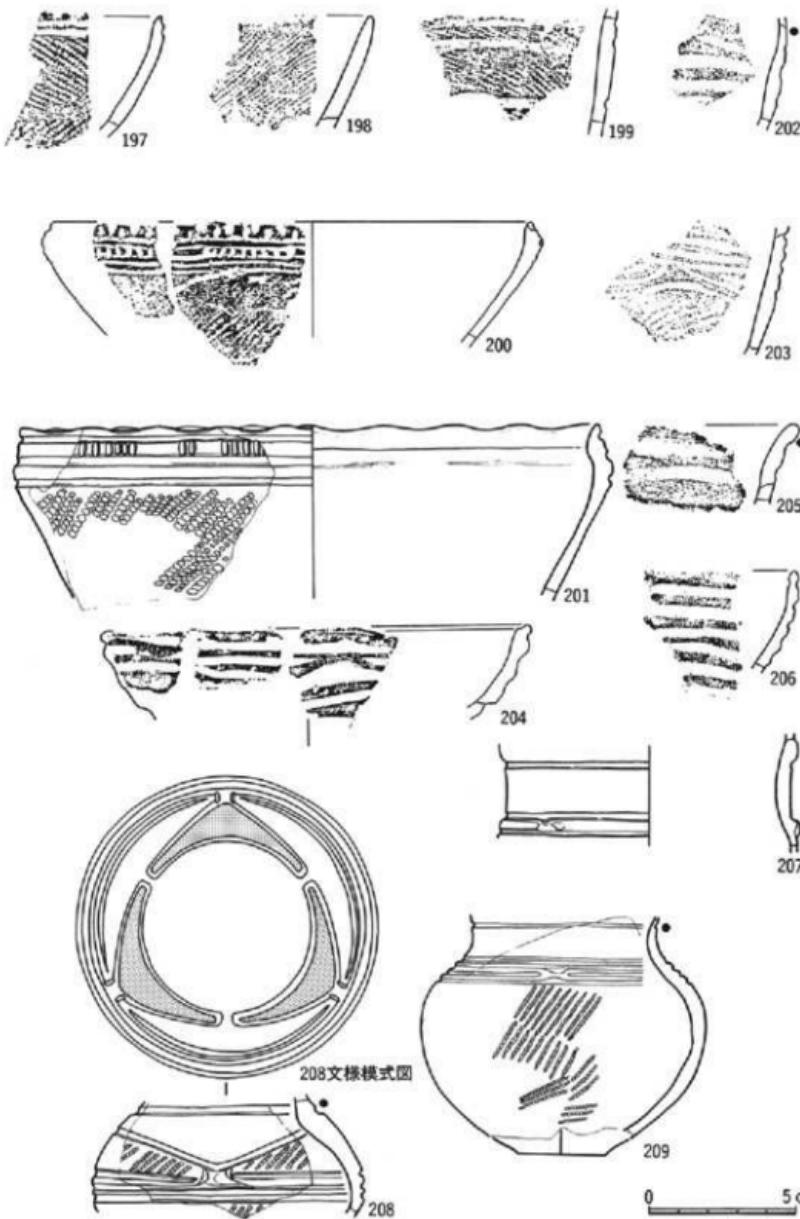
第25図 土器拓影・実測図 (10)



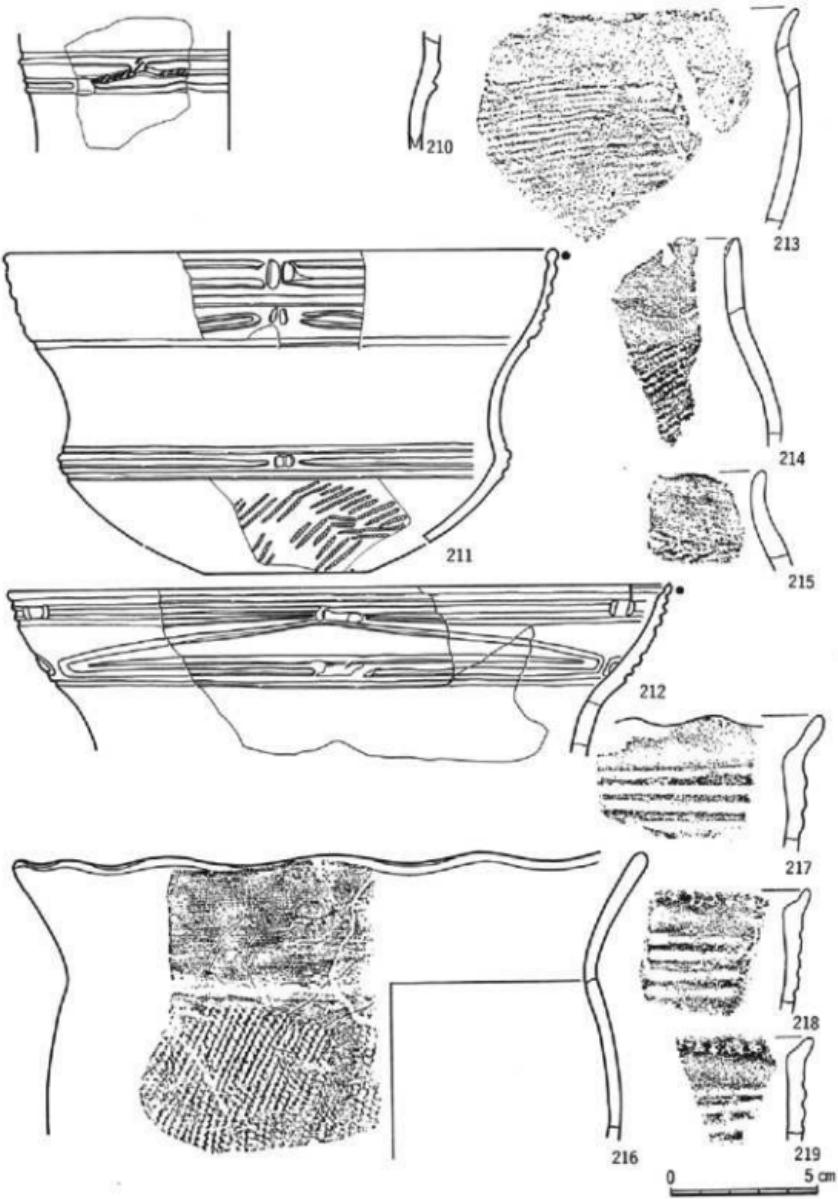
第26図 土器拓影・実測図 (11)



第27図 土器拓影・実測図 (12)



第28図 土器拓影・実測図 (13)



第29図 土器拓影・実測図 (14)

表2 土器観察表

探区	番号	口 碑 部	文 横		胎	土	調	器厚 (mm)	出土地点・層
			外 面	内 面					
第	1	平 緑	斜行子・平行・矢羽根状比線(口径150mm)	磨き	粗	砂	無	9	SK25-F1
	2	不 明	横走太沈線	フ	粗	砂	無	7	SK53
	3	フ	フ	フ	粗	砂	明	7.5	ST7-F1
	4	フ	フ	フ	粗	砂	明	8	ST12-F1
	5	フ	横走・斜行太沈線	フ	粗	砂	無	6	ST10-F1
	6	フ	横走太沈線	フ	粗	砂	明	6	SK31-F1
	7	フ	斜行太沈線	フ	粗	砂	明	7.5	SK42-F1
	8	フ	横走・斜行太沈線	粗い	粗	砂	明	9	SK26-F1
	9	フ	横走太沈線	ナデ	粗	砂	明	5	ST14-F1
	10	フ	横走・斜行太沈線	磨き	粗	砂	赤	9	SK34-F1
	11	フ	横走・斜行沈線	フ	粗	砂	無	8	25-11-II
	12	フ	斜行沈線	フ	粗	砂	無	7	ST1-F1
	13	フ	横走・斜行沈線	フ	粗	砂	淡黄	6	SK31-F1
	14	フ	フ	フ	粗	砂	赤	5.5	ST15-F1
	15	フ	フ	フ	粗	砂	湯	7	ST1-F1
四	16	フ	横走沈線	フ	粗	砂	赤	8	ST1-F1
	17	フ	横走・斜行沈線	フ	粗	砂	無	7	SK53
	18	フ	フ	フ	粗	砂	無	6.5	SK52-F1
	19	フ	フ	フ	粗	砂	無	5.5	ST16-F1
	20	フ	フ	フ	粗	砂	淡黄	8	ST1-F1
	21	フ	横走沈線	フ	粗	砂	無	7	19-8-III
	22	フ	フ	フ	粗	砂	無	7	SK42-F1
	23	フ	フ	フ	粗	砂	無	6.5	20-8-III
	24	フ	フ	フ	粗	砂	無	8	SK31-F1
第	25	口 番 目	斜行比線	擦痕	粗	砂	少	9	ST7-F1
	26	不 明	横走・斜行比線	磨き	粗	砂	無	8	SK31-F1
	27	フ	フ	フ	石	英	明	8.5	ST1-F1
	28	フ	フ	フ	粗	砂	無	7.5	23-8-I
	29	フ	フ	フ	粗	砂	無	8	SK31-F1
	30	フ	フ	フ	粗	砂	無	6	SK25-F2
	31	フ	横走沈線	フ	石	英	無	7	ST1-F1
	32	フ	横走・斜行沈線	フ	粗	砂	無	8	25-11-II
	33	フ	フ	フ	粗	砂	無	7	ST1-F1
	34	フ	く字状斜行沈線	フ	粗	砂	無	7	SK31-F1
	35	フ	横走・く字状斜行沈線	フ	粗	砂	無	8	SK31-F1
	36	フ	斜行子伏比線	フ	粗	砂	無	5	ST1-F1
	37	?	爪形刺突。横走太沈線。削突	フ	粗	砂	無	6	SK26-F1
	17	不 男	爪形刺突。横走斜行太沈線。削突	フ	粗	砂	無	8	SK34-F1
	38	フ	爪形刺突。横走斜行太沈線。削突	フ	粗	砂	無	6	25-11-I
	39	フ	爪形刺突。横走太沈線	フ	粗	砂	無	7	ST2-F1
四	40	フ	フ	フ	粗	砂	無	5	SK30-F1
	41	フ	爪形刺突。擦痕	擦痕	粗	砂	無	9	SK30-F1
	42	フ	剥皮文。横走沈線	磨き	粗	砂	無	7	20-8-III
	43	フ	フ	フ	粗	砂	無	6.5	19-8-I
	44	フ	フ	フ	粗	砂	無	6	SK47-F1
	45	平 緑	く字状刺突文。横走沈線。削痕	フ	粗	砂	無	7	SK53-F1
	46	不 明	く字状刺突文。横走沈線。削痕	フ	粗	砂	無	6	ST5-F1
	47	フ	押引文。削突文。一本沈線	粗い	粗	砂	無	10	ST5-F1
	48	平 緑	押引文。削突文	磨き	石	英	無	8	ST5-F1
	49	不 明	押引文	フ	粗	砂	無	9	23-13-I
	50	フ	押引文	フ	粗	砂	無	5	ST16-F1
第	51	平 緑	矢羽根状伏剥痕(口径150mm)	ナデ	粗	砂	無	6	19-8-III
	52	口眉爪形刺突	フ	(口径230mm)	粗	砂	無	6	ST5-F1
	53	不 明	フ	フ	粗	砂	明	6	ST5-F1
	54	フ	フ	フ	粗	砂	明	6	ST3-F1
	55	フ	フ	フ	粗	砂	無	6	17-13-III

掘回	番号	口 種 部	文 様		胎 土	素面	色 調	墨厚 (mm)	出土地点・層
			外 面	内 面					
第1回	56	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)竪位。柔板	柔板	"	"	黒	6	25-9-I
	57	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)竪位。	柔板	粗 砂	雪 母	灰	8.5	ST14-F1
	58	口 呂 刷 素	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)竪位主列	ナデ	"	"	"	6	ST14-F1
	59	不 明	"	柔板	"	"	橙	6	SK12-F1
	60	不 明	"	ナデ	"	"	"	7.5	SK12-F1
	61	不 明	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)竪位主列	ナデ	粗 砂	雪 母	黒	6	ST6-F1
第2回	62	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)斜位	柔板	"	"	黒	7.5	ST6-F1-ST18-F1
	63	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)斜位。斜行凸線	薄板	"	"	"	7.5	ST6-F1
	64	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀)。橫走凹線。柔形刺突	ナデ	"	"	明赤	6	ST10-F1
	65	口	貝體圓錐疣痕文(鋸齒狀), 橫走比線	磨き	"	"	浅黄	6	SK25-F1
	66	口	貝體圓錐疣痕文, 橫走沈線	柔板	"	"	灰	6	ST3-F1
	67	口	貝體圓錐疣痕文, 斜行太比線	細砂	赤色粒子	砂	砂	6.5	ST1-F1
第3回	68	不 明	筋状疣痕文	ナデ	細砂	雪母, 石英砂	にぶい黄橙	8	23-10-III
	69	口	磨き	砂	"	"	橙	8	SK31-F1
	70	口	ナデ	粗 石	美	砂	"	5	ST14-F1
	71	口	筋状疣痕文(擦板)	"	粗	砂	"	9.5	SK34-F1
	72	小 美 起	筋状疣痕文。柔形刺突	"	"	少量	にぶい橙	7.5	19-8-III
	73	平 稀	柔形起線, 圓形刺突。太沈線	"	"	無	明赤	9	SK38-F1
第4回	74	不 不	円形刺突。沈線	ナデ	"	少量	明黃	10	ST3-F1
	75	波 狹 口 線?	半載竹管側突, 雷門文	柔板	石	英	砂	8	19-7-III
	76	不 明	倒錐起線, 半載竹管側突。柔板地	粗	"	"	"	6.5	ST8-F1
	77	口	半載竹管側突文, 柔板地	粗	"	"	にぶい橙	11	ST10-F1
	78	平 稀	倒錐起線, 半載竹管側突文。柔板地	粗	"	"	橙	8	ST7-F1
	79	不 明	柔板	細 粗	砂	砂	"	7.5	ST8-F1
第5回	80	口	微起起線, 半載竹管側突文。柔板地	"	粗	砂	明	8	ST8-F1
	81	口 刻 目	半載竹管押引文(横位並列)	"	粗	砂	"	8	ST7-F1
	82	不 明	半載竹管押引文, 柔板	"	粗	砂	にぶい赤	8	SK25-F1
	83	口	半載竹管押引文(横位並列)	"	粗	砂	明赤	8	ST10-F1
	84	平 稀	半載竹管押引文	"	粗	砂	褐	8	SK25-F1
	85	不 明	"	"	粗	石	明	7.5	19-7-III
第6回	86	台 形 状 突	陸起線, 半載竹管押引文	擦板	石	英	砂	8.5	19-7-III
	87	口	"	ナデ	粗	砂	少量	8	SK51-F1
	88	口	柔板	粗	"	砂	にぶい褐	10	ST9-F1
	89	平 滅	半載竹管側突文	粗	"	砂	明	7	ST9-F1
	90	口 刻 刺	半載竹管押引文	"	粗	砂	少量	19-8-III	SK36-F1
	91	口 刻 刺	無文, ナデ	ナデ	粗	砂	にぶい褐	5.5	20-8-III
第7回	92	不 明	半載竹管側突文	粗	粗	砂	少量	にぶい橙	SK31-F1
	93	口	"	"	粗	砂	無	9	SK34-F1
	94	口	半載竹管側突文, 太沈線	"	粗	砂	明黃	7	23-12-II
	95	口	柔形刺突文, 沈線	磨き	粗	砂	少量	9	SK36-F1
	96	口	柔形刺突文, 柔板地	粗	粗	砂	少量	10	ST5-F1
	97	口	陸起線	柔板	石	英	砂	9	ST5-F1
第8回	98	口	陸起線, 柔板地	"	粗	砂	多量	10	ST5-F1
	99	口	太沈線文, 柔板地	"	粗	砂	少量	10	ST5-F1
	100	口	"	"	粗	砂	少量	9	ST5-F1
	101	口	横走太沈線	"	粗	砂	少量	6	17-13-I
	102	平 稀	横走太沈線	"	粗	砂	少量	7.5	ST5-F1
	103	不 明	横走	"	粗	砂	少量	7.5	ST5-F1
第9回	104	不 明	貝殼条文	貝殼条板	粗	砂	石 英	多量	にぶい赤褐
	105	口	"	"	粗	砂	少量	8	ST9-F1
	106	口	"	"	粗	砂	少量	9	SK41-F1
	107	口	"	"	石	英	砂	2	20-18-II
	108	口	"	"	粗	砂	少量	9	23-8-I
	109	口	"	"	粗	砂	少量	6	19-7-III
	110	口	"	"	粗	砂	少量	7	ST5-F1

探図	番号	口 緯 部	文 様		胎	土	鍍銀	色 藍	闊厚 (mm)	出土地点・層	
			外 面	内 面							
第1段落	111	ノ	ノ	ノ	粗	砂	少	にぶい赤褐	8	23-9-1	
	112	ノ	ノ	ノ	粗	砂	少	明赤褐	7.5	ST6-F1	
	113	平	縦	無文、ナデ	石	英	砂	にぶい赤褐	8	ST7-F1	
	114	不	明	貝殻朱模文	ナデ	粗	少	黒	8	20-8-III	
	115	ノ	ノ	磨き	粗	砂	少	黒	7	ST9-F1	
	116	ノ	ノ	擦痕	粗	砂	多	黒	8	SK42-F1	
第2段落	117	ノ	ノ	ナデ	粗	砂	少	黒	14	SK23-F1	
	118	ノ	ノ	ノ	粗	砂	少	黒	12	SK23-F1	
	119	ノ	ノ	擦痕	粗	砂	少	黒	8	21-8-1	
	120	不	明	無文、唐字	粗	砂	無	にぶい黒	6.5	SK31-F1	
	121	ノ	ノ	ノ	石	英	砂	にぶい黒	5	SK31-F1	
	122	ノ	ノ	ノ	粗	砂	少	黒	6	20-8-III	
第3段落	123	ノ	ノ	ナデ	石	英	砂	少	黒	6	ST13-F1
	124	ノ	ノ	磨き	粗	砂	少	にぶい黒	6	SK43-F1	
	125	ノ	ノ	ナデ	粗	砂	少	黒	6	20-18-III	
	126	ノ	ノ	ノ	粗	砂	少	黒	9	ST3-F1	
	127	ノ	ノ	斜行開文・LR(L横位)	貝殻条痕	少	少	にぶい黒	8.5	SK47-F1	
	128	ノ	ノ	斜行開文・RL(R横位)	ノ	少	少	黒	8	SK41-F1	
第4段落	129	ノ	ノ	ノ	ノ	少	多	黒	7	SK26-F1	
	130	ノ	ノ	ノ	ノ	少	少	黒	6.5	SK26-F1	
	131	ノ	ノ	ノ	ノ	少	少	にぶい黒	5.5	SK26-F1	
	132	ノ	ノ	ノ	ノ	少	少	にぶい赤褐	6	SK53-F1	
	133	ノ	ノ	ノ	ノ	少	少	にぶい黒	7	SK26-F1	
	134	ノ	ノ	斜行開文・RL(R横位)	ノ	少	少	明褐	8	SK26-F1	
第5段落	135	ノ	ノ	斜行開文・LR(L横位)	ノ	少	少	黒	7.5	SK41-F1	
	136	ノ	ノ	斜行開文・RL(横位)	ノ	少	少	明褐	6	SK26-F1	
第6段落	137	波状口縁?	無文・R	ナデ	石	英	砂	多	黒	8	SK42-F1ST3-F1
	138	口	晋 条痕	ナデ	微	砂	少	少	9	ST20-F1	
	139	平	縫	ナデ	粗	砂	少	にぶい赤褐	8	ST16-F1	
	140	不	明	無文・R	擦痕	少	少	明赤褐	8	ST5-F1	
	141	ノ	ノ	粗い	粗	少	少	にぶい黒	10	ST5-F1	
	142	ノ	ノ	ノ	粗	少	少	にぶい黄	9	19-8-1	
第7段落	143	ノ	把文・L	擦痕	微	砂	少	黒	9	SK41-F1	
	144	山形	突起	扇形剥壳、瓜形剥壳、押庄鑄文・L	粗	砂	少	灰	12	20-7-III	
	145	ノ	?	ノ	少	少	少	後黄	9	19-8-III	
	146	不	明	隣起縁、半鼓竹管剥壳、押庄鑄文・L	少	少	少	後黄	6.5	20-7-III	
	147	?	?	半鼓竹管剥壳、押庄鑄文・R	ナデ	少	少	灰	6	21-9-III	
	148	不	明	扇形剥壳、押庄鑄文・L	少	少	少	後黄	8.5	20-7-III	
第8段落	149	ノ	?	半鼓竹管剥壳、押庄鑄文・R	少	少	少	後黄	9.5	SK42-F1	
	150	突起	?	半鼓竹管剥壳、平行弦文、斜行彌文・L	少	少	少	にぶい黒	6.5	SK17-F2	
	151	平	縫	半鼓竹管剥壳、平行弦文、斜行彌文・R	少	少	少	にぶい黄	8	21-9-III	
	152	ノ	ノ	沈線、押庄鑄文・L	磨き	砂	少	少	7	ST6-F1	
	153	不	明	半鼓竹管剥壳、沈線、斜行彌文・LR	ナデ	少	少	灰	7	SK17-F2	
	154	ノ	ノ	半鼓竹管剥壳、平行、斜行太沈線文	磨き	砂	少	少	8	21-9-III	
第9段落	155	平行	斜行太沈線文	ノ	粗	砂	少	にぶい黄	7.5	ST9-F1	
	156	ノ	ノ	半鼓竹管剥壳、斜行太沈線文	磨き	砂	少	灰	8	21-9-III	
	157	平行	斜行、觀音太沈線文	ノ	粗	砂	少	後黄	8	SK52-F1	
	158	ノ	ノ	半鼓竹管剥壳、太沈線文、斜行彌文・RL	石英混	細砂	混	後黄	8.5	ST9-F1	
第10段落	159	不	明	羽狀縁・6段2本条+RL+LR(横位)	磨き	砂	混	少	にぶい赤褐	10	ST10-F1
	160	ノ	ノ	羽狀縁文・RL+LR(横位)	粗	砂	少	黒	9.5	19-13-1	
	161	ノ	ノ	羽狀縁文・6段3本条+RL+LR(横位)	石	英	砂	少	揚	8.5	ST9-F1
	162	ノ	?	羽狀縁文・RL-LR(横位)	ナデ	少	少	にぶい黄	10	ST5-F1	
	163	ノ	?	羽狀縁文・RL-LR(横位)	粗	砂	少	少	10	SK52-F1	
	164	不	明	藤状体彌文・6段3本多条	磨得、粗砂、石英砂	少	少	黒	10	16-12-1	

博団	番号	口 緑 部	文 標		胎 土	礫石	色 調	器厚 (mm)	出土地点・層	
			外 面	内 面						
第24 國	166	?	羽状文・0段2本多条・LR-LR(横拉)	南痕	石 英	砂	白	10	18-11-1	
	167	?	押庄鶴文・L-龍起線・斜行横文・0段多条	+ナゲ	石	砂	にぶい黄橙	9	30-7-1-17-13-1	
	168	口 普 刺 実	瓜形刺実文・0段多条・LR(横拉)	帶5	粗	砂	灰	6.5	SK25-F1	
	169	山 形 突 起	穿孔・羽状龍文・RL-LRL(横位)	+ナゲ	石	砂	にぶい白	8	19-7-1	
	170	平 線	斜行横文・多条・LR(横位)	擦痕	石 英	砂	白	8	SK31-F1	
	171	小 波 線	粘土斑点柄付・斜行横文・多条・LR(横位)	+	石	砂	白	9	ST1-F1	
	172	平 線	次音文・側出横文・斜行横文・多条・LR(横位)	+	粗	砂	白	10	SK17-F2	
	173	平 明	底部・斜行横文・多条・LR	+ナゲ	粗	砂	にぶい黄橙	9	SK52-F1	
第25 國	174	小波状・刺突	ループ文(横2cm)・トネ・LR・D約20mm	+ナゲ	粗	砂	少量 明	黄	11	SK56-F1
	175	平 線	毛形横文・4-5段波状・砂付・LR	+	粗	砂	白	10	19-8-III	
	176	下 明	G形横文・龙形・コラボ文・ループ文・多条・RL-LR	+	粗	砂	にぶい黄橙	11	19-8-I	
	177	?	半波竹管・刺突・波状文・擦痕	擦痕	粗	砂	にぶい白	11.5	SK25-F1	
	178	?	半波竹管・押引文・沈縞文	帶5	粗	砂	にぶい黄褐	9.5	19-13-1	
	179	?	?	+	粗	砂	白	9	19-13-1	
	180	波 状 ?	沈縞文・瓜形刺突	+	粗	砂	灰 黄 白	9	24-8-1	
第26 國	181	不 明	平行・溝密文・波文・斜行横文・RL(横位)	磨き	粗	砂	浅	黄 白	8	21-9-III
	182	?	平行・溝密文・波文・斜行横文・LR(横位)	+	粗	砂	にぶい黄橙	4	ST12-F1	
	183	?	波状文	+	粗	砂	綠	4.5	SK53-F1	
	184	?	溝密文・光輪・波文・斜行横文・RL(横位)	+	粗	砂	白	6	ST1-F1	
	185	?	溝密文・波文・斜行横文・LR(横位)	+	粗	砂	浅 黄 白	6	SX18-F1	
	186	波 状 口 線	溝密文・沈縞文	+	粗	砂	白	9	SK53-F1	
	187	周 状 突 起	溝密文・粘土斑点柄付・刺突・斜行横文・RL	+	粗	砂	白	10	22-10-I	
第27 國	188	波 状 口 線	溝密文・沈縞文・地文・斜行横文・RL	磨き	粗	砂	無	にぶい白	8	ST1-F1
	189	下 明	溝密文・粘土斑点柄付・刺突・斜行横文・RL(横位)	+	粗	砂	白	9	24-8-I	
	190	?	斜行文	+	粗	砂	にぶい黄橙	6	SK17-F2	
	191	平 線	溝密文・粘土斑点柄付・地文・斜行横文・RL	+	粗	砂	明 春	白	9	23-11-1
	192	?	溝密文・粘土斑点柄付・地文・斜行横文・RL(横位)	+	粗	砂	にぶい黄橙	5.7	21-9-1	
	193	不 明	磨き(往口)	+	粗	砂	白	6	20-8-III	
	194	平 線	C字-U字形・溝密文・兩頭横文・RL(横位)	+	粗	砂	にぶい黄橙	6.5	SK50-F1	
第28 國	195	?	隆密・C字状地・斜行横文・RL	+	粗	砂	にぶい白	7	SK57-F1	
	196	?	斜行横文・RL	粗	砂	砂	綠	6.5	20-9-III	
	197	口 留 目	平行横文・斜行横文・RL-LR(横位)	磨き	粗	砂	無	にぶい黄橙	6	SK17-F1
	198	平 線	斜行横文・0段2本多条	+	粗	砂	黑	褐	6.5	21-6-1
	199	不 明	沈縞文・波文・LR(横位)	+	粗	砂	灰 黄	褐	6	20-11-I
	200	口 留 目	沈縞文・平行沈縞・溝密文(直径16mm)	磨き・成化物付番	粗	砂	白	3	SK17-F2, SX18-F1	
	201	小 波 状 口 線	平行沈縞・刺目・斜行横文・RL(横位)	磨き	粗	砂	にぶい白	5	SK17-F2	
第29 國	202	不 明	大光輪	+	粗	砂	浅	黃	5	23-12-1
	203	?	宽形工字文	+	粗	砂	にぶい黄橙	5	ST15-PL21-8-1	
	204	口 吞 比 繩	宽形工字文・《口吞14mm》	+	粗	砂	白	5.5	SK17-F2	
	205	平 線	平行沈縞・建朱	+	粗	砂	白	4	25-6-II	
	206	?	沈縞	+ナゲ	粗	砂	明	褐	5	SK17-F1
	207	不 明	沈縞・粘土粒貼付	+ナゲ	粗	砂	白	5	21-13-1	
	208	?	变形工字文・隙消横文・LR・建朱	+	粗	砂	黃	褐	5	SK17-F2
第30 國	209	?	工字文・斜行横文・RL(横位・斜位)	+	粗	砂	無	灰 布	5	21-13-1
	210	平 明	工字文・粘土粒貼付・隙消横文・LR	磨き	粗	砂	灰 黄	褐	3	25-6-II
	211	平 線	变形工字文・毫去・建朱・斜行横文・LR	+	粗	砂	白	3	SK17-F2	
	212	?	变形工字文・毫去・粘土粒貼付・建朱	+	粗	砂	黑	褐	7	23-12-1
	213	?	斜行横文・LR(斜位)	+ナゲ	粗	砂	明	褐	6	23-10-1
	214	?	?	+	粗	砂	褐	褐	7.5	SK17-F1
	215	?	?	+	粗	砂	明	褐	4	SK17-F12-10-1
第31 國	216	波 状 口 線	斜行横文・0段3本多条・LR(横位)	磨き	粗	砂	黑	褐	6.5	SK17-F1
	217	?	平行沈縞	+ナゲ	粗	砂	白	馬	6.5	SK17-F1
	218	平 線	?	+	粗	砂	白	にぶい黄橙	6	SK17-F3
	219	?	?	+	粗	砂	白	にぶい黄橙	6	SK17-F3

擦痕地に波状沈線文、半截竹管刺突文が施されるもの（第25図177）がある。

**第3群土器**（縄文時代中期）（第26図181～187、第27図188～196、図版20—181～187、図版21—188～196）

包含層および遺構覆土内から、大木8b～10式期に併行する土器群が出土している。沈線文による平行線文・渦巻文による文様構成を持つもの（第26図181～184）、隆起線文による文様構成がなされるもの（第27図185～187、第28図188・189・192）、隆帯を主要文様構成とするもの（第28図195）などがある。

**第4群土器**（縄文時代晩期）（第28図197～201、図版22—197～201）

口唇に刻目文、口縁に平行沈線文・刺突文をめぐらしたもの（第28図200）、口縁が小波状を呈するもの（第28図200）がある。

**第5群土器**（弥生時代中期）（第28図202～209、第29図210～219、図版22—202～209、図版23—210～219）

器種的には、浅鉢、鉢、深鉢、壺形土器などがある。平行沈線による工字状文が施されているもの（第28図203、204、207～209、211、212）があり、202、205、208、209、211、212には朱が塗られている。

## 2 石 器

本遺跡より出土した石器には、尖頭器、石鏸、石錐、石匙、石箆、插器、削器、磨製石斧、凹石、磨石などがある。剥片も含めた総点数は716点ある。

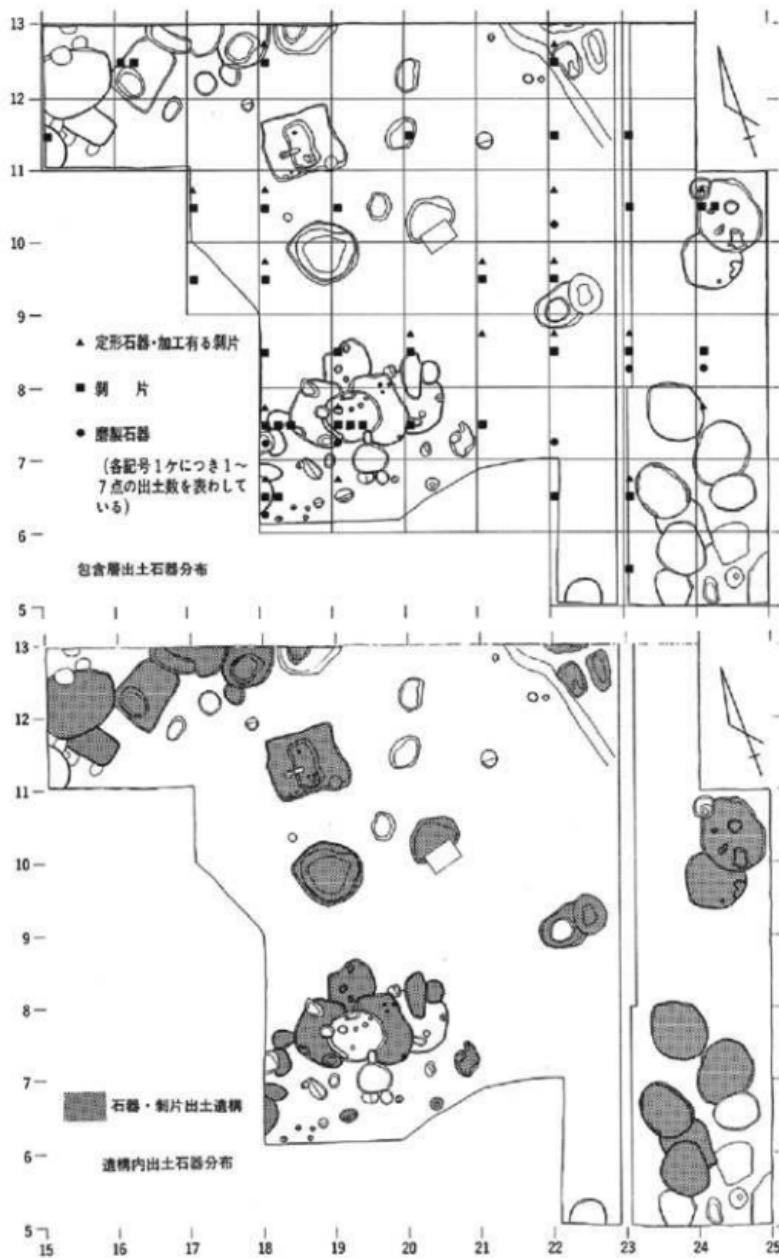
尖頭器は4点あり、いずれも欠損品である。片面調整のもの（第31図2）が1点ある。

石鏸は14点あり、未製品と考えられるものに、第32図5～9の5点がある。有茎石鏸は第33図18の1点だけである。基部が直線的なもの第33図10～12、基部の抉入が深いもの第33図13・14、抉入の深いもの第33図15～17がある。

石錐は6点あり、第34図23は有舌尖頭器の基部を再調整して転用したものかもしれない。

石匙は8点あり、縦型のもの第34図25～31と、横型のもの第34図32がある。縦型の中に、細身・長身で先端の尖るもの（第34図25～27）3点がある。

石箆は32点ある。SK36土壤より8点（第36図42～46、48～50）まとまって出土している。頭部が尖り刃部に向けて開くもの（第36図44・46・50、第37図51・52・59・61、第38図69・70・72）、頭部に幅があるもの（第37図56、第38図64～67、71）、矩形の形状を呈するもの（第36図43・45・49、第37図55・57・58・60、第38図62・63・68）、橢円形に近い形状を呈するもの（第36図42・48）、刃部が横に大きく開くもの（第36図53・54）がある。54はいわゆるトランシェ様石器である。



第30図 石器分布図

表3 造構内出土石器集計表

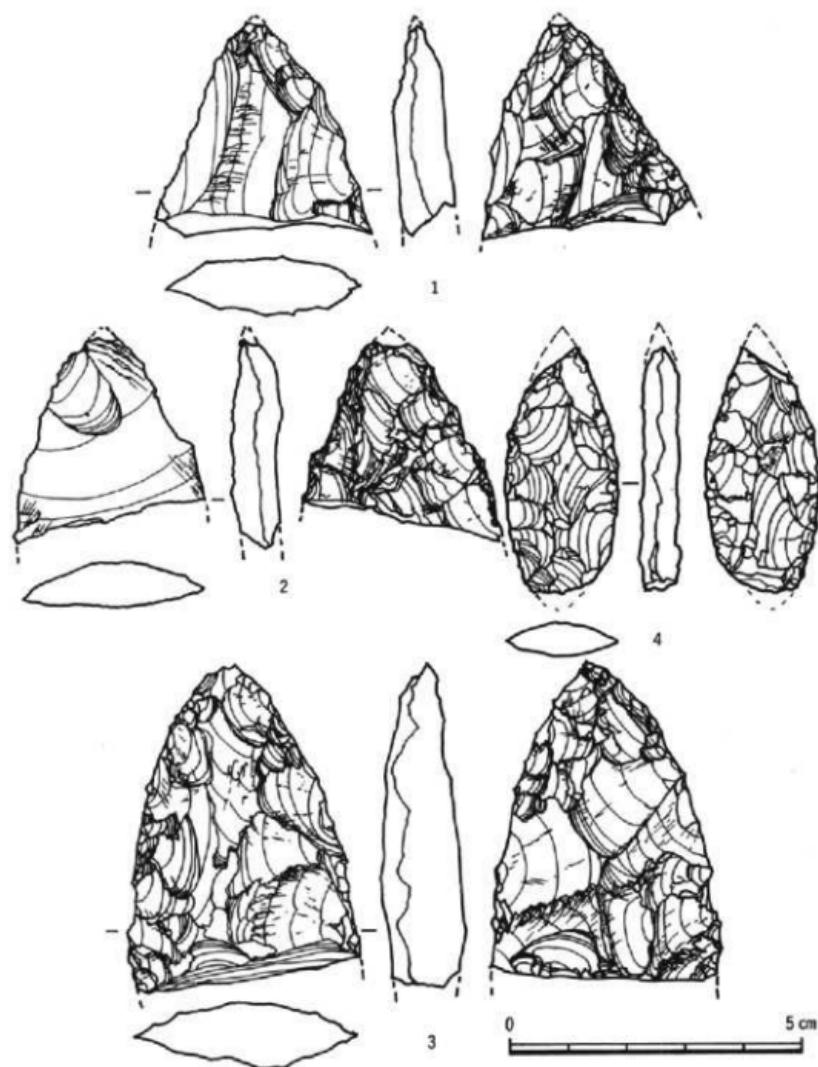
種別 造構	尖頭器	石 鐵	石 簾	石 匙	石 筋	攝 器	削 器	剝 片 加工有	磨 石 製 研	凹 石	磨 石	計	
				1	2		1	5	90		4	103	
ST1												1	
ST2									1				
ST3			2	1	2			4	45		1	58	
ST4									6		3	9	
ST5		1				1		3	27		2	34	
ST6									6		1	7	
ST8									3			3	
ST9						1		2	17		2	22	
ST10	1	4	1						33		2	41	
ST12									6		1	7	
ST13		1										1	
ST14								1	3			4	
ST15									1			1	
ST16									3			3	
SK17								1	7			8	
SX18								1	4			5	
SK22									1		1	2	
SK25	1	1		1		1	1		40		2	47	
SK26									1	3		4	
SK28									1			1	
SK29									1			1	
SK31					1			1	31		1	34	
SK32								1	1			2	
SK34											1	1	
SK35									1			1	
SK36		1		1	8		1	1	8			20	
SK38					1				1			2	
SK39									2		1	3	
SK41				1					8			9	
SK42		1			3			1	13			18	
SK43									5	1		6	
SK45									2			2	
SK46									1			1	
SK47								1	3		2	6	
SK48									3		1	4	
SK49					1							1	
SK50									2			2	
SK52		1						2	2	8		13	
SK53	1						1	2		6		11	
SK54									1	1		2	
SK57									1			1	
小計	3	10	3	5	20	2	7	26	395	1	2	27	501

表4 包含層出土石器集計表

種別 地 區	尖頭器	石 鏟	石 鎌	石 匙	石 寬	搔 器	削 器	剝 片		凹 石	磨 石	計
								加工有				
T14-14									1			1
T15-11									2			2
T17-8											1	1
T21-14	1							1	8			10
16-12									7			7
17-13									14			14
18-10									4			4
18-11	1								2			3
19-7				1	2				14		5	22
19-8					2			1	21		7	31
19-9									1			1
19-10	1								5			6
19-11								1	2			3
19-13								1	7			8
20-7		1			1							2
20-8					2				17		5	24
20-9									7			7
20-11									5			5
21-8									1			1
21-9	1			1	1				5			8
21-12									1			1
22-8									1			1
22-9					1							1
22-10							1		2			3
23-7									1			1
23-8											2	2
23-9			1						1			2
23-10				1					5			6
23-11			1								1	2
23-12									1			1
23-13							1		3			4
24-6									3			3
24-7							1	1				2
24-9	1								1	1	2	5
24-11									1			1
24-12									1			1
25-8								1				1
25-9									2		2	4
25-11								1	13			14
小計	1	4	3	3	9	1	8	160	1	25	215	

表5 石器集計表

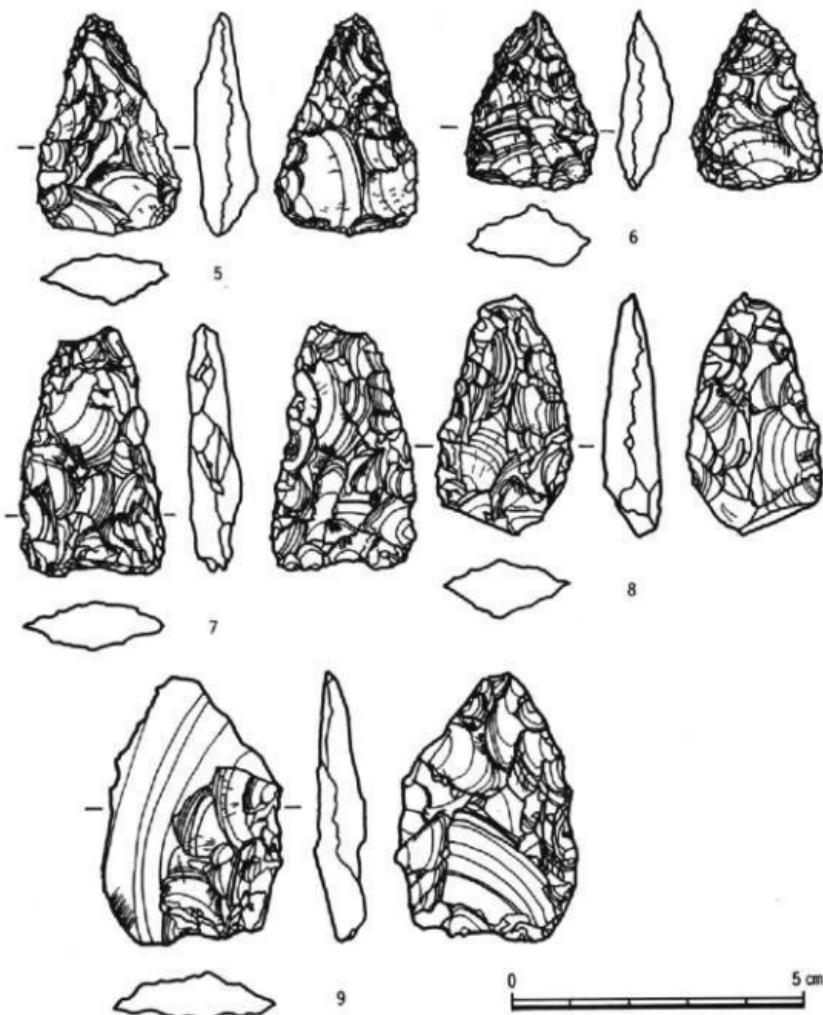
種別	尖頭器	石 鏟	石 鎌	石 匙	石 寬	搔 器	削 器	剝 片		磨 石	磨 石	計	
								加工有					
遺構内	3	10	3	5	20	2	7	25	395	1	2	27	501
包含層	1	4	3	3	9	1	0	8	160	0	1	25	215
計	4	14	6	8	29	3	7	34	555	1	3	52	716



第31図 石器実測図 (1)

表 6 石器観察表 (1)

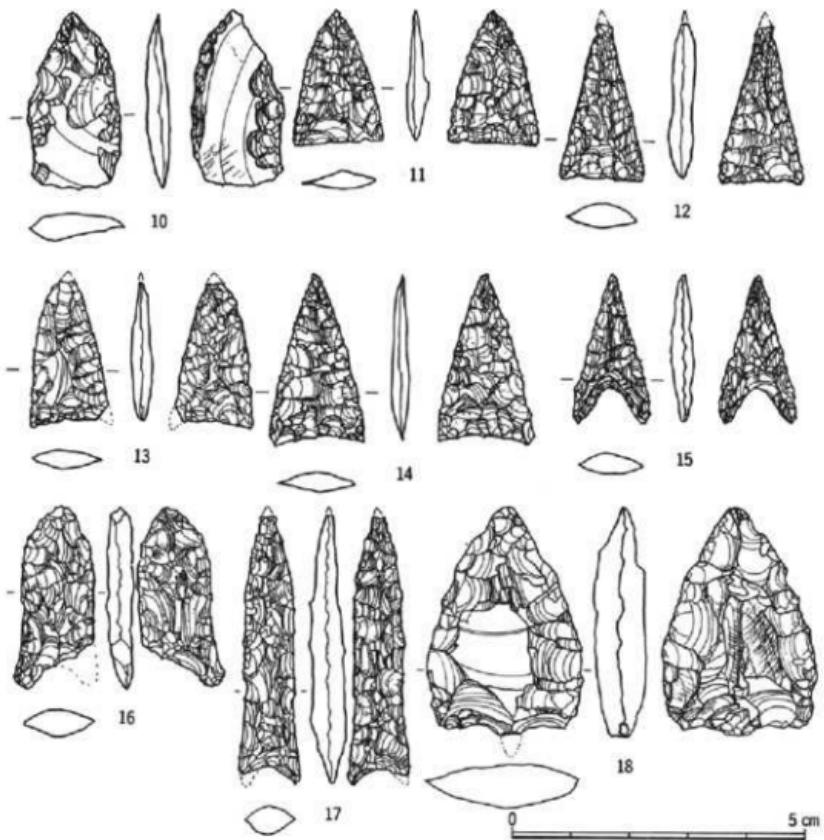
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	攜 要	出土地点・層
1	36.0	37.0	11.0	10.4	硬質頁岩	尖頭器 欠損	SK25-F1
2	35.5	33.5	8.0	8.1	硬質頁岩	尖頭器 欠損 片面加工	ST10-F1
3	55.0	40.0	11.5	26.1	硬質頁岩	尖頭器 欠損	SK53-F1
4	42.0	19.5	6.0	5.5	頁岩	尖頭器 上下端欠損	21-14-I



第32図 石器実測図（2）

表7 石器観察表（2）

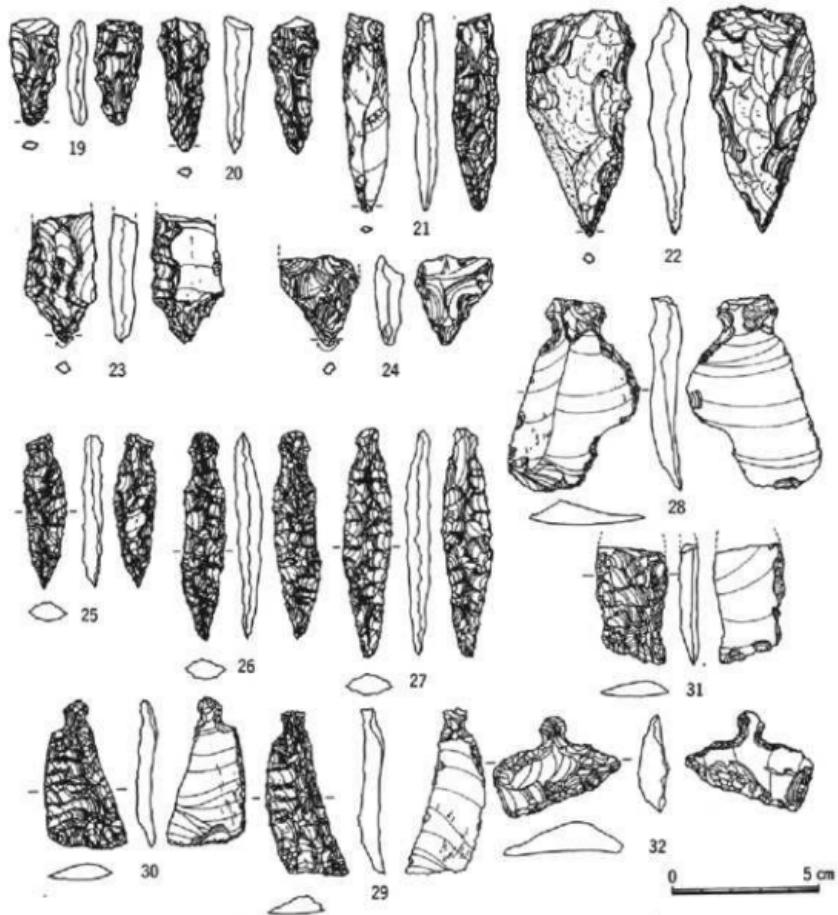
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	摘要	要	出土地点・層
5	37.0	24.5	8.5	6.5	頁岩	未製品		I9-10-I
6	30.0	22.5	10.0	4.9	頁岩	未製品		I8-11-H
7	42.0	24.0	7.5	7.9	頁岩	未製品 先端欠損		ST5-F1
8	41.5	22.5	9.0	6.9	頁岩	未製品		ST10-F1
9	46.0	28.0	7.5	9.6	頁岩	未製品 半片面加工		ST10-F1



第33図 石器実測図 (3)

表8 石器観察表 (3)

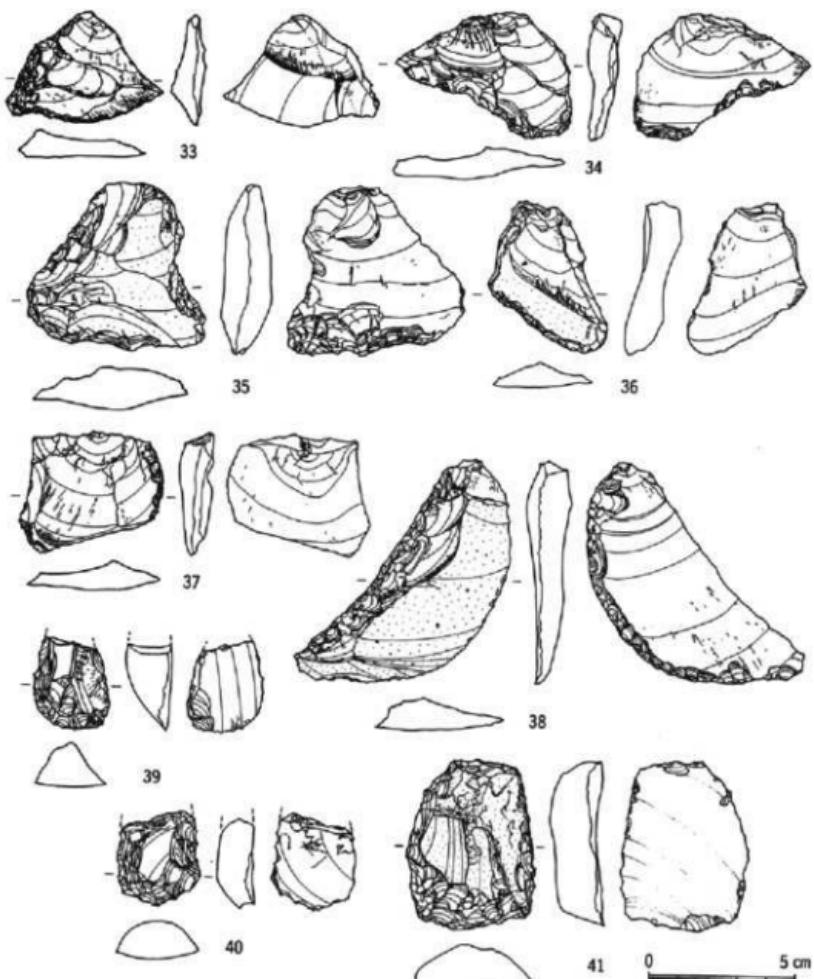
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	摘要	要	出土地点・層
10	30.0	16.0	4.0	1.9	頁岩	石鏃 1次剝離面を残す		ST10-F1
11	22.5	15.5	3.0	0.7	頁岩	石鏃		SK36-F1
12	27.0	14.5	4.0	1.3	頁岩	石鏃 先端欠損		SK52-F1
13	25.0	13.5	3.0	1.1	頁岩	石鏃 先端欠損 えぐり		ST10-F1
14	29.0	16.0	3.0	1.2	頁岩	石鏃 えぐり		ST13-F1
15	25.5	13.0	4.5	0.7	頁岩	石鏃 えぐり		24-9-I
16	31.0	13.5	4.5	2.2	頁岩	石鏃 基部欠損 えぐり		SK42-F1
17	46.0	11.0	5.0	1.9	頁岩	石鏃 先端欠損 えぐり		SK25-F1
18	39.0	26.5	7.5	7.3	頁岩	石鏃 (有柄) 欠損		21-9-III



第34図 石器実測図(4)

表9 石器観察表(4)

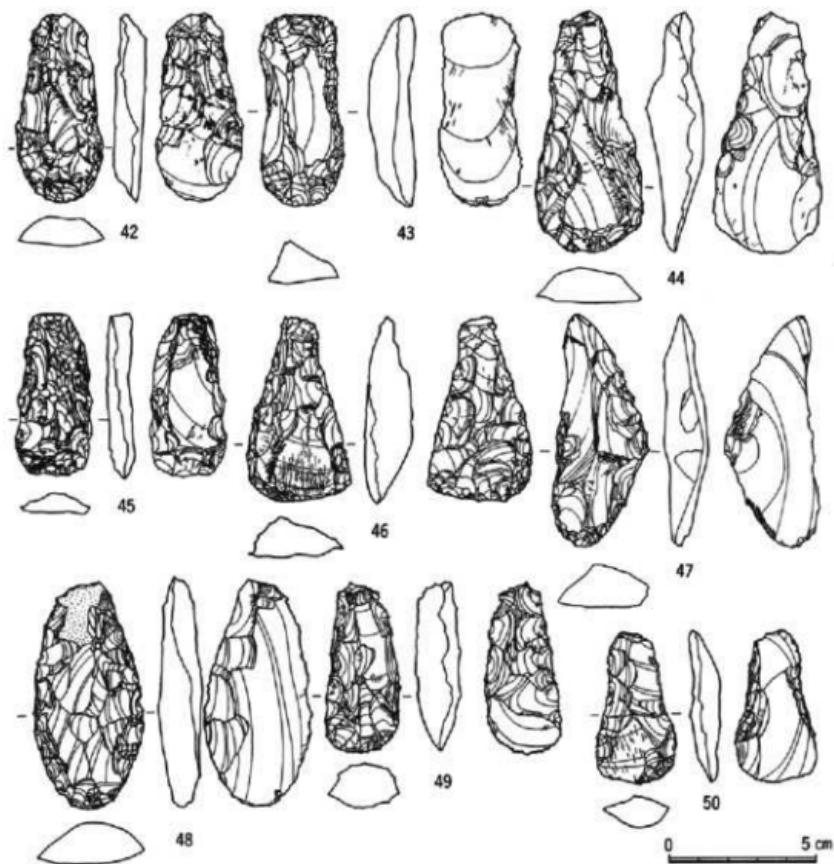
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	説 明	要	出土地点・層
19	36.0	16.0	5.5	3.3	頁岩	石錐 先端摩滅		ST3-F1
20	45.5	17.5	9.5	5.3	頁岩	石錐 欠損 先端摩滅		ST3-F1
21	67.0	15.0	12.0	8.5	頁岩	石錐 片面加工 先端焼け痕		20-7-II
22	76.5	35.0	11.0	32.2	頁岩	石錐 先端焼け痕		ST10-F1
23	44.0	24.0	8.0	9.7	頁岩	石錐 欠損 先端摩滅		23-11-I
24	30.5	26.5	9.0	6.5	頁岩	石錐 欠損 先端摩滅		23-9-I
25	51.5	14.0	6.5	4.1	頁岩	石匙 凝型		ST3-F1
26	70.5	15.5	7.0	7.8	頁岩	石匙 凝型 片面加工		SK25-F1
27	78.0	17.0	7.0	8.1	頁岩	石匙 凝型 片面加工		SK36-F1
28	66.0	45.5	8.0	15.3	頁岩	石匙 凝型		ST1-F1
29	58.0	27.5	6.0	8.3	頁岩	石匙 凝型 片面加工 欠損		23-10-I
30	50.5	27.0	5.0	6.2	頁岩	石匙 凝型 片面加工		19-7-II
31	41.0	24.0	5.0	6.6	頁岩	石匙 凝型 片面加工		SK41-F1
32	43.5	33.5	9.5	7.6	頁岩	石匙 横型 片面加工		21-9-I



第35図 石器実測図 (5)

表10 石器観察表 (5)

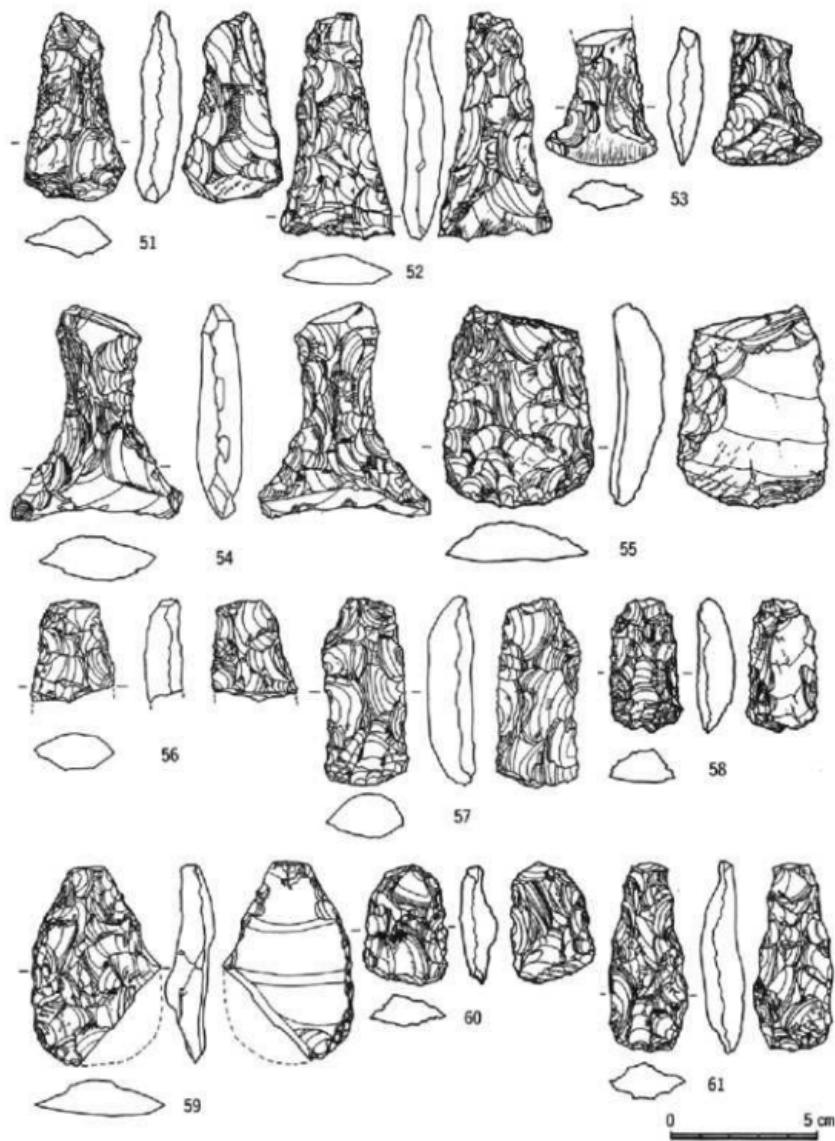
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	種	要	出土地点・層
33	37.5	53.0	9.0	12.0	頁岩	削器		SK32-F1
34	42.5	60.5	11.0	17.4	頁岩	削器	えぐり状刃部をなす	SK52-F1
35	58.0	60.5	15.0	50.2	頁岩	削器	原疊面をもつ	ST1-F1
36	52.0	41.0	8.5	17.1	頁岩	削器	原疊面をもつ	SK53-F1
37	42.0	44.0	12.0	18.1	頁岩	削器	下部欠損	SK25-F1
38	77.0	52.0	16.0	49.1	頁岩	削器	原疊面をもつ ポリッシュ有り	SK53-F1
39	31.5	26.0	15.0	11.3	頁岩	錘器	欠損	SK53-F1
40	33.0	28.5	12.5	14.7	頁岩	錘器	原疊面をもつ	SK25-F1
41	57.5	44.0	16.5	55.8	頁岩	錘器	原疊面をもつ	22-10-I



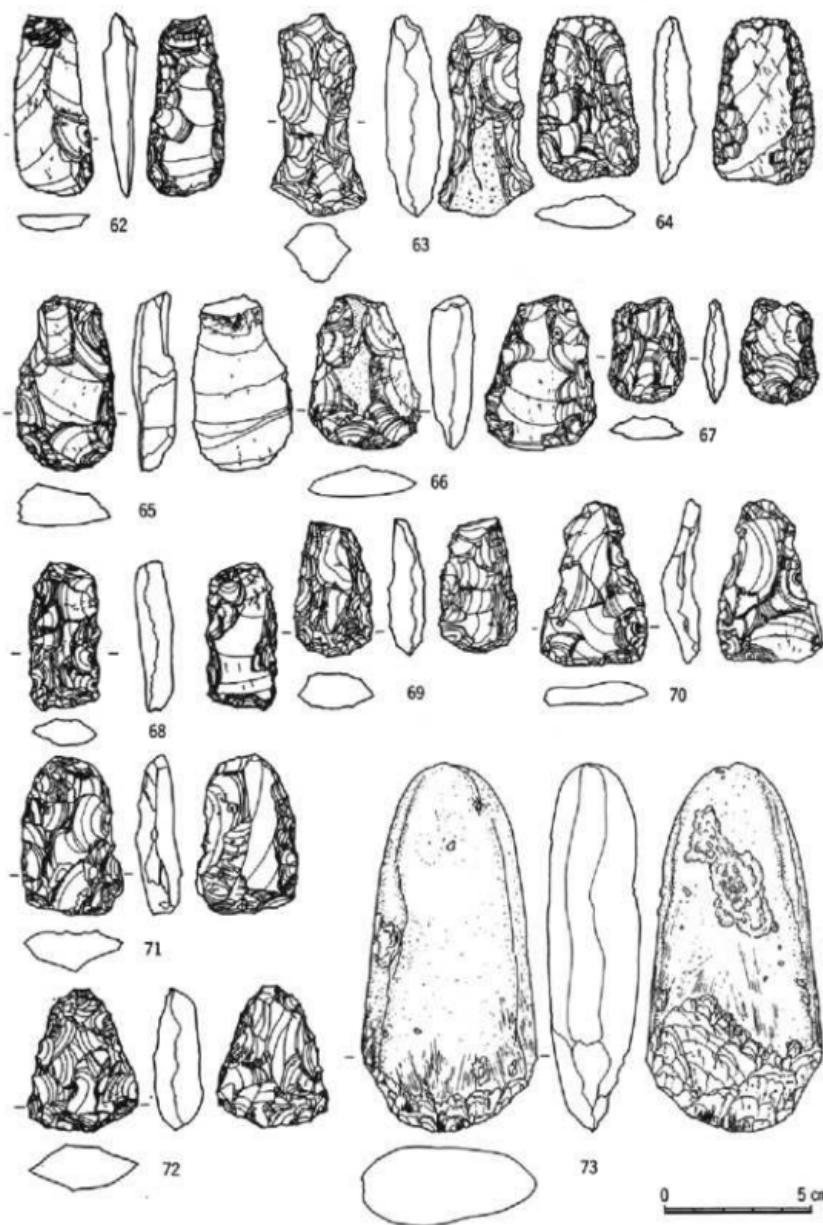
第36図 石器実測図 (6)

表11 石器観察表 (6)

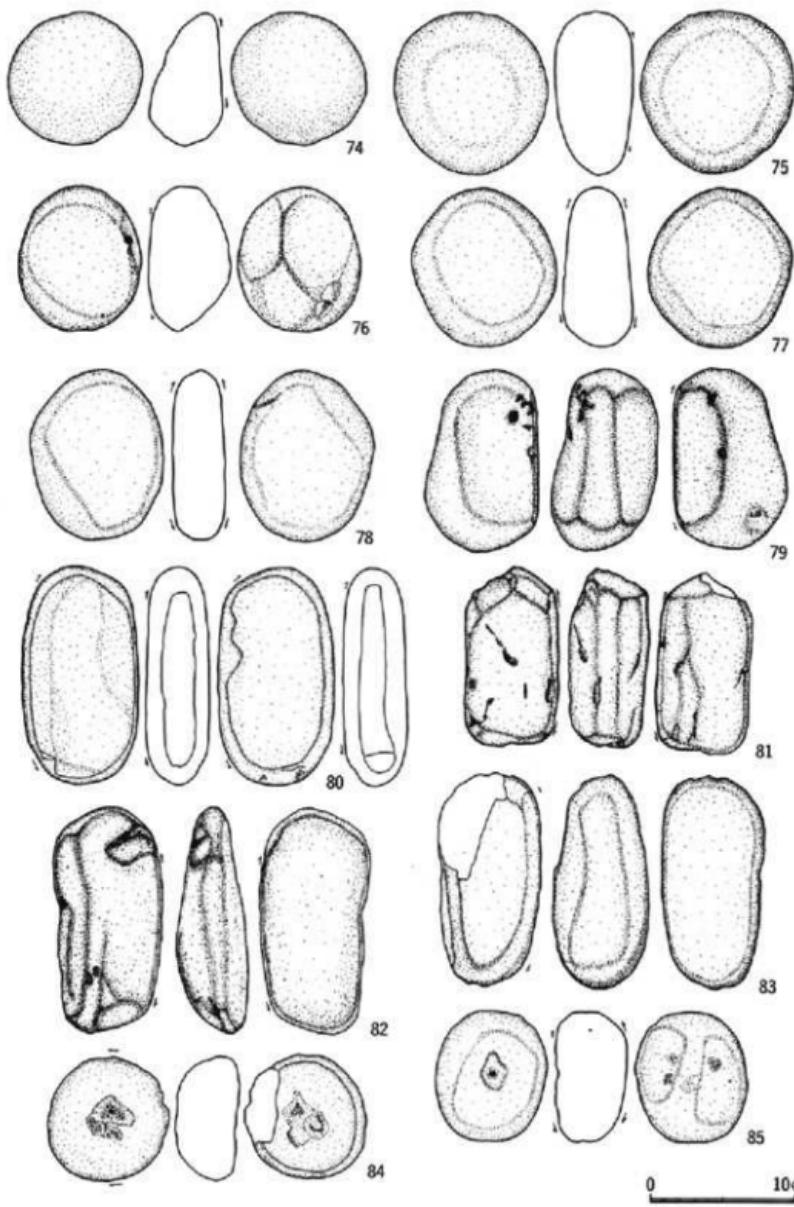
番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	摘要	出土地点・層
42	64.0	30.0	10.0	20.6	頁岩	麓状石器 両面加工 アスファルト付着	SK36-F1
43	65.0	26.0	13.0	25.0	頁岩	麓状石器 片面加工	SK36-F1
44	82.0	37.0	12.0	44.5	頁岩	麓状石器 半両面加工	SK36-F1
45	56.0	25.0	9.0	14.1	頁岩	麓状石器 両面加工	SK36-F1
46	63.0	35.0	16.0	30.8	玉髓	麓状石器 厚減 ポリッシュ有り	SK36-F1
47	79.0	31.0	14.0	28.8	頁岩	削器 片面加工	SK36-F1
48	78.0	37.0	14.0	36.5	頁岩	麓状石器 片面加工	SK36-F1
49	58.0	24.0	14.0	21.2	頁岩	麓状石器 両面加工	SK36-F1
50	51.0	27.0	11.0	12.3	頁岩	麓状石器 両面加工	SK36-F1



第37図 石器実測図 (7)



第38図 石器実測図（8）



第39図 石器実測図 (9)

表12 石器観察表(7)(第37図)

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 質	摘要	出土地点・層
51	65.0	33.0	11.0	28.1	頁岩	鑿状石器	SK42-F1
52	77.0	39.0	10.0	31.4	頁岩	鑿状石器(トランシェ様)	20-8-III
53	46.0	36.0	11.0	17.08	頁岩	鑿状石器(トランシェ様) ポリッシュ, 条痕	21-9-III
54	73.0	57.5	15.5	41.6	頁岩	鑿状石器(トランシェ様) ポリッシュ	19-7-III
55	68.0	50.0	13.0	53.8	頁岩	鑿状石器	SK38-F1
56	35.5	29.0	12.0	11.6	頁岩	鑿状石器 欠損	20-8-III
57	64.0	26.0	15.0	27.1	頁岩	鑿状石器	ST1-F1
58	46.0	24.0	11.0	14.7	頁岩	鑿状石器	19-8-II
59	68.0	44.5	12.5	32.5	頁岩	鑿状石器 欠損	19-8-III
60	42.0	27.0	12.0	12.4	頁岩	鑿状石器	ST5-F1
61	65.0	29.0	13.0	20.7	頁岩	鑿状石器	ST2-F1

表13 石器観察表(8)(第38図)

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 質	摘要	出土地点・層
62	62.0	25.0	11.0	15.5	頁岩	鑿状石器 片面加工 ポリッシュ有り	SK26-F1
63	68.5	24.0	18.5	34.8	頁岩	鑿状石器 欠損 原表面あり	ST9-F1
64	56.0	32.0	12.0	26.6	頁岩	鑿状石器	SK42-F1
65	60.0	33.0	13.0	35.7	頁岩	鑿状石器 片面加工	SK31-F1
66	53.0	38.0	10.5	27.5	頁岩	鑿状石器 原表面あり	22-9-I
67	36.0	25.0	9.0	8.2	頁岩	鑿状石器	ST1-F1
68	51.0	16.0	12.0	14.1	頁岩	鑿状石器	20-7-I
69	46.0	25.0	11.5	14.2	頁岩	鑿状石器 ポリッシュ有り	SK35-F1
70	56.5	36.0	8.0	17.6	頁岩	鑿状石器	19-7-III
71	54.0	33.0	14.0	22.9	頁岩	鑿状石器 下部に原表面を残す	SK42-F1
72	48.5	37.5	16.0	25.2	頁岩	鑿状石器	SK49-F1
73	12.5	60.0	27.0	319.5	砂岩	磨製石斧 刃部折損、再生の打ち欠き有り	SK43-F1

表14 石器観察表(9)(第39図)

番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 質	摘要	出土地点・層
74	91.0	90.0	50.0	615.0	花崗岩	磨石 両面、周縁に磨痕。片面に敲打痕	ST1-F1
75	112.0	106.0	53.0	800.0	安山岩	磨石 両面、周縁に磨痕	SK31-F1
76	101.0	95.0	56.0	710.0	安山岩	磨石 両面に磨痕	ST3-F1
77	110.0	98.0	48.0	670.0	安山岩	磨石 両面、周縁に磨痕。片面に敲打痕	SK29-F1
78	118.0	93.0	32.0	560.0	安山岩	磨石 両面に磨痕敲打痕	SK25-F2
79	123.0	75.0	67.0	890.0	安山岩	磨石 磨痕	20-8-II
80	150.0	80.0	42.0	770.0	花崗岩	磨石 両面、側面に磨痕	ST5-F1
81	122.0	52.0	54.0	640.0	安山岩	磨石 磨痕	ST10-F1
82	156.0	83.0	47.0	665.0	安山岩	磨石 磨痕	19-7-III
83	148.0	70.0	66.0	880.0	安山岩	磨石 磨痕	23-11-1
84	87.0	91.0	42.0	400.0	安山岩	凹石 両面に敲打痕	SK48-F1
85	90.0	76.0	48.0	470.0	花崗岩	凹石 磨面、敲打痕	20-8-III

搔器は3点、削器は6点ある。不整形な剥片に調整を加えたものが多い。

磨製石斧が1点出土している(第38図73)。刃部は折損するが、再生を意図したとみられる打ち欠きが認められる。

74~84は砾石器である。磨痕だけのものと敲打による凹痕を合せもつものとがある。

## VI 調査のまとめ

### 1 出土土器について

本遺跡の出土土器は、縄文時代早期の沈線文系土器、貝殻沈線文系土器、条痕文系土器他、縄文時代前期、縄文時代中期、縄文時代晚期、弥生時代中期といった時期的に広範でかつその内容も多岐にわたっている。県内において縄文時代早期の資料が極めて限られてはいたが、本遺跡を始めとして尾花沢市いるかい遺跡でもまとまった資料が出土しており、その様相が餘々に解明されつつある。特に本遺跡の絡条体圧痕文のある土器は、県内における子母口式併行土器の分布・様相を探る手がかりとなろう。

縄文時代早期の土器類型をまとめたのが表15で、型式名は編年的目安として記入してある。1類の沈線文土器は、田戸下層式期の沈線文様構成とは異なり、器体も堅敏に出来ている。斜行沈線・平行沈線文の文様構成は福島県竹之内遺跡の初期沈線文土器とは少々似てはいるが、本遺跡の場合彫りが深く文様が大振りである。県内では初出と思われ、田戸下層式期以前の所産ではなかろうか。2・3類はいわゆる田戸下層式期に当るもので、3類は図示したものが本遺跡出土のすべてである。県内でも3類の資料は微少である。4類は刺突・押引文で文様構成されており、明神裏III式期の範ちゅうに入るものとしてとらえておきたい。尼子岩陰遺跡、大畠山遺跡第III類の結節沈線によるものとは異なっている。5~9類は貝殻圧痕文による文様構成がなされており、大寺・常世式、田戸下層式に併行するものである。特に5類のぎざの無い貝殻膜縁圧痕文は、6~9類とは異なり注目される。10類は絡条体圧痕文をもつもので、子母口式に併行するものである。昭和51年度の試掘調査では、口縁部片が1点(第15図10-a)出土している。県内では細野II式とされる絡条体条痕文が1点、いるかい遺跡出土の条痕が貝殻によるものではなく、絡条体を用いたと考えられるもの2点など断片的にとらえられているにすぎない。11類は鶴ヶ島台式に相当するものである。12類は貝殻条痕文系の土器で楓木下層式に併行すると考えられる。13類a・bは、野島式に併行するもので、資料的には少量である。14類は縄文条痕、縄文繩文など早期末葉のものが出土している。16類は早期末葉に比定されるもので撚糸文のみの文様表現である。

表15 縄文時代早期の土器類別一覧

分類	文様構成	鉢図・遺物番号	織維混入	型式
1	斜格子状・平行・矢羽根状沈縁文	第16図1	無	初期北縁文
2	a 太沈縁文(横走・斜行)	第16図2~10	無・有	田戸下層
	b 沈縁文(横走・斜行)	第16図11~24、第17図25~33	無・有	〃
	c く字状・斜行沈縁文	第17図34・35	無	〃
	d 斜格子状沈縁文	第17図36	無	〃
3	a 爪形刺突文+横走太沈縁文+刺突文	第17図37~40	無	〃
	b 爪形刺突文(擦痕)	第17図41	無	〃
4	a 刺突文+横走沈縁文	第17図42~45	無	明神裏田
	b く字状刺突文+横走沈縁文	第17図46	無	〃
	c 押引文+刺突文+沈縁文	第17図47・48	無	〃
	d 押引文+刺突文	第17図49	無	〃
	e 押引文	第17図50	無	〃
5	貝殻腹縁压痕文(壓痕でない貝)	第18図51~55	無	大寺・常世
6	貝殻腹縁压痕文(壓痕状)	第18図56~61	無	〃
7	貝殻腹縁压痕文+沈縁文	第18図62・63	無	〃
8	貝殻腹縁压痕文+横走沈縁文+爪形刺突文	第18図64	無	田戸下層
9	貝殻压痕文、条痕文+沈縁文	第18図65~67	無	大寺・常世?
10	a 路条体压痕文	第19図68~71、第24図165	無・有	子母口
	b 爪形刺突文+路条体压痕文	第19図72	有	〃
11	微隆起縫文+刺突文+沈縁文	第19図73	無	鶴ヶ島台
12	a 円形刺突文+沈縁文	第19図74	有	櫻木下層
	b 半截竹管刺突文(微隆起縫・条痕地)	第19図75~80	有	〃
	c 半截竹管押引文(内面条痕)	第19図81~85	有	〃
	d 半截竹管刺突文、押引文	第20図86~94	有・無	〃
	e 爪形刺突文	第20図95・96	有・無	〃
13	a 亂起縫文(条痕地、内面条痕)	第20図97~98	有	野島
	b 太沈縫文(条痕地、内面条痕)	第20図99~101	有	〃
	c 横走・斜行太沈縫文(内面条痕)	第20図102・103	有	〃
14	縄文条痕文、縄文縫文	第22図127~136	有	般入島下層・櫻木畠
15	体部・底部片(条痕条痕、条痕無文、無文)	第21図104~119、第22図120~126	有・無	櫻木下層・田戸下層
16	燃糸文	第23図137~143	有・無	早期末葉

にひやく寺遺跡出土の縄文時代早期の土器群は、以上のように、初期沈線文系土器、田戸下層式期以降、早期末葉までのものを含んでいる。いるかい遺跡を見るに、本遺跡には無い日計型押型文土器、田土上層式、物見台式期などがあり、尾花沢盆地と村山盆地南半における地理的な違いがうかがわれる。また、いるかい遺跡では硬質な土器が多く見られるのに対して、本遺跡では軟質のものが主体をなすようである。

前期の土器は、1～5類が上川名II式期併行(一部大木1式期を含む)、6類が大木1式期併行、7類が大木6式期に併行するものと考えられる。

中期の土器は、大木8b～10式期併行のものがあり、大木8b式が主体をなしている。住居跡、小土壤からの出土が多く、出土地点に偏りがあるようである。

晩期の土器は、大洞C<sub>2</sub>式期に相当する。資料は図示したものですべてである。

弥生時代の土器は、中期初頭のものとしてとらえておく。これらはSK17土壤を中心に、縄文時代晩期の土器と同じ地点よりの出土があり、偏りが見られる。

## 2 遺構と遺跡の性格について

十分な吟味検討を加えることができなかつたが、縄文時代早期の中葉から一つの生活領域として営なまれてきたと考えられる。各住居跡については、その時期を明確にしえなかつたが、遺構間のまとまりから五つのブロックに分けられ、これが各時期のまとまりに通じるのではないかと考えられる。また、各住居跡からは、炉跡が検出されておらず、野外炉的施設の可能性も考えられるのではないかろうか。石製品に、箋状石器、磨石類の示める割り合いが多い事(時期的、形態、機能の分析におよばなかったが)や、祭祀的遺物の欠如などともからめて立地的環境から、山地における食物採集のための基地的役割りを本遺跡が、縄文時代の各時期を通じて担っていたものと推測できるのではないかろうか。

## 〈引用・参考文献〉

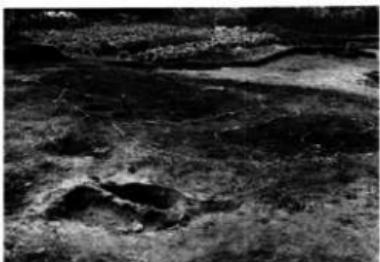
- 佐藤庄一他 「分布調査報告書(4)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第12集 山形県教育委員会 1977年
- 名和達朗他 「分布調査報告書(9)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第84集 山形県教育委員会 1984年
- 阿部明彦 「いるかい遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第69集 県教育委員会 1983年
- 馬目順一他 「竹之内遺跡—縄文時代早期の調査—」 いわき市埋蔵文化財調査報告第8号 いわき市教育委員会 1982年
- 小林行雄他 「大畠貝塚調査報告」 福島県・いわき市教育委員会 1975年
- 加藤乾編 「村山市史」別巻1 原始・古代編 村山市史編纂委員会 1982年
- 柏倉亮吉編 「山形県史」資料11篇考古資料 山形県 1969年
- 佐々木洋治他 「熊ノ前遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第16集 県教育委員会 1979年
- 山口博之 「山形県内の早期中葉の土器群について」「弓張平A遺跡」 山形県西村山郡西川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 西川町教育委員会 1980年

# 図 版



図版1 にひやく寺遺跡近景 (南から)





図版2 にひやく寺遺跡近景・調査状況

遺跡近景（南から）

試掘状況・西側

鍵入式

ST6・7・8・9・11 検出状況（南東から）

遺跡近景（東から）

試掘状況・東側

調査状況

ST2 挖り下げ状況



図版3 土層・遺構検出状況

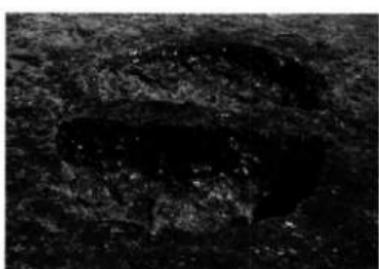
南北土層堆積状況（北から）

ST10 竪穴住居跡周辺（北から）

ST8・7 竪穴住居跡周辺（南から）

ST1 竪穴住居跡（北から）

ST7・9・11 竪穴住居跡周辺（南から）



図版4 精査区北西隅

精査区北西隅近景（東から）

ST5 壁穴住居跡・SK42 土壙（北から）

SK25・40 土壙（南から）

ST10 壁穴住居跡（北から）

SK27 土壙（南から）



図版5 精査区北西隅

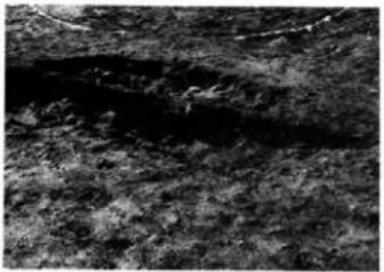
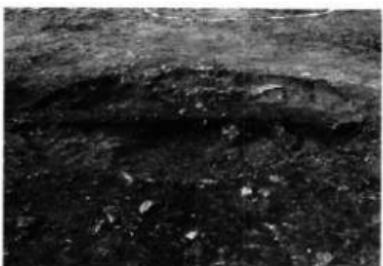
精査区北西隅近景（南から）

ST3 穫穴住居跡・SK36 土壌（西から）

SD37 出土鉄製品（南から）

ST3 穫穴住居跡・SK36 土壌（東から）

SK22 土壌（北から）



図版 6 精査区北側

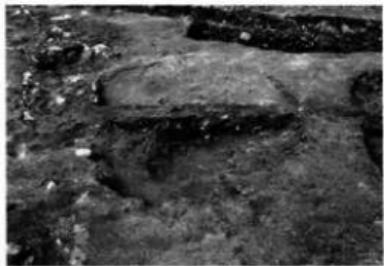
SK43・38・39・25・40 土壌 (西から)

SK39・38 土壌 (南から)

SK24 土壌 (東から)

SK33 土壌 (東から)

ST1・2 穂穴住居跡 (西から)



図版7 土壌

SK31・32・34 土壌（南から）

SK32 土壌（南から）

SK26 土壌（南から）

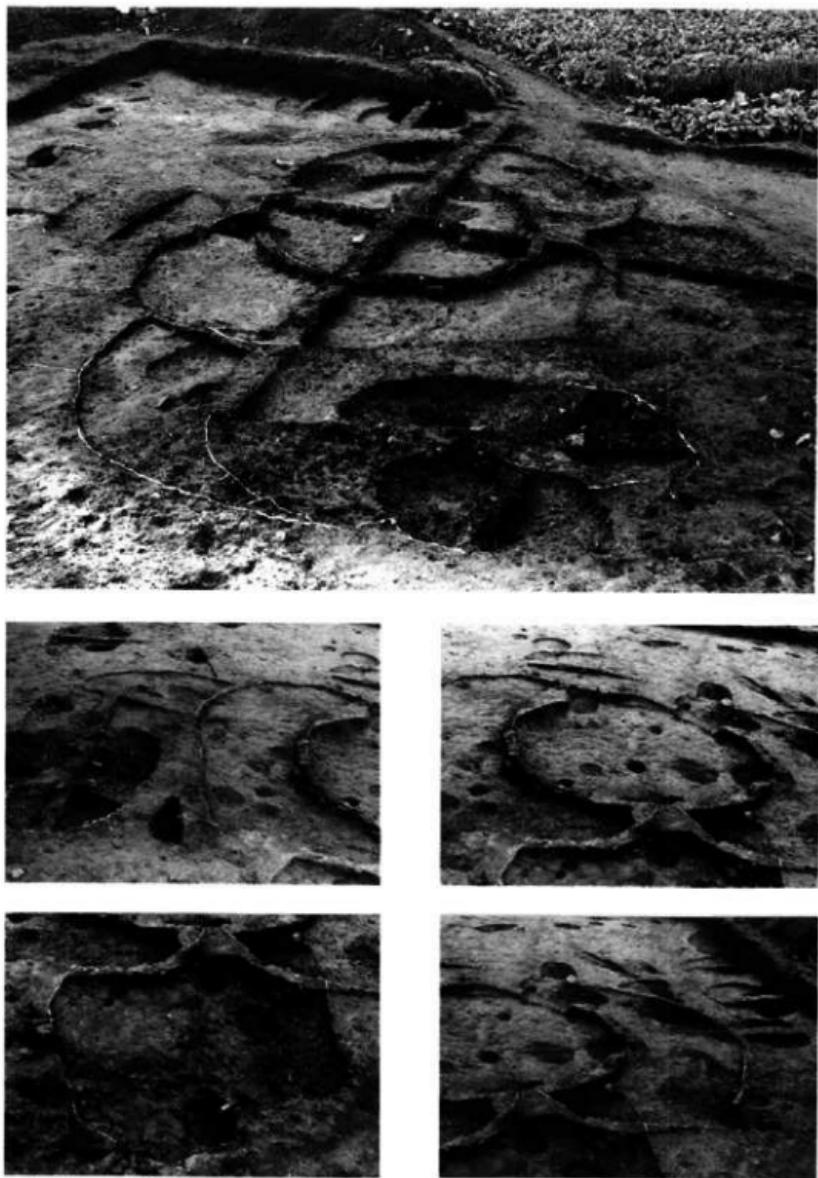
SK17 土壌（東から）

SK34 土壌（南から）

SK31 土壌（南から）

SK21 土壌（東から）

SK17 土壌土層（北から）



図版8 精査区南西隅

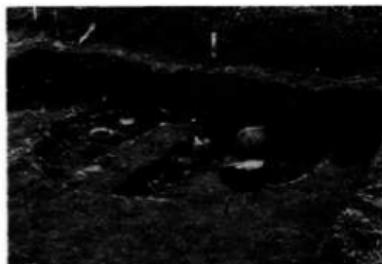
精査区南西隅近景（東から）

ST11・9 壺穴住居跡（北から）

ST7 壺穴住居跡（北から）

ST6 壺穴住居跡（北から）

ST8 壺穴住居跡（北から）



図版9 精査区南東隅

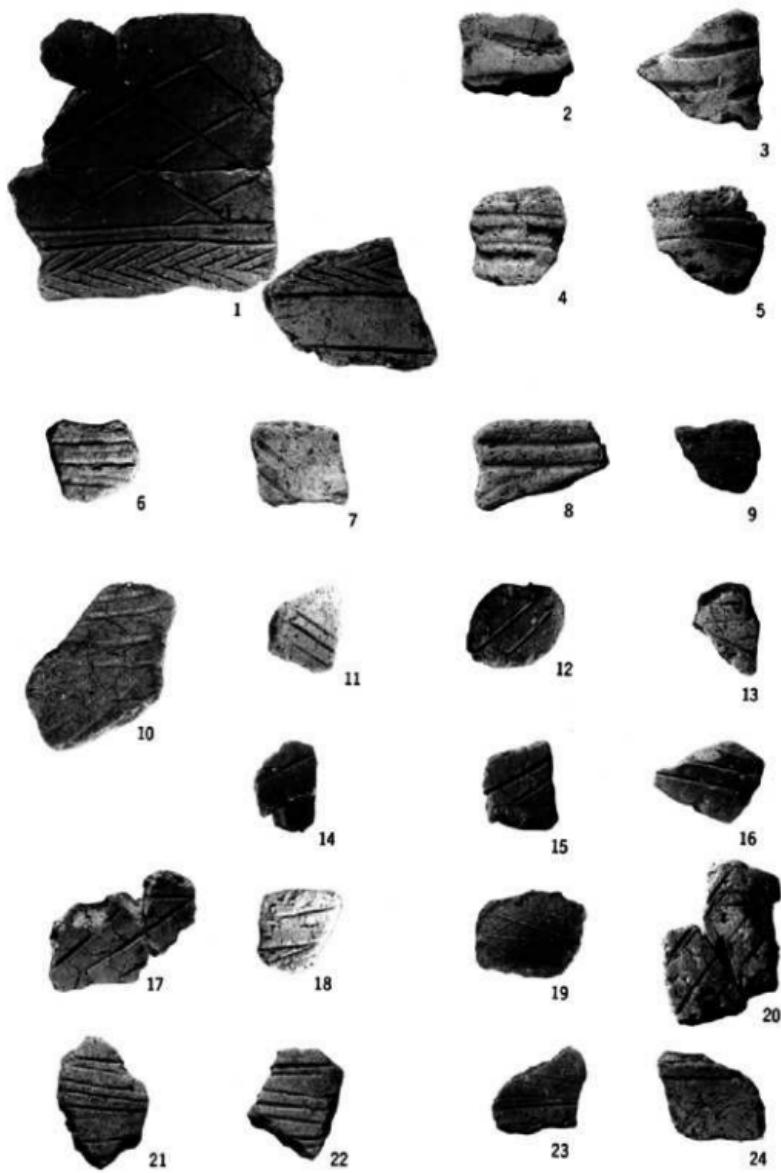
精査区南東隅近景（南東から）

ST14 壺穴住居跡（北から）

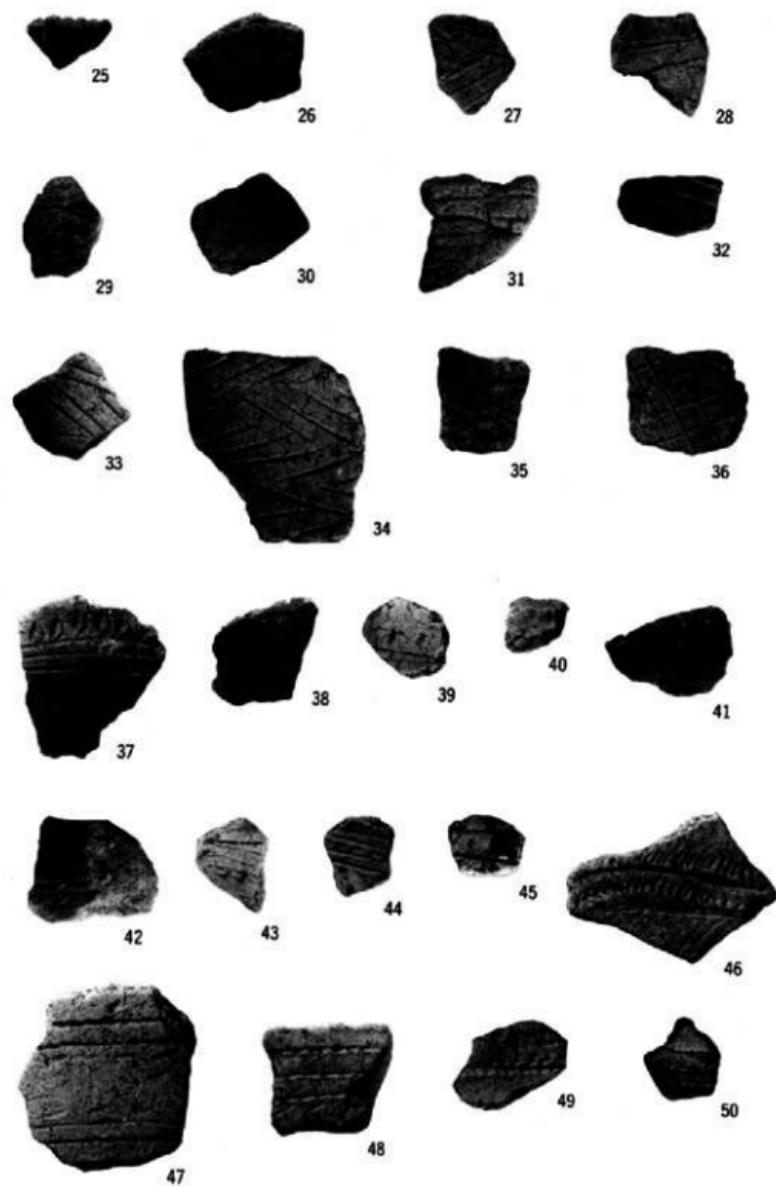
ST15 壺穴住居跡（北から）

ST12・13・16 壺穴住居跡（北から）

SK23 土壙（北から）



圖版10 土器 (1) S =  $\frac{1}{2}$



図版11 土器 (2) S =  $\frac{1}{2}$



51

52



53

54

55



56

57

58

59

60



61

62

63

64

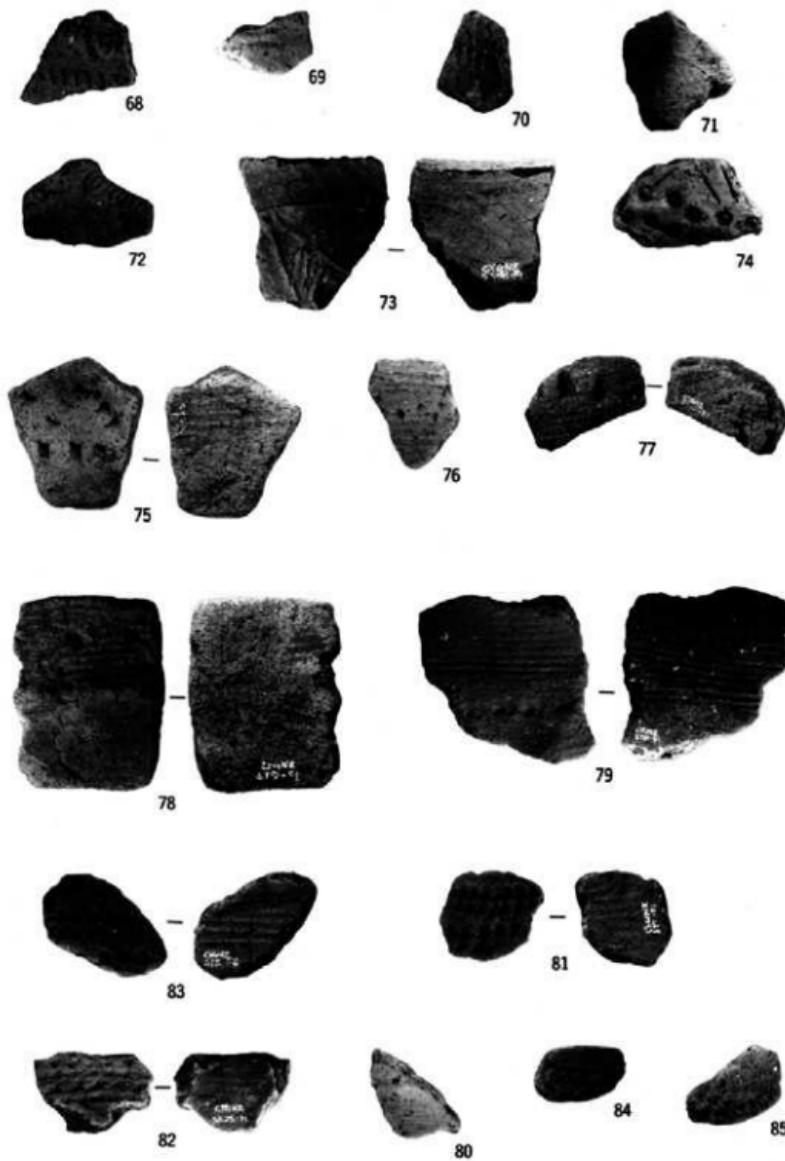


65

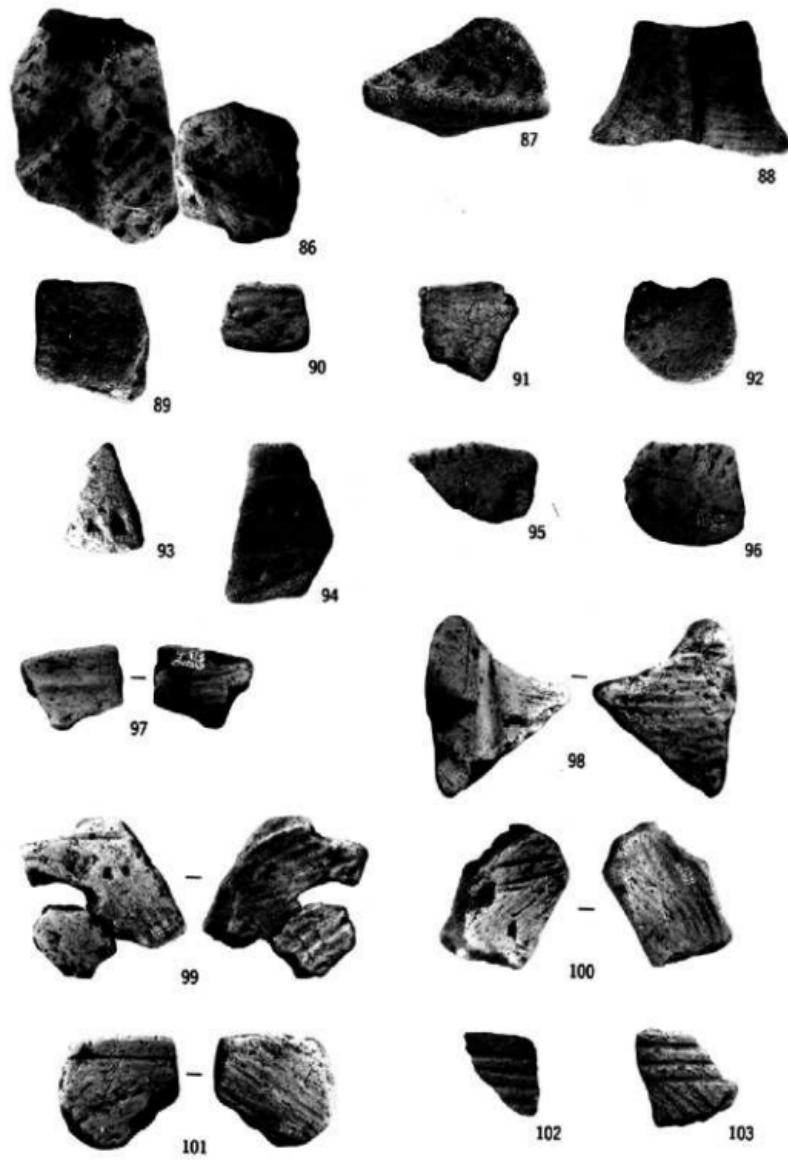
66

67

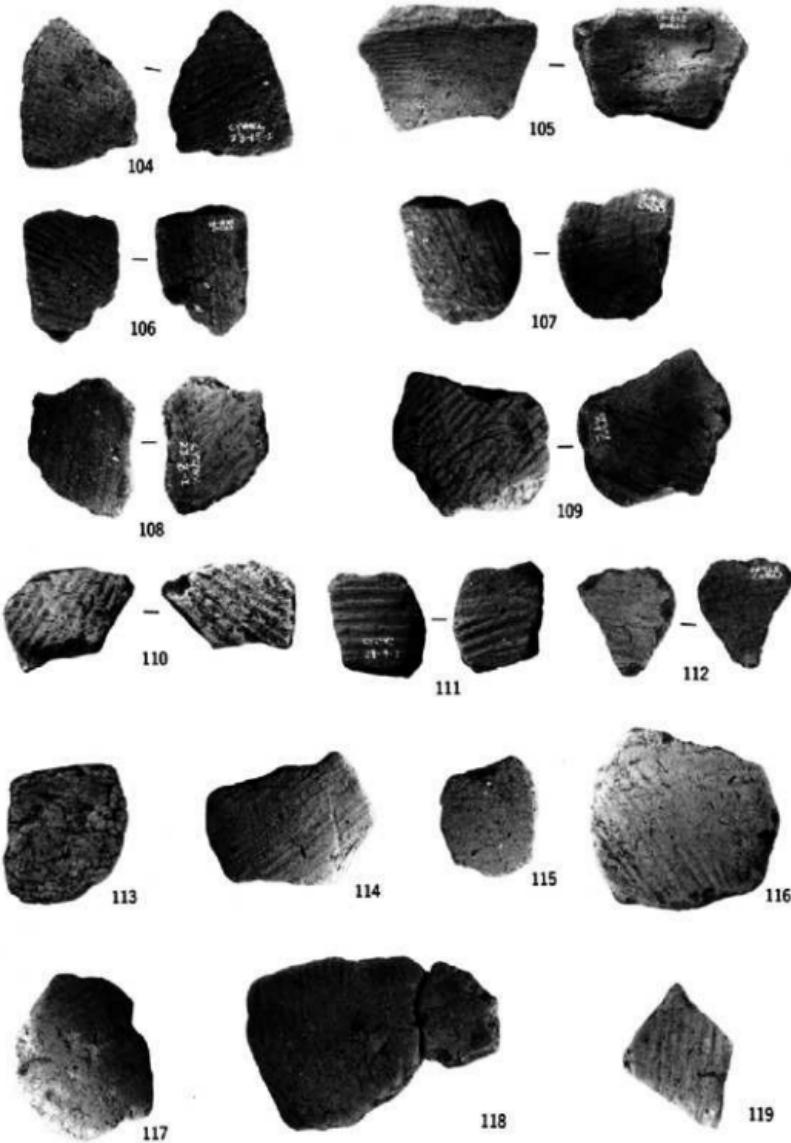
図版12 土器 (3) S =  $\frac{1}{2}$



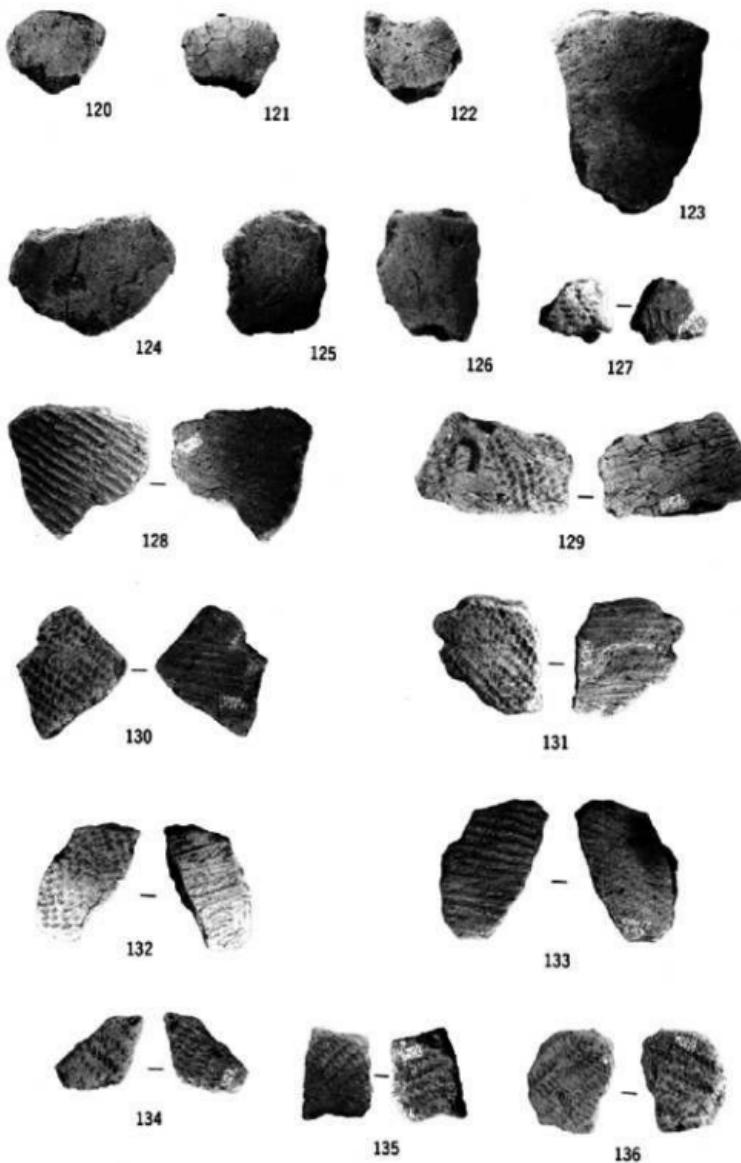
図版13 土器 (4) S =  $\frac{1}{2}$



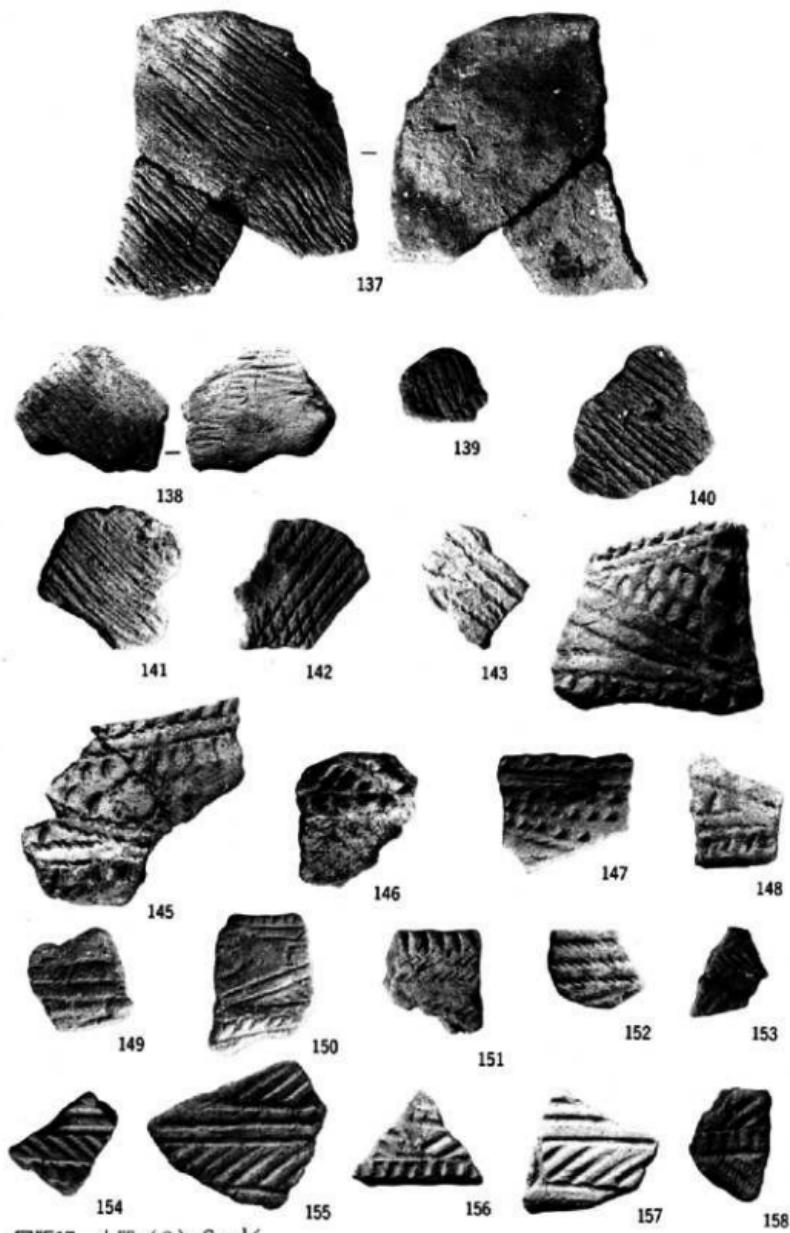
図版14 土器 (5) S =  $\frac{1}{2}$



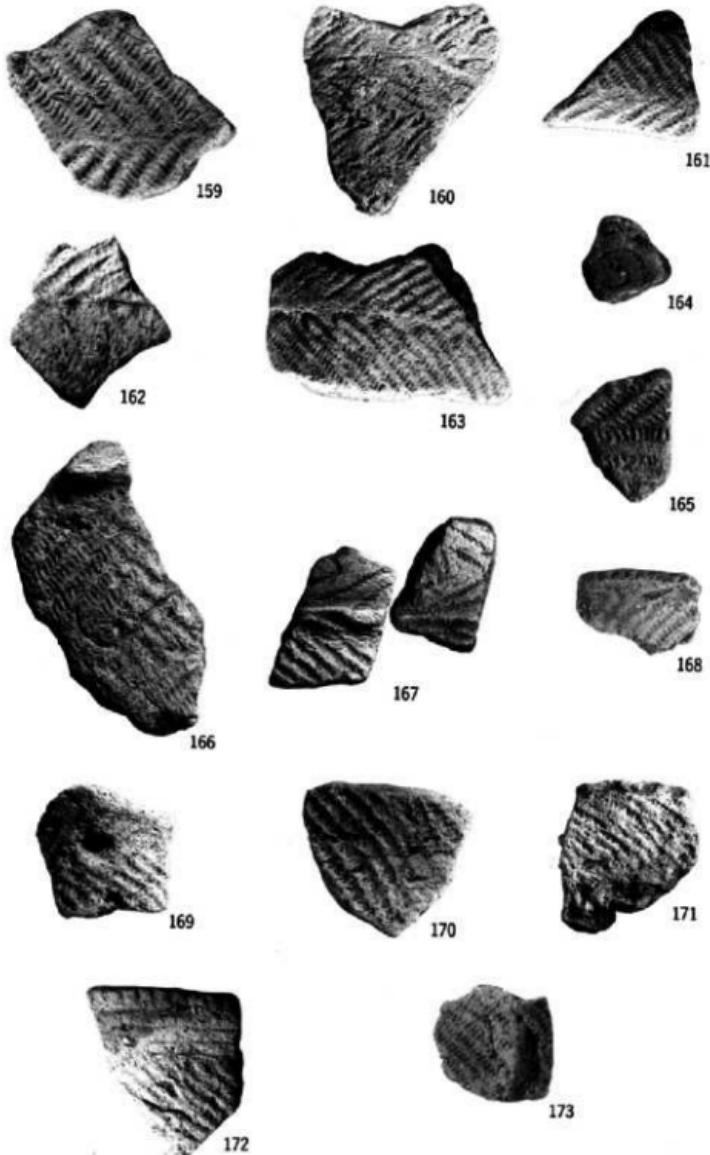
図版15 土器 (6)  $S = \frac{1}{2}$



圖版16 土器(7)  $S = \frac{1}{2}$



図版17 土器 (8)  $S = \frac{1}{2}$



図版18 土器 (9) S =  $\frac{1}{2}$



图版19 土器 (10)  $S = \frac{1}{2}$



图版20 土器 (11)  $S = \frac{1}{3}$



191



193

図版21 土器 (12) S =  $\frac{1}{3}$



197



198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208

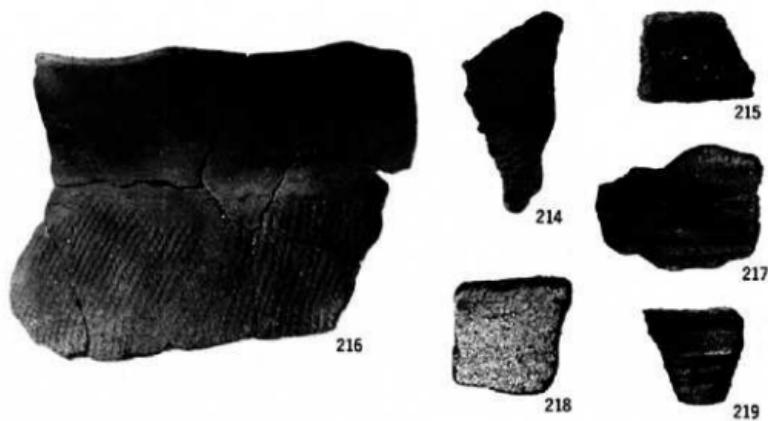
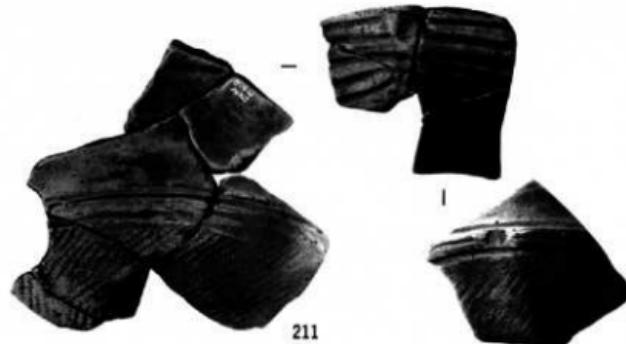


210

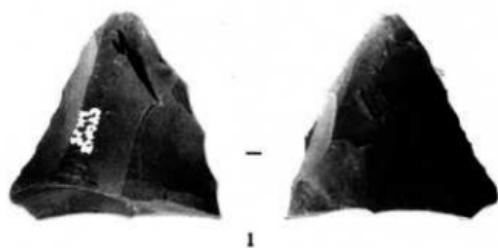


209

図版22 土器 (13) S =  $\frac{1}{8}$



图版23 土器 (14)  $S = \frac{1}{3}$



1



2



3



4

圖版24 石器 (1)  $S = \frac{1}{2}$



5



6



7

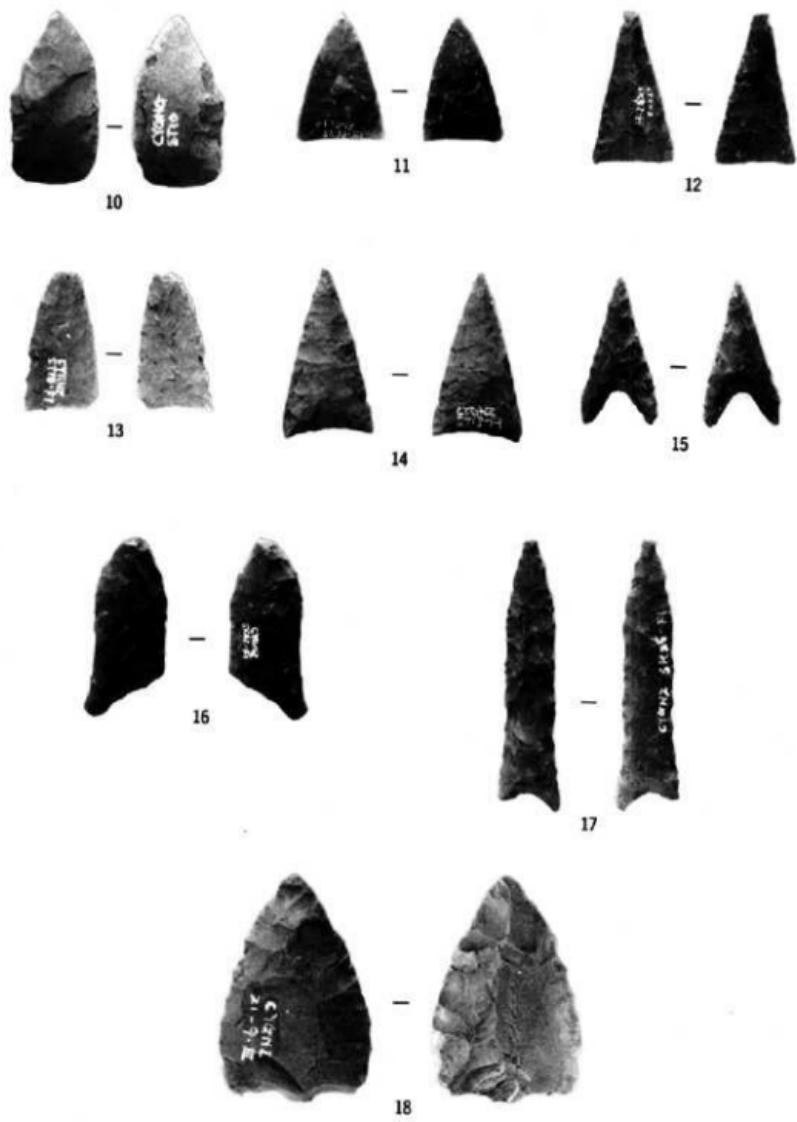


8

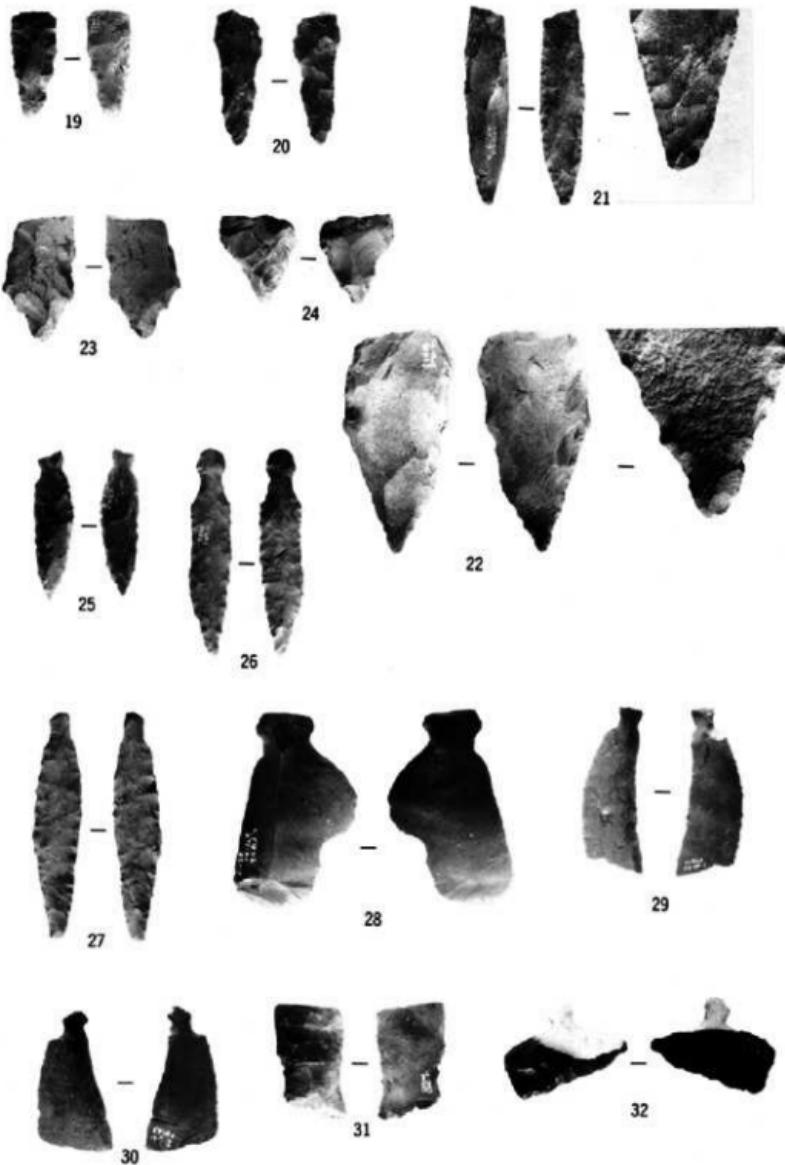


9

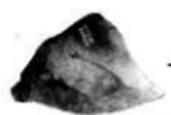
図版25 石器 (2) S = 1/4



圖版26 石器 (3)  $S = \frac{1}{4}$



圖版27 石器 (4)  $S = \frac{1}{2}$



33



34



35



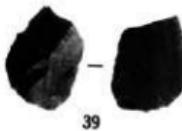
36



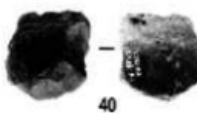
37



38



39



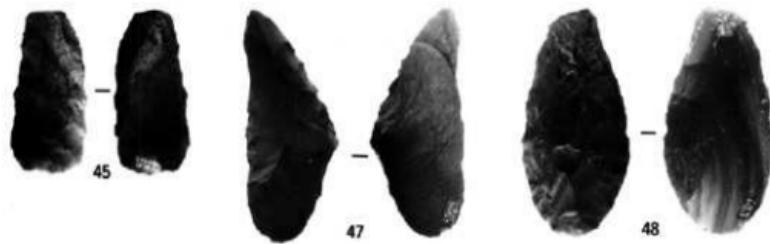
40



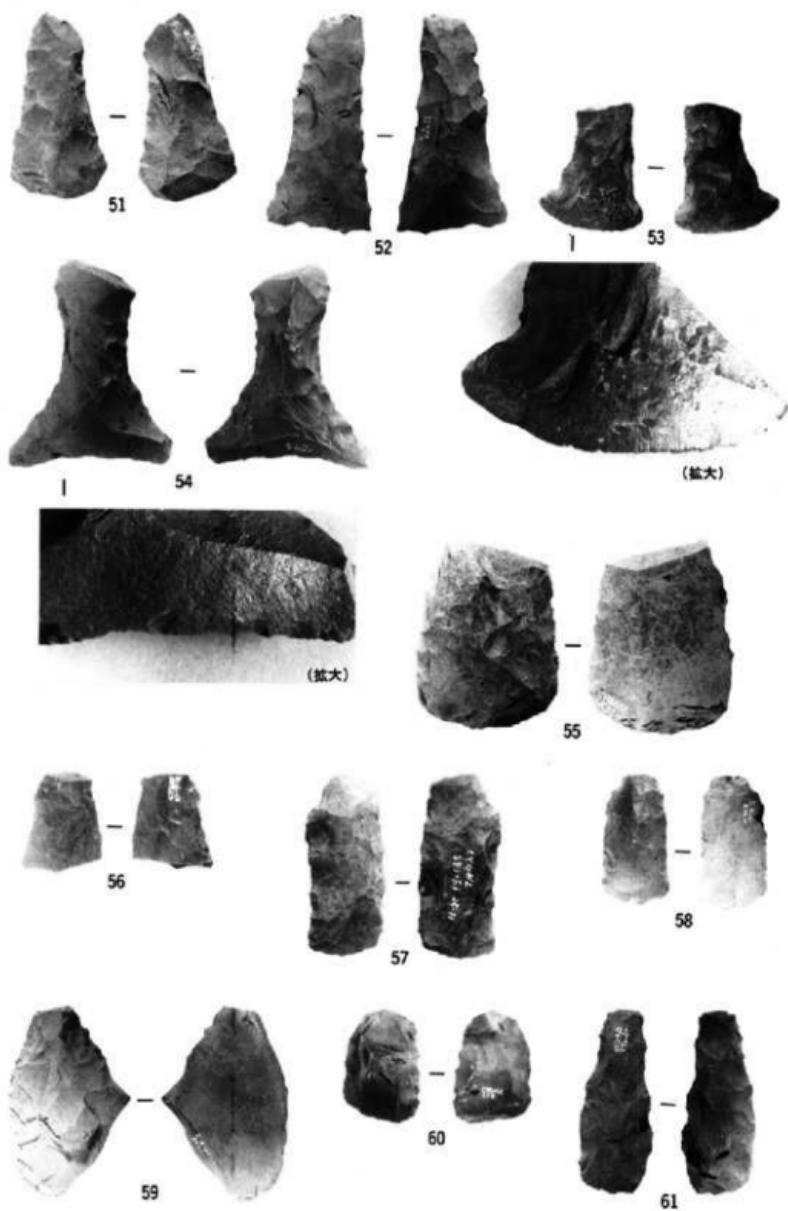
41



圖版28 石器 (5) S =  $\frac{1}{2}$



圖版29 石器 (6)  $S = \frac{1}{2}$



图版30 石器 (7)  $S = \frac{1}{2}$



62



63



64



65



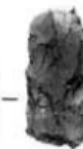
66



67



68



69



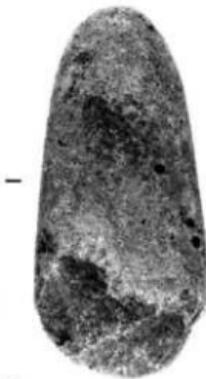
70



71



73



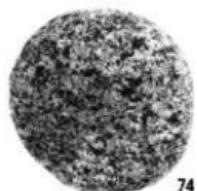
72



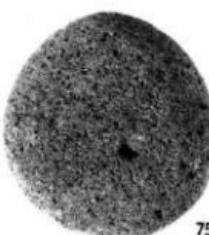
—



図版31 石器 (8) S =  $\frac{1}{2}$



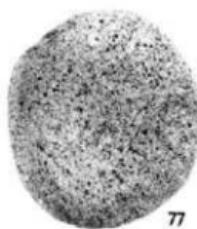
74



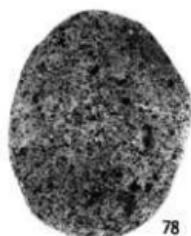
75



76



77



78



79



80



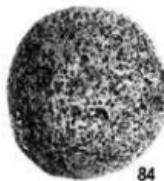
81



82



83



84



85

図版32 石器 (9) S = 1%

---

山形県埋蔵文化財調査報告書 第92集

にひやく寺遺跡  
発掘調査報告書

昭和60年3月25日 印刷  
昭和60年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 梶大風印刷

---